



東方三界黃龍外伝「リーランの仙界騒動記」

文・絵 小龍

表紙絵 押根こむる

目次

一章 プロローグ

恋はある日突然に 7 / 邂逅 19 / プレゼント 26 / 秘密 45 / 双子 54

二章 蟠桃会

キスの定義 66 / 偃月の溜息 82 / 我的第一个吻 94 / 七人の小人 105
伯母上たち 124 / 桃園の誓い 137 / 失踪 146

三章 太上道君

街道にて 155 / 弥羅宮 169 / 梨蘭のお願い 176 / 後継指名 187

四章 太上老君

敖丁伯父さん 201 / 絶体絶命 211 / 玄都 226 / 逢瀬 237 / 幕間 247

五章 泰山府君

再会 251
泰山府へ 264
長官室 279
アヒル二号 286

六章 グランドフィナーレ

紗衣 295
明明 299
敖俊 302
梨蘭 309

あとがき 313

◎ 主な登場人物

リーラン
梨蘭

主人公。五歳。西王母の後継者として認識されている。

メイメイ
明明

陽輝と奏欽の子供。五歳。梨蘭の友達。敖俊とは双子。

ごうしゅん
敖俊

双子の片割れ。同じく梨蘭とは赤ん坊の頃からの友達。

ひりゅう
飛龍

西海龍王家の一子。水雲宮に居候している。梨蘭のお守り役。

せきていくん
赤帝君

美形の四方将神。梨蘭の意中の相手となる。



◆ 保護者たち

えんげつ

偃月

梨蘭の父親。仙界に出入りしているが、仙道ではない。

きら
吉羅公主

梨蘭の母親で西王母の娘。普段は清林山で養生している。

シャロン
沙龍

偃月の姉で梨蘭の伯母。水雲宮で梨蘭の面倒を見ている。

くらい
九雷

沙龍の婚約者。天界軍元帥。

ようき
陽輝

西方軍大将。九雷の親友。明明と敖俊の父。

そうきん
奏欽

南海龍王。陽輝の妻で、明明と敖俊の母。

さい
紗衣

水雲宮の庶務担当。昔は刑吏府に勤めていた。

◆ パンダ戦隊

パンダレッド

暑苦しい正義漢の持ち主。

パンダブルー

クールでニヒルな性格。

パンダグリーン

自然を愛する芸術家タイプ。

パンダイエロー

気は優しく力持ち。好物はカレー。

一章 プロローグ

1 恋はある日突然に

数年前から、沙龍シャロンの頭を悩ませているものがある。

それは、朝一に寝室に飛び込んでくる、身長一メートルに満たない『ミニ・デストロイヤー』だった。

「伯母上ー！ 今日もわらわの勝ちじゃ！」

そんな第一声と共に、まだ毛布にくるまっっている沙龍の真上にフライング・ボデイ・プレスをかけるのが、梨蘭流リーランの朝の挨拶だった。

「……ゴフツ」

すいうんきゅう

水雲宮 は頑丈な要塞でもあるので、仙術も五行術も使えない梨蘭に部屋を破壊される心配はないが、この五歳児は有り余る体力と気力を、伯母である沙龍に遠慮なくぶつけてくる。

当初、姪っ子を預かることになったとき、沙龍は幼子が母と離れて暮らすことに対して多少心配したものだ、そんな心配はどこへやら。

「一体誰なんだ……。この五歳児にプロレス技を教えるのは……」

沙龍はまだ半分夢の世界に居るのだが、現実的な肋骨圧迫の痛み、じわじわと覚醒を余儀なくされる。

小さな梨蘭とはいえ、沙龍自身もかなり小柄な部類に入る、ノー・ガードのところ、突進してくればダメージはそれなりに負う。

「ランラン……、伯母サンは疲れてるんだ。もう少し寝かせろ」

毛布の中に潜り込む。

梨蘭はムツとして、沙龍を引っ張り出そうとするが、やはり力では敵わない。

いつもは数秒の攻防で起きてくれるのだが、今日はなぜか沙龍が強固に毛布から出ようとしないので、梨蘭は一旦諦めて、その枕元に座り込んだ。

「なぜ伯母上はいつも朝は疲れておるのじゃ？」

「夜の仕事が激しいんだ。ゆうべなんか、酷かった……」

「“仕事”？ 伯母上のやってる、ヨロズ請負仕事か？」

沙龍は碧霞元君へきかげんくんと二人で興信所のような仕事をしている。事務所を開いているわけではないので毎朝定時に出勤する必要はないのだが、このご時世、それなりに仕事は舞い込む。

「いや、そっちじゃなくて、めくるめく系の、一回だけならパラダイスな、連荘になると地獄に——」

と、毛布の中に籠った声で真面目に説明しようとしたところ、その沙龍の埋もれた顔に枕が落とされた。

「フガ……」

「沙龍……、それ以上言うな」

沙龍に枕を落としたのは九雷くらいである。

梨蘭がその九雷を見上げて、弾んだ声を出した。

「おお、九兄（注…「〇兄」は年上の男の人に対する尊称）、在宅だったのか」

普段、梨蘭がこの朝一攻撃をしい沙龍の寝室を突撃するときには、既に九雷は出勤していることが多いので、この時間に会えるとは思っていなかったのだろう。

「今日は非番なのじゃな？ ならば、伯母上を放っておいて、九兄と食べるの

じゃ」

「梨蘭、朝食まだなのか？」

「ウム」

この五歳児は一人で食事をするのが嫌いなのである。

だから、九雷が出勤した後の水雲宮で、朝食と一緒に食べてくれる人を求め、こうやって沙龍の寝室にやって来るのだ。

たまに、どんなに起こしても沙龍が起きないときがあるので、そういうときは水雲宮の従業員に無理矢理食事を付き合わせるのだが、彼らは『公主』と一緒に食卓に付くことには躊躇いがある。

梨蘭がどんなに「遠慮するでない」と言っても、いつの間にか給仕に回っている彼らと、楽しく一緒に食事をすることは出来ない。

どうやら九雷が梨蘭のお守りをしてくれそうなので、沙龍は遠慮なく夢の世界へ戻ろう、と思った。

が、梨蘭が気になることを言ったので、少し目が覚めてしまった。

「そうそう、九兄には聞きたいことがあったのじゃ」

「なんだ？」

「父上に聞くのもどうかと思ったのでな。かといって、天化や健一はお子様で話にならん」

（お子様って、アンタ……）

と、沙龍は苦笑した。

少なくとも、いま梨蘭が言った二人は梨蘭より遥かに年上なのだが、この唯我独尊の仙界の姫君は常にこんな感じである。

「俺で参考になるか分らんが、なんだ？ 言ってみろ」

九雷がそう言うのを、沙龍は九割覚醒した頭で聞いて、毛布の下で微笑んでいた。

口調も態度も普段とそう変わるわけではないのだが、九雷の声が幾分柔らかいのが分かるからだ。

『九雷が子供に優しい』ということは、沙龍にとってはかなり意外な事実だった。

しかし、九雷が梨蘭に対して優しいのは、梨蘭が自分の姪っ子だからだろう、

と沙龍自身は思っている。

梨蘭の方も九雷を怖がるようなことはなかった。

九雷の公的な地位と高圧的な性格を考えれば、彼を前にして怯まない人というのはほとんど居ないくらいなのに、梨蘭にはそういった畏れがない。

元より、自分を中心に世界が回っている梨蘭はなにをも畏れないし、火雲宮かうんきゆうの玉座に座っている天帝ですら『自分と同等』と思っっているくらいだ。

「……そのう、殿方というのは、どんな贈り物を喜ぶかのう、と思っつて」

梨蘭がモジモジしながら言ったところで、沙龍は完全に目が覚め、興味津々にその会話を聞いていた。

「誰か贈りたい相手でも居るのか？」

「……い、いや、そういう意味で聞いているわけでは全然ないのじゃ。べ、別に、気になる殿方がいるわけでも全然ないのじゃ」

（つーか、アンタ……、それで隠してるつもり？）

にやけてきそうな沙龍は、九雷に「出来るだけ詳細に聞きだせ！」とテレパシーを送れるものなら送りたい、と思っつたものだ。

「そうか。で、誰に贈りたいんだ？」

「……………。」

上を向いたり、下を向いたり、と忙しい梨蘭は、九雷が注いでくれたホット・ミルクを飲もうともしない。

「喜ぶ物というのは人によつて違ふからな。相手が誰か分からなければ、俺も答えようがない」

九雷がうまい具合に梨蘭から、その特定の誰かを聞き出そうとしている。

梨蘭は一度マグカップに口をつけて、中のミルクをゆっくり飲むと、

「……………誰にも言わない？」

口の周りを白くしながら聞いた。

「ああ」

「絶対、絶対、ぜえ〜つたい、言わない？」

「ああ、約束する」

九雷が微笑んで言うので、梨蘭は意を決したらしく、椅子から降りると、九雷の所までちよこちよこことやってきた。

「……」

なにやら耳打ちしているらしい、というのは毛布の中の沙龍にも分かった。

当然、沙龍にはその内容までは聞こえない。

「なるほど……、それはライバルが多そうだな」

と、九雷が言った言葉から推測するしかないのだが、なんとなく直感で自分の親友の木佐小次郎ではないか、と思った。

いまや四方将神の一人、真武君しんぶくんとして認識されている、沙龍の一番の理解者である。

「そうなのじゃ。一世一代の初恋がいきなり試練なのじゃ。わらわも困っておる。だから、少しでもライバルの女どもを蹴落として、一歩でも二歩でもリードしなければならぬのじゃ」

(キサさんの場合はライバルが女とは限らんぞ、ランランよ……)

沙龍は既に神妙な顔つきになって、あれこれ考えている。

木佐は美男美女で溢れる天界においても、かなり目立つ美形である。

だから、年頃の女性が目も心も奪われる候補としては申し分ない。

水雲宮の従業員の悠花ゆうかも、そんな木佐に一目ぼれしたクチだ。

(いや、しかし、待てよ……？ 女子供にちつとも優しくないキサさんが、ランのお眼鏡に叶うか……？)

そう考えると、全くの見当違いの気がしてきた。

梨蘭は基本的にチャホヤされたいお姫様体質なので、自分に冷たい人はどうでもいいはずだ、とも思う。

「だから、これは！ と思うような物がなかのう、とって。九兄はなにを贈ったらしいと思う？」

梨蘭と九雷の会話は続いている。

「そうだな。答えになってないかもしれないが、梨蘭からの贈り物ならなんでも喜ぶだろう」

「なぜじゃ？」

「そういう奴だからさ」

「そうなのか？ まあ、よく知ってる九兄が言うのだから間違いはないのかもしれないぬが……」

(なに？ 元帥のよく知ってる人……？ 誰だよ!?)

沙龍はまた考え込んだ。

九雷が『一番よく知っている人』なら陽輝ようきだろうが、木佐以上にそれは有り得ない、と沙龍は思った。

あの不良中年は、とても五歳児の初恋の対象にはならないだろう、と思うのだ。

「だが、つまらない物を贈って、嫌われたくはないのう……」

「お前が一生懸命考えて贈る物に、つまらない物など一つもないぞ」

(……)

なにげにすごい殺し文句だな、と沙龍は思った。

そのあたりは五歳の梨蘭に分かるはずはないのだが。

「そうか！ では、一生懸命考えてみるのじゃ！ なにを贈るか決まったら、また相談に乗ってくれるかのう？」

「ああ、勿論だ」

「多謝」

梨蘭は満足したらしく、やっと朝食のクロワッサンを食べ始めた。

当然、沙龍は梨蘭の居ないタイミングを狙って、九雷にその人物のことを聞きだそうとした。

が、九雷は律儀に約束を守って、教えてくれない。

「悪いが、俺に梨蘭との約束を破らせないでくれ」
などと、微笑みながら拒否された。

「なにそれ……」

「そのうち分かるだろう。お前もよく知ってる人物だ」

「ム……？ ランランの好みって、理解してるようでしたよ。全然分かんないんだけど……。母親と同じだとしたら、面食いではないってことになるよな……」

梨蘭の父親というのが、沙龍の弟、偃月えんげつである。

身内ならではの辛辣な言葉であるが、偃月は沙龍が言うほど顔の造りは凡庸で

もない。

「外道だったら困るな。可愛い姪っ子が泣くようなことになったら、やっぱ伯母として相手の野郎には制裁加えないといけないし、それに、ランランは仙界の次期当主様だ。よからん思惑を持った奴だったら、私が始末しなきゃならんじやないか」

沙龍は真剣に悩んでいた。

梨蘭の初恋は、沙龍の知らない数ヶ月前に既に始まっていたのである。

一ヶ月単位で仙界と天界を往復する梨蘭は、水雲宮の居候をしている飛龍ひりゆうに毎度送り迎えをしてもらっている。

もともと飛龍は自称『緑麗のボディガード』なのだが、ここ数年、梨蘭が水雲宮の半住人になってからは、専ら梨蘭のお守り係になっていた。

しかし、直情型にして喧嘩っ早い飛龍は、天仙界の境界近辺でたまに一悶着を起す。

その日も、スピード違反と無許可通過を関門の役人に咎められて、喧嘩になりかけた。

そこを仲裁してくれたのが、丁度、関門を訪れていた赤帝朱雀星君せきていすざくせいくんだった。

「確かに事前申請なしに境界を越えるのは法に抵触しますが、龍王家と西王母せいおうぼを怒らせてまで守るべき法じゃないはずです」

赤帝君は中年の官吏にそう言って、場を収めた。

彼自身、堅物と言われ、仕事は忠実にこなす役人の鑑のような人物なのだが、
こういうところでは非常に鷹揚である。

「もう大丈夫ですよ、梨蘭様。拘置所に一泊なんてことはさせませんから」
にっこりと微笑んで言う朱雀星君は、ちゃんと梨蘭の視線に合わせて膝を折つ
てくれる。

平身低頭する役人や仙道たちをたくさん見てきた梨蘭だったが、赤帝君のこの
態度が新鮮だったのは言うまでもない。

諂へつらうでなく、子供相手と内心馬鹿にするわけでもなく、ごく自然に梨蘭を淑
女として扱う紳士の赤帝君は、梨蘭の目から見ても眩しいほどの好漢だった。

「あ……、えつと……、わらわを知っておるのか？」

「勿論です。この天仙界で貴女を知らない者などおりません」

「そ、そうか。で、そなたは誰なのじゃ？ 見たところ、役人でも軍人でもなさ
そうじゃが……」

「私は赤帝朱雀星君。四神府に勤めております」

「……四方将神というやつか？　確か伯母上の友人の無礼者がそこに勤めておつたような気がするが」

「真武君のことですね。彼が何か無礼でも？」

「あやつは、わらわをそこらへんの仔猫かなにかのように扱う」

梨蘭がブスツとして言うと、赤帝君は悪いと思いつつ笑ってしまった。
すぐにその様子が想像できるのだろう。

「真武君も悪気はないのですよ。彼に代わって私が非礼を詫びておきます。どうかお怒りをお鎮め下さい」

「ム……、そ、そなたがそこまで言うなら、そなたの同僚のいままでの数々の無礼を赦してもよいぞ。しかし、今後の分はまた別じゃ——。今度、また、あやつが無礼を働いたら……」

「梨蘭、そろそろ行くぞ」

飛龍が即席発行の通行許可書を手に戻ってきた。

梨蘭は「気の利かぬ奴め」という顔をして、未だ片膝ついている赤帝君をまっすぐ見た。

「そなたの名前は覚えておくぞ、朱雀星君。いずれ改めて今日の礼もしなければならぬ」

「光荣ですが、梨蘭様。礼などは不要にて、そのお心だけ頂戴しておきます」

「ム……、し、しかし、礼節は忘れてはならぬと、父上と母上が言うのじゃ。わらわに親不孝をさせたくはなかつたら、わらわの言うことを聞いて欲しいのじゃ」
「分かりました。では、いずれまた——」

颯爽と緋の衣を翻して去る赤帝君を、梨蘭はしばらくボーッと見つめていた。

「凜々しい殿方であったのう……」

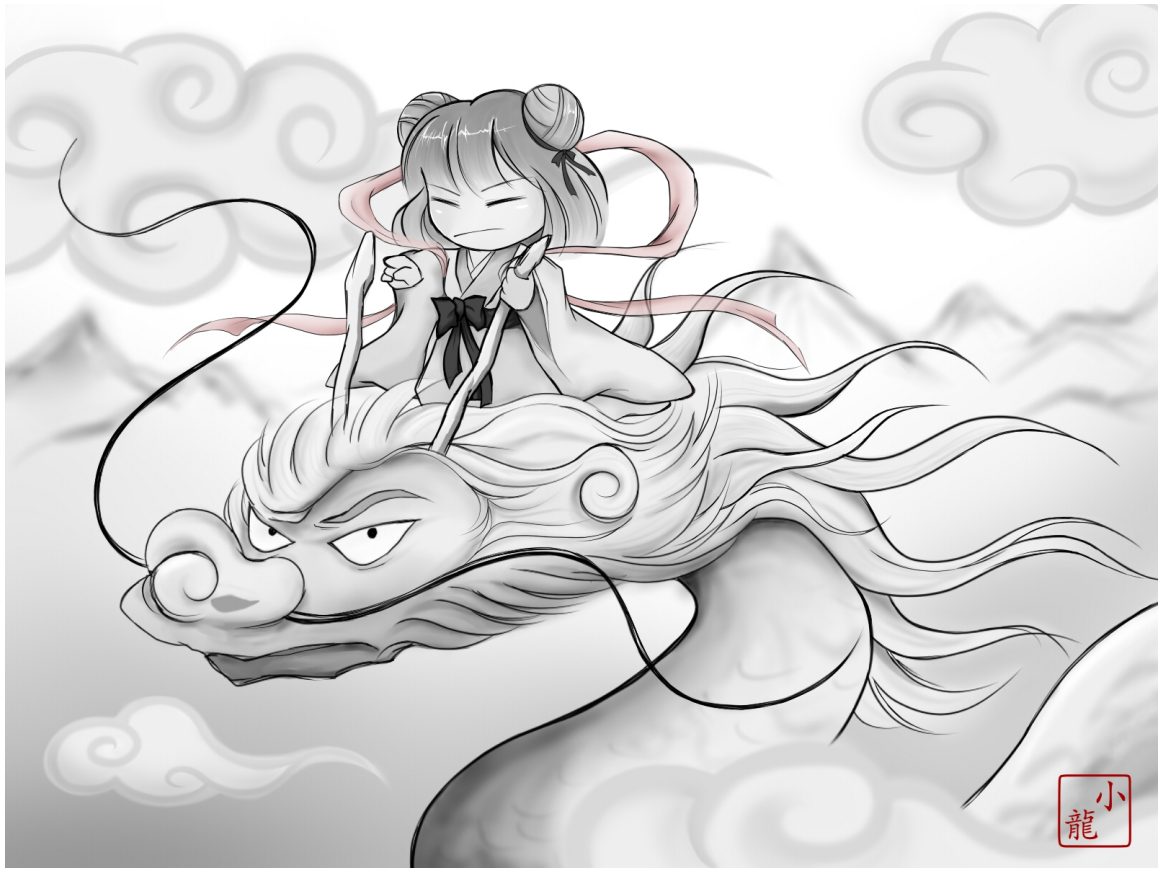
ホウツと溜息をつきながら梨蘭が呟くと、

「……あ？ 誰のことだ？」

龍形態の飛龍が、ずいぶん経ってから聞いた。

「さっきの殿方じゃ。緋の衣がよく似合っておった——」

「……？」



飛龍はあまり記憶力がよくない。というよりも、必要のないことは記憶しないような頭になっている。

飛龍にとって、赤帝君は『人畜無害』というイメージしかないので、さきほど会ったことすらもよく覚えていない。

同じ龍族の者でも、顔と名前を忘れていている輩がたくさん居るくらいだ。

「お主も感謝せい。彼が話をつけてくれたおかげで、わらわたちは俗に言う『臭い飯』を食わずに済んだのじゃ」

「話し合いなどせずとも、あんな関門の小さい拘置所など、俺はすぐに破壊できる」

「お主はそれだから、余計な問題を増やすのだと九玄きゅうげんがよく言っておるじやろうが。力ではなく頭で解決するインテリなスマートさが分からぬ無粋な奴は黙っておれ」

「梨蘭はその『インテリなスマートさ』とかいうものが分かってるのか？」

「いや、よく分からぬ」

「……」

「……」

そうこうしているうちに、すぐに帝都が見えてきた。

赤帝君がなぜ西の関門などという、本来は無縁な場所に居たのか、梨蘭と飛龍は知らなかった。

あの関門は『弥羅宮』やらきゆうへの直通の道としても知られているが、飛龍はほとんど地上の道を使わないのだ。

赤帝君は、大昔、まだ四方将神になる前、たいじようどうくん太上道君の住まう西域の弥羅宮に、警備隊長として駐屯していたことがある。

はくていくん白帝君とはそこで知り合ったのだが、その縁で太上道君にも師事するようになった。

「健在か——」

赤帝君はその懐かしい宮殿を見上げて、目を細めた。

3 プレゼント

梨蘭が、九雷に『一生懸命考えるならなにを贈ってもいい』というお墨付きをもらって、赤帝君へのお礼の品はなににしようかとあれこれ考えている頃、伯母の沙龍の方は少し厄介な話を聞いていた。

沙龍の協力者——というよりは下僕に近い——である公務員が『秦帝しんていの正妃選

びに梨蘭が第一候補としてあがっている』と報せてきたのである。
ちなみに「公務員」というのは、いい加減な上司につけられた、彼のコードネームである。

「まあ、ある程度は覚悟してたけど、なんでまたそんないきなり急展開な話に？」

沙龍は眉間にしわを寄せて聞いた。

「詳しくはまだ分かんが、大ボスの話じゃ、どうも太上老君が噛んでるみたいだな。それから、西王母の側近で、元は天界の皇族の世話係やってたって奴も

色々動いてるらしい」

「あゝ、極右か」

「秦帝の正妃選びは、それこそ数年前から上がってる話だから、いきなり決まったってわけでもないと思うぜ？」

公務員はいつものようにやる気のなさそうな報告だけして帰っていったが、沙龍は少々憂鬱になった。

（五歳で結婚させられるってのは、本人にその覚悟があつたとしても、酷だよな……）

と思うのだ。

梨蘭は、祖母である西王母の影響で、かなりその辺をドライに考えていて——
本当には理解していないのだろう——、自分の進路はあまり自由にできないと、理解している。

それを見聞きする度に沙龍は痛々しい思いをするのだが、本人が憂いていないのなら、まさかの秦帝との結婚話も、沙龍が思うほどに大したものではないのかもしれない。

しかし、いまはまだ仙界の極右派がその方向に持っていこうとしている、というだけでなにも決まったわけではないし、天界側がどう考えているのかは全く分からない。

「ちっさい姪っ子の初恋すら応援してあげられないのか……」

沙龍は口に出して呟いた。

自分がこの世界にやって来たときには、それなりに選択肢が幾つかあった。

人界に戻るのも、天界に残るのも、誰と結婚するのもしないのも、沙龍の自由だった。

尤も、それを九雷が許したかどうかは分からないが、少なくとも沙龍自身は『私の人生は私のもの』という意思があった。

しかし、生まれたときから既に仙界の盟主になることが決まっている梨蘭に、二つ以上の選択肢はない。

あるのは、『仙界を統治し、仙道たちの平穏を守り、天界との関係をより良く保つこと』

それだけである。

西王母が『吉羅公主きらの体が弱いから』というのを口実に、梨蘭を水雲宮に預けることにしたのは、一つには仙界の次期盟主として梨蘭に色んなことを学ばせるためである。

実際、吉羅公主の住む清林山せいりんざんは、空気が清浄過ぎて、免疫のある子供を育てるのに適さないという事情もあるにはあるが、だとしても、わざわざ天界に里子に出す必要はなかったはずだ。

同じ伯母である竜吉りゅうきつ 公主の所でもいいし、西王母の娘はもう一人居る。

それを、敢えて天界の水雲宮、沙龍の所に預けることにしたのは、西王母にとつて、色々都合が良かったからであろう。

沙龍は天界においては少し特殊な身分である。

無位無官のただの一市民であるが、最高神三名に『天界永住権』を保障されているし、唯一無二の神獣、黄龍の保持者でもある。

そして、沙龍のパートナーである九雷は、天界軍を動かせる地位に居る人物なので、西王母としてもこの二人を梨蘭の味方に付けることができれば万々歳、というわけである。

数日後、これは口止めされてないから、と九雷が沙龍に教えた話では、梨蘭は『好きな人』に一生懸命考えた挙句、飾り太刀をプレゼントしたらしい。

「え。でも、アレって、結納の品とかにされるようなシロモノでは……？」

沙龍が言うのは、どこかの一地方限定だったかもしれないが、初恋イコール即プロポーズ（もどき）というのは、身に覚えがあり過ぎて苦笑いしか出てこない。

沙龍は、この早熟さはもしかして血か、と思った。

「まあ、意味は分かってないんだろう。『すごく喜んでくれた』とかで、俺は大量感謝されたぞ」

「具体的なアドバイスしてないくせに……」

「家宝の大事な刀を持ち出した可能性もあるが、まあ、吉羅公主の所になら曰く付きの名刀など、ごろごろしてるだろう」

「え？　なんで？」

「清林山は奇石や良質の鉱石が豊富に採れるからな。昔から優れた刀剣を奉納する場所になっている」



「へー……」

その出勤前の会話に飛び込んできた梨蘭は、沙龍と九雷が自分が入ってきた途端にピタリと会話を止めたのを敏く気付いた。

「伯母上ー！ ……む、今朝はもう起きてるではないか。もしや、ノーコーな朝の挨拶チューだったか？ すまぬ」

「へんな氣い回すなよ、この五歳児」

沙龍がゴツツと軽く手刀を梨蘭の頭に落とすと、梨蘭が反撃してくる。

「それは痛いと言っておるのに！」

「あ、そうだ。ランラン、私は午後から出掛けなきやいけないんだが、お前どーする？ お留守番してるか？ それとも……」

「どこに行くのじゃ？」

「四神府だよ」

「……!？」

「キサさんに預けていた『大和守秀国』が砥ぎ上がったらしくて。暇ならついでくるか？」

「い——、行く！」

四神府に行く最中もソワソワ、木佐のオフィスでもソワソワしている梨蘭に、沙龍は当然気付いていた。

だから、ニヤニヤしながら言ったのだ。

「用も済んだし、帰るか」

すると、梨蘭が途端に悲しい顔をする。

お出掛けだというので、余所行きの冠をつけて来た梨蘭の小さい頭が揺れた。

「え……、も、もう帰るのか？ もっとゆっくりしていけばよいではないか」

「なんで？ 小腹もすいてきたし、水雲宮に戻っておやつにしようよ」

「ムー……」

我ながら意地が悪いとも思うが、沙龍はわざとらしく、思い出したように言った。

「あ、赤帝君に会って行こうかな。どうせ隣だし」

「……！」

一生懸命、小さな胸を躍らせている梨蘭は。パツと輝く瞳で沙龍を見る。

しかし、その直後に思い直して、キリツと表情を引き締めた。帝王学を学んでいる梨蘭はまだ拙いながらも、こういった切り替えができる。

「そ、そうか。挨拶は大事じゃ。普段、世話になっているなら、余計、挨拶は欠かしてはならんぞ、伯母上」

「どこの口がそんなこと言ってたよ……」

沙龍はそれでも、そ知らぬ顔で姪っ子を希望通りのオフィスに連れて行ってやった。

「す、朱雀星君、久し振りなのじゃ」

完全に声が裏返っている梨蘭が、二人の姿を認めて席を立って出迎えに来た赤帝君に声を掛ける。

「これは梨蘭様。ご機嫌麗しゅう。緑麗りよくれい様も、お元気そうでなによりです」

「なんか、私の方がついでだな」

と、苦笑する沙龍は、実は少々複雑な気分なのである。

赤帝君との間に以前あったわだかまりのようなものは、いまはもうないとはいえ、この真面目な四方将神がそうそう想い人を変えるはずはない。

だとすれば、赤帝君自身も複雑な心情のはずだが、大人の二人は小さな梨蘭の前にそれを見せることはない。

「今日はどうされたのです？　こちらになにか御用でも？」

「きよ、今日は、伯母上の付き添いなものじゃ。この通り、伯母上は一人ではなにもできぬゆえ……」

「オイ、なに言ってるんだよ、この五歳児」

ゴツ

と、軽く手刀を入れると、いつもとは違う反応をする。

「かつ、冠が曲るではないか。もう、伯母上は凶暴だから嫌いじゃ」

「この程度の突っ込みが凶暴なら、ユエなんか百万回死んでるな」

「わらわは父上が不憫でしようがないぞ」

「お前はあの父の血が流れている以上、ボケ役決定な」

そんな、二人にとっては日常茶飯事の会話に、赤帝君は少々押されている。

「……仲のよろしいことで。まるで本当の母娘のようですね。あ、いえ、姉妹でも通用しますが」

「気、遣うなよ。……似てるか？ この五歳児と」

「ええ……」

と答える赤帝君は、静かに微笑んでいるだけだ。

「……」

その妙な『間』に、梨蘭はキョトンとしている。

沙龍は、赤帝君のオフィスの出窓に飾ってある、黒塗りの鞆に金の装飾が施された短刀を見て、これか、と思った。

「これって、恋人の無事を祈って女性から贈るといふ、あれ？ ……隅に置けな

いねえ、阿哥^{アーク}。火雲宮の女官たちが泣いてるよ」

「……」

「誰から貰ったのかなー？」

と、満面の笑みで問う沙龍は、分かってやってるのだ、と赤帝君も理解した。

「大切な方から頂きました」

「……………」

梨蘭は真っ赤になって慌てて下を向いたが、そのせいで沙龍が微妙に顔をしかめたのに気付かなかった。

「さつき、馨かおるが来てただろ？」

終業近くになって、木佐が赤帝君のオフィスを訪ねたとき、赤帝君は夕暮れのオレンジ色の光の中に居た。

彼にしては珍しく、書きかけの書類をデスクに散乱させたまま、ただ、窓の外を眺めているだけだ。

「……………ああ、梨蘭様と一緒にな」

その面倒くさそうな言い方で、木佐は大体自分の予想通りの展開だ、と思った。

木佐は、最近、あの小さな公主が赤帝君のことを気に入っているのを知っているし、それ故に、赤帝君がなにか思う所があるんじゃないか、と察している。

「あの二人はよく似ているよな。伯母と姪だから当然だろうが……」

「……？ そうだな」

赤帝君は木佐がそう言い出した意図が分からない。が、

「……」

木佐はじつと赤帝君を見たあと、

「日本の古典に『源氏物語』というのがあるんだが……」

ちよつと悪戯心で言ってみた。

「ああ、知っている」

『源氏物語』は世界最古の長編小説ともいわれているので、赤帝君も登場人物の名前とざっくりとした内容くらいは知っている。

「主人公の光源氏は意中の女性である藤壺の面影を姪の紫の上に見出し、誘拐同然に連れ帰って、結婚した」

こんなことを話すのも、かなり立ち入ったことを言っても許される関係だから

である。

しかし、さすがに赤帝君は眉をひそめた。

「まさか、その恥知らずな男になれ、とでも？」

「なるほど、君らしい感想だ」

あるいは、フェミニストな赤帝君らしい、というべきか。

木佐は続ける。

「紫の上は不幸だったと思うかい？ 僕は、そうは思わないね。彼女は、結果を見れば『時の人である光源氏の最愛の妻』だ。光源氏に見出されなければ、落ちぶれた貴族の行きつく先など決まっていただろう。むしろ、彼女は当時の女性にしてみれば、これ以上ない、人生の勝者だよ」

ここまですれば赤帝君も木佐がなにを言いたいのか分かった。
しかし、

「重要なのは結果だけか？」

やや否定気味に尋ねる。

「まあ、物語の中では多少強引すぎたことをやっているから、そのあたりは『恥

知らず』といわれてもしようがないけどね」

木佐が言っているのは、光源氏が幼い紫の上を力づくで手籠めにしたことである。

「しかし……、仮に、私が行儀のいい光源氏になつたとしても、緑麗様は怒って呆れるだろうな」

赤帝君はもう真面目に取り合つてはいない。

苦笑しながら「そんなことはあり得ない」という前提で話している。

「さあ、どうか……。馨は姪っ子が幸せならそれでいいんじゃないかって気がするが……」

そのとき、ドアをノックする音がして、秘書官がお茶を持ってきてくれた。

赤い短髪の若い男性で、顔立ちからして東方世界の出身ではないと分かる。

「ああ、ありがとう。えつと……いまの名前はなんだったっけ？」

木佐がそう聞くと、若い秘書官ははにかむように微笑んで、

「蓮レンです。でも、以前の名前でもいいですよ。捨てたわけではないので」と答えた。

最初に会ったときは敵意むき出しの、ナイフのような少年だったが、ずいぶん大人になったようである。

彼の本名はマルティエルという。元は西方神界の天使なのだが、いまは天使の羽根も秘術により封印しており、こちらの世界に溶け込んでいる。

七、八年前、西方世界とのいざこざがあったあと、しばらく木佐のところで雑用をやっていたのだが、赤帝君のオフィスに異動になった。秘書官のいない赤帝君が引き取った形である。

捕虜だった男を秘書官にするなど、と九雷にはさんざん言われたが、赤帝君が「なにかあれば全責任は私が取る」と言い張ったので今がある。

九雷の懸念をよそに、赤帝君と蓮はうまくやっていた。同じ事件で同じくらい大事なものを喪失した者同士、という不思議な連帯感もある。

蓮が去ってから、木佐が聞いた。

「『弥羅宮』に行ってきたんだらう？ 太上道君は居たのか？」
本当はこれを聞きに来たのである。

「いや、留守だった。また流浪の旅に行ってしまったらしい」

「そうか……」

現在、水面下で進められている秦帝と梨蘭の結婚話は、既に各所に大きな影響を及ぼしている。

一見無関係のように見えるが、ここ四神府とて例外ではない。

もし本当に梨蘭の輿入れが決まれば、かねてより仙道たちの独立を望んでいる仙界側のレジスタンスは黙っていないだろう。対して、お家安泰を凶る極右派はなんとしてもこの結婚話を進めたいはずだ。

とすれば、最悪、武力衝突にもなりかねないし、梨蘭には暗殺の危険もつきまとう。

天界内で争いごとがあれば五行の流れは乱れる。四神府としても無関係を決め込んではいられないのだ。

木佐や赤帝君が太上道君の挙動を気にしているのは、この有事においては最高神の意思確認が最も優先されるからである。

現在、天界には最高神が四名（※天帝、太上老君、太上道君、泰山府君）居るが、それは、天帝の独断による暴走を阻止するためでもあるのだ。

「聖霄せいしやう（※白帝君の字）を探しに行かせたが、すぐに見つかるかどうかは分からんな」

「太上老君は『推進派』なんだろう？」

「ああ。そもそも西王母に話を勧めたのは老君らしい」

「泰山府君は」

「あのご老体ばかりは分からんな。生者の世界のこととはどうでもいいのかももしれんが……。となれば、陛下の決断次第では、緑麗様も梨蘭様も辛いことになるかもしれない」

赤帝君は、いつものように心配事を口にする。

木佐はこの心配性の同僚にやれやれと思うばかりである。

（まあ……性分なんだろうな）

木佐は木佐なりに、真面目な同僚のことをずっと気にかけているし、心配もしているのだ。その真面目さゆえにここ数年、いや、数百年、数千年を憂いの中に生きていることも。

こういう男にはやはりかけがえのないパートナーが必要なのではないか、とも

思う。

自分や白帝君では『良い同僚』にはなれても人生の伴侶となると難しい。

沙龍が知ったからには、水雲宮で梨蘭の意中の相手のことは公然の秘密になつてしまった。

勿論、小さな公主を前に従業員たちは知らぬふりを決め込んでいるが、彼らはみな、赤ん坊だった梨蘭のオムツを変えたりしてきたわけなので、あの姫様が、と、内心ではニヤニヤしているのである。

ただ、沙龍は、この件を知ったときの紗衣の反応は少し引っかかった。常に冷静沈着で何事にも動じない紗衣が赤帝君の名前が出たときにちよつと驚いていたのだ。

(そういえば、紗衣は赤帝君のファンだって言ってたな……)

しかし、それを聞いたときも「強いていえば」というようなニュアンスだったので、火雲宮の女官たちほどの熱狂さはないはずである。

まさか五歳児の恋が成就したらどうしよう、と紗衣が心配したわけでもあるま

い。

沙龍はだからその件はわりとすぐに忘れた。

しかし、紗衣のほうは忘れていた昔の約束を思い出して、しばらく思い悩んでいたのだ。

そう、あれはもう何年前になるのか――。

紗衣は水雲宮に来る前は、けいりふ刑吏府で働いていた。人界でいうところの警察組織である。紗衣は真面目な捜査員だったが、内部の汚職事件に巻き込まれ、身内に追われる羽目になってしまったらしい。

その汚職が明るみになれば長官の首が飛ぶような案件だったために、紗衣は身の危険を感じ、遊里に身を隠すことにした。その一帯が刑吏府の手だしできない場所だと知っていたからだ。帝都にも複雑なパワーバランスがあつて、全てに行政の目が行き渡っているわけではないのである。

紗衣はしばらく老舗の妓楼で妓女の真似事をしていた。

その主人には軍の極秘捜査だと偽り、一室を借りて、なにかよい案はないかとぼんやり考えるだけの毎日を送った。

しかし、国家に追われた自分に生き延びる道があるとは思えなかった。遅かれ早かれ死ぬしかないだろう、と。

時はむなしく過ぎてゆく。

その殺伐とした日々の中で、仲良くなった妓女が居た。

妓楼一の人気者で、名前を雨娘うじょうという。人望も金もない客は指名すらできず、なんとか予約を入れられたとしても三か月待ちという人気ぶりだったが、その頃すでに本人は体を病んでおり、あまり長くはないと医者に宣告されていた。

客も取らずに日がな一日、部屋にこもっていた紗衣のことを、他の妓女たちはうさくさい目で遠巻きに見ていたが、雨娘だけは屈託なく話しかけてくれた。

いま思えば、それは死を覚悟している雨娘が、同じようなものを紗衣に感じ取っていたからかもしれない。

紗衣と雨娘が義姉妹の契りを結んでしばらくした頃、彼女たちの前に若き赤帝君を連れて現れたのが緑麗だった。

妓楼全体がざわめいたのは言うまでもない。緑麗は既に有名人であつたし、例えその身分を知らない者でもあの目立つ容姿を見れば誰でも溜息をつきたくなる。天仙界では珍しい金髪と、妓女たちに負けるとも劣らない美貌である。

さらに女性の客とくれば、界限ではそれだけで目立つだろう。

妓楼には女性客もごくたまに来る。つまり、女が女を買いに来るのだ。

が、緑麗の場合は「付き添い」がメインで、誰かと同衾するつもりはなかつたようだ。

連れの筆おろしなのでそれ相応の接待を頼む、と緑麗は主人に言い含め、相応以上の金子を包んだはずである。

緊張している赤帝君をリラックスさせるためにもまずはアルコールを入れよう、と、かの将神は酒宴を開いた。ただ自分が飲みたいだけだったのかもしれないが。

紗衣はその席に呼ばれて酌をしたが、そこでいきなり緑麗に正体を見抜かれてしまったのだ。

なぜ——？

聞くのは野暮かとも思ったが、聞いてみたかった。

さすがに宴席でする話ではなかったので、自室に誘い込んでの一幕だったが。「なぜ分かったんです？」

刑事府とて、潜伏調査の研修くらいは受ける。紗衣も色々な訓練は受けたので、妓女になり切っていた自信はあったのに。

しかし、緑麗はあっさりと言った。

「うーん？　なんとなく」

「……それじゃ答えになってませんよ」

「強いていえば呼吸の仕方かな」

「呼吸——？」

そんなものに違いがあるのか、と思った。確かに武術の達人と一般人では違いもあるだろう。しかし……。

「刑事府はなんか独特なんだよね。雰囲気とか所作とか。まあ、軍人もわりとすぐ分かるけど、それ以上に刑事府のほうが分かりやすい」

「……」

これは野生の勘としか呼べない類のものか、と紗衣は思った。

そして、ニコニコ笑いながら、緑麗は言ったのだ。

「なぜわざわざこんな治外法権みたいな場所に居る？ なにかわけありだろうか？

もしかして王育おういくがらみか？」

紗衣は直接話したことはないが、刑吏府長官の王育はあまり評判がよくないらしい。黒い噂は前々からあったのだろう。部外者の緑麗が知っているくらいには。

「まあ、一応私もいまは四神府の長官だからな。他部署の長官の弱みを握っておくのは歓迎する」

そう言って、汚職の証拠ごと水雲宮へ来い、というのだ。

「死ぬのはもう少し待て。その命にはまだ使い途がある」

「……」

そんなことがあったので、紗衣はすっかり緑麗に魂ごと絡めとられてしまったのだ。

その日、赤帝君の相手をした雨娘のほうにもなにかドラマがあったらしく、し

ばらく赤帝君との逢瀬を重ねたそうだ。あくまでもプライベートで、と聞いてい
る。

紗衣が妓楼を去るとき、雨娘は言った。

「わたしはここに骨をうずめるから、あの人のこと、気にかけてやってくれる？
わたし、彼の女性不信の原因のひとつになってしまったかもしれないから……」
だとしても、諸悪の根源は緑麗ではないか、と紗衣は思ったが、先行きの長く
ない友の言葉は素直に聞き入れることにした。

「分かりました。私は緑麗様に『身請け』されて、これからは名前も変えて生き
ていくことになりましたが……、あなたのことは忘れません。こんな私に親切にし
てくれてありがとう」

「……それはわたしのセリフだわね」

雨娘はその後、すぐ亡くなったと聞いた。

いま、水雲宮での平穏な日々の中で、紗衣は、そういえば自分は赤帝君のこと

をちやんと気にかけてことがあっただろうか、と自問した。

なんとなく緑麗との思い出のはしっこに居る彼のことを「ファン」だと冗談のように言うことはあっても、あまり真剣に気にかけてことはなかったのではないか、と思う。

とはいっても、そもそも自分には最初から雲の上の人だ。

この五行で成り立つ世界において、四方将神の役割と地位を思えば、本来、なんの官位も持たない自分が気軽に話せるような相手ではないのである。

しかし――。

うちの小さな姫様なら身分は申し分ないし、姫様が大きくなれば、お似合いの二人ではないか……？

「紗衣、そろそろ三時じゃ！」

ちよこまかと走ってくる梨蘭を見て、紗衣はそう思った。

「はいはい。おやつですね。いまご用意します」

さきほど、厨房で汗をかきながら健一が揚げていたドーナツが、調理台に山のように積みまれている。全て梨蘭用というわけではないが、いまや水雲宮はこの姫

様中心にまわっているのだ。梨蘭の好きなものが作られ、提供される。

「あ、ドーナツ！」

案の定、好物に目を輝かせた。

「いくつお召し上がりになります？」

「み……、い、いや、ふたつ！ いや、やっぱりみつっじや！」

自分は母性本能は薄いと思っていたが、やはり赤ん坊の頃からずっと世話をしている梨蘭は可愛い。一番世話をしているのは飛龍だろうが、紗衣も飛龍の次くらいには手をかけている。

「夕飯、入らなくなっちゃいますよ」

こんな毎日がたまらなく愛しいと紗衣は思っている。

この小さな姫様の顔を曇らせてはならない。それが天仙界には必然の縁談話であるろうとも、である。

帝都から五十キロメートルほど南下したあたりに、南海龍王家の本拠ともいえる紅寶宮こうほうきゅうがあるが、南海龍王たる奏欽そうきんは家族と共に帝都内の別宅で暮らしている。

五年前、乳飲み子を育てるにはできるだけ職場（火雲宮）の近くがいいというだけの理由で引越をしたのだが、双子たちも今はだいたい手がかからなくなっていた。

梨蘭より二週間早く生まれた男女の双子は、男の子が敖俊ごうしゅん、女の子が明明めいめいという。奏欽の考えにより、どちらが兄（姉）なのかは明かされていない。事実、どちらが先に生まれたのかは陽輝すら知らなかった。

奏欽が敢えて公表しないのは、その先入観によって性格づけがされてしまうからだ。「お兄ちゃんだから、お姉ちゃんだから」という内外からの圧力はあまりいいものではないと考えているからである。

双子は二卵性双生児なので顔は一卵性ほど似ていないが、背格好はいまのところほぼ同じである。男女なので、これからはどんどん差がついていくのだろうと奏欽は少し寂しく思っている。

しかし、敖俊はいまのところ母親似だし、明明は父親というより伯父に似ているので、中性的な男の子と、凛々しい女の子になったりするのかもしれない。

それが自然な成り行きによるものなら構わないのだが、子供というものは、親の思惑を飛び越えて色んなものに影響されるし、小さな呪縛はいたるところにあるものだ。

「じゃあ、いつてきます」

リュックサックを背負った明明が気合のこもった顔で母親に告げた。

長い黒髪はツインテールにしている。拳法着のようなものを着ているので、下町の子に見えなくもないが、よくよく見ればやはりどこもかしこも手入れのされた格好だった。道着もシルク製の高価なものである。

「本当にひとりで大丈夫？」

奏欽は心配そうに言うも、自分の配下が影ながらガードする手筈なので見せて

いるほどに心配しているわけではない。

「大丈夫！」

今日、初めてひとりで五十キロも離れたところに住んでいる伯父さんのところに行こうというのだ。不安がないはずはない。しかし、明明は敖俊の手前、強がってみせた。

敖俊はというと母親の隣で母親以上に不安そうな顔を見せている。

（嘘だ。大丈夫なはずないよ。メイメイは本当はすっごい怖がりなんだから……）

ずっと一緒に育ってきたので、敖俊は誰よりもそれが分かっていた。

なぜこういう事態になったのかというと、双子は龍王家の教育の一環で伯父の敖丁ごうていに五行術を習っているのだが（母親だとどうしても甘くなってしまうの

で）、今日は敖俊が少し熱を出してしまい、稽古をお休みをすることになった。

が、明明はひとりでも行く、と言い張る。

いつもは奏欽が送り迎えをしているのだが、今日は敖俊についていなければならぬ。

ひとりで行くのは危ないから一緒にお休みしなさい、と奏欽が諭しても、今日
はなんとしても首を縦にふらない。意地になっているようだ。

そこで、奏欽は諦めて行かせてみることにした。途中で怖くなって戻ってくる
ならそれでもいいし、意地でも敢行するのなら、こっそりと手伝えばいい。

双子はまだ知らないが、龍王家には龍王の命ひとつでどんな汚れ仕事もこなす
御庭番のようなスタッフたちが居る。奏欽の代ではわりと平和的な任務を行って
いるが、影ながら子供のボディガードをするくらいわけではない。

マンションの玄関口まで降りてくると、明明は一度、建物を見上げた。母親が
きつと窓から見ている、と思っただのだ。案の定、最上階のベランダから奏欽が手
を振っている。

ワンフロアーに一家族で、五階建てという、セレブ用の高級マンションなの
で、住人の数はそれほど多くはない。

明明も手を振り返し、横手にある駐車場に向かった。

まさかここから五十キロの道のりを徒歩で行くわけではない。

父親に作ってもらったポケットバイクで行くのだ。五行の力で動く仕様になっ

ている。出力は大人用の三分の一程度に抑えてあるが、最大で七十キロくらいは出せる。

敖俊はまだこの五行稼働のバイクは動かせない。

が、明明は最近これに乗れるようになったので、強気なのである。

大きな力を得たような気分になって、少し冒険もしてみたくなったのだろう。

しかし、子供の五行力では紅寶宮まで完走することはできないだろう、と奏欽は計算した。途中で力尽きて、黒子たちに抱えられて帰ってくるのが奏欽の描いた予想図だ。

が、明明は自分でもまだよく分かっていないこの不思議な力を、休み休み使う方法を知っていた。

大抵の場合、百パーセントの力を使っではいけない、と日頃から敖丁に教えられているのだ。

明明は、奏欽と同じく火行の力を持っている。南海龍王家特有の力だ。伯父の敖丁もそれは同じである。

その火行のエネルギーでバイクのエンジンを動かすのだが、この力加減が難し

い。最初はできなかつた。初心者はゼロか百か、になつてしまふ。

『たとえば、コップを持ちあげる力と、椅子を動かすときの力は違ふでしょ？』
敖丁はそう説明した。

小さく持ち上げる力と、大きく押す力。

種類は同じだが、それは力の大小が違ふのだ、と。五行術も同じで、ただ出力を抑えればいい。ローソクに火をつける力と、森を焼き尽くす力は同じであつてはいけない。

それを理解したとき、明明はすんなりとバイクのエンジンをかけることができた。

『すごいね、明明は天才だ。僕の次くらいにね』

明明はスマートで弁の立つ伯父さんが好きだつた。

最初は意地悪そうな目が苦手だつたのだが、慣れればどうということはないし、敖丁は自分には甘いということに気付いたからだ。

見知つた街道を、少しドキドキしながら走る明明は、ふと思いついて、側道にバイクを停めた。リュックサックから携帯端末を取り出す。

このひとりっきりの冒険を、友達に自慢したくなったのだ。

街道とバイクと自分が映るように写真を撮った。そして、

『おじさんちにくとちゅう』

短いメッセージを添えて梨蘭に送信する。『ひとりで』という言葉も入れたかったが、写真に敖俊が映っていなければそうと分かるだろう。

すぐ返信があった。

『そうなんだ。すごいね！ きをつけて』

梨蘭はおやつのドーナツを自慢げに見せた写真を送って来た。

冒険を再開する。

一時間ほどで、殺風景な景色の中に見慣れた紅い門柱が見えた。明明はその手前で減速し、バイクを降りて、ヘルメットを脱いだ。

事前に連絡があったのか、顔見知りの門番は明明がひとりで来たことに特に不快感も持たず、自然にバイクを預かった。

「いらっしやいませ、明明様」

「こんにちは」

行儀よく挨拶して、玄関までの長いアプローチを見た。

植え込みの手前で二人の男性が談笑している。一人は敖丁で、一人は知らない男性だ。何度か見かけたことがある顔だが、名前は知らない。上品な緋の色の着物を着ている。

敖丁が明明に気付いて手招きをするので、ちよこちよこ歩いていった。

「お客様……？」

と独り言のように聞くと、知らない男性はにっこりと笑った。

背がすらりと高い。決して尊大な雰囲気はないのに、明明は彼からなにか威圧感のようなものを感じた。それは、恐らく、火行属性の者ならば当然に感じるはずの、圧倒的な力の差なのだろう。

「驚いたね、本当にひとりで来たのかい？」

敖丁は大して驚いていない表情でそう言った。

「うん！」

「明明、この人は伯父さんの友達。ご挨拶して」

敖丁が言う前に、明明は赤帝君に向かって頭を下げた。

「こんにちは。明明です」

「初めまして、明明様。私は赤帝朱雀星君と申します。以後、お見知りおきを」

「……」

難しい名前だな、と思った。とても復唱できない。

「明明、すぐ行くから、食堂でおやつを食べておいで」

敖丁がそう言って、宮殿を指す。

「はい」

赤帝君にもう一度頭を下げて、明明は勝手知ったる紅寶宮に入っていた。侍女がひとり、慌てて出迎えに来た。

「似てますね」

赤帝君は明明の後ろ姿を見ながら、笑っていた。

「……誰に？」

と問うも、答えは分かっている。よく言われることだ。

「貴方に」

「そうなんだよね……。女の子なんだから、欽ちゃんに似たほうがいいんだろっけど……。あ、でも、それだと求婚者が鈴なりになるから、むしろ似ないほうがいいのか？ まあ、まだ五歳だから。この先どうなるかは分かんないよ」

「もう一人、男の子が居るんでしよう？」

「うん、あっちのほうが欽ちゃんに似てるね。でも、性格はどうだろう。五行の使い方を見てると、敖俊は物理向きかもしれないね。明明是ちよつと異常さ。龍王家の血が濃く出てしまった」

「しかし、帝都からひとりで来るなんてたくましいですね。行動力がすごい」
「うーん……。それもねえ……」

敖丁が難色を示す。

「なにか？」

「そうあらねばならない、っていうへんな圧力のせいでやってるんじゃないかって気がするんだよ。誰に言われたのか知らないけど」

「……」

龍王家の子女は帝王学も学ぶだろうから、ある程度はそういった圧力もしようがないだろう、と赤帝君は思う。

「まあ、でも、僕は『伯父さん』だからね。あんまり、欽ちゃんの教育方針に口出しはしないことにしてる。余計な口出ししてくる部外者に対しては別だけど」

「そういう部外者が居るんですか？」

「チラホラはいるね。その都度黙らせてはいるけど。甥っ子と姪っ子には、健やかに育てて欲しいじゃない」

既に伯父馬鹿なことを言っている敖丁に、赤帝君は思わず口元がゆるんだ。

「ところで、太上道君を探してるんだって？」

敖丁が別れ際に聞いて来た。

「ええ」

「例の、梨蘭絡み？」

黙って頷いた。

「四神府は動くの？　　というか、君たちは『どっち』？」

「個人的にはどちらでもありませんが……、臨機応変に対応するしかないですよ」

うね」

「そう……。意思表示しておくね、僕は賛成だよ。軍部がどうかは知らないけど」

言わずもがな、秦帝と梨蘭の結婚のこと、である。

「そうですか」

「明明と同じ歳だ。気の毒には思うけど、陛下のご成婚で諸問題が解決できるのは確かだよ」

これも、黙って頷くしかなかった。

二章 蟠桃会

1 キスの定義

春――。

梨蘭にとっては初体験の『ばんとうえ蟠桃会』が、せい西華の地で開催されていた。

仙界のトップである西王母が主催する、年に一度の一大イベントである。幼児は参加不可といわれ、去年までは水雲宮で留守番だったのだが、今年は学校に入学する歳なのでそろそろいいだろうと許可がおりたのだ。

満開の桃花の中には、華やかな衣装に身を包んだ貴人たちが居た。仙界天界の名だたる仙道や神々が集っているのである。

「お主があちこち連れまわすから、伯母上とはぐれてしまったではないか」

梨蘭は背後の飛龍にぶつぶつ零しながらも、ちよこまかとよく動く手足で、ピンク色に染まった景色の中を歩いている。

「歌謡ショーが見たいと言ったのは梨蘭だぞ」

飛龍は綿飴やラムネを両手いっぱい抱えているせいで前がよく見えていない。

それらは全て梨蘭が所望した品なのだが、彼らは別にお金を払って屋台で買ったわけではない。

梨蘭が欲しいと言えば誰もが快く、無料でくれるのだ。

そういった我儘が当然のようにまかり通る背景が梨蘭にはあった。

それは、梨蘭が現在の西王母の唯一の孫にして、『次期西王母』と目されているからである。

なぜ長姉である竜吉公主を飛び越えて、孫の梨蘭が後継者と予想されているのかと言えば、事情は色々ある。

竜吉公主は大の男嫌いなので、結婚も子供も望めない。

更に、西王母の他の娘（次女）も独身とくれば、祖母から孫へ直系継承をさせた方が面倒がないというのが主な理由である。

五歳の梨蘭にはその辺りの事情は分かっているが、自分がどこへ行っても

傳かれるのは理解している。

欲しい物は、大抵手に入るし、疲れたと言え、ば車や床が用意される。

普段は伯母である沙龍がわりと厳しく我俣を律するので、それらがあまりいいものではないということも分かっている。

しかし、だからこそ、沙龍が居ないときにはちよつとくらい……と思つてしまふのだ。

といつても、綿飴にしても梨蘭が「欲しい」と言つたわけではない。

ただ、屋台の傍でじつと見ていただけである。

屋台の店主が、にこにこしながら梨蘭に綿飴をくれたときも、一度は断つたのだ。

しかし「受け取ってもらえないと困る」と先方が言うので仕方なく貰うことになつた。

勿論、そのやりとりには梨蘭の打算も少しはあつたはずだが、飛龍に持たせたままにしているのは、保護者の誰かに許可を貰うまでは食べてはいけない、と思つているからだ。

「もしかして、わらわたちは迷子になってしまったのではないか……？」
人影もまばらになってきて、どこをどう進めばいいのか分からなくなった梨蘭は背後を振り返った。

「む……？」

さつきまで後ろに居たはずの飛龍が居ない。

梨蘭の視界では、桃木の枝だけがそよそよと風に吹かれていた。

「飛龍ー？ どこへ行ったのじゃー」

試しに呼んでみたが、返答はない。

さつきまで見えていた人影もいつの間にか居なくなっていて、遠くに打ち上げ花火の音が聞こえるだけだった。

蟠桃会開催中は様々な催し物があつて、参加者たちは自由に酒宴をしたり、芝居を見たり、昼寝をしたりしている。

いま聞こえた花火の音は、定例になっているマラソン大会開始の合図であろうが、それが分かったところでどうしようもなかった。

小道は四方八方に続いているが、どの道がメイン会場に戻れる道なのか、梨蘭

には分からない。

いつも進むべき道は誰かが示してくれるので、自力で判断することのない梨蘭はしばし立ち止まった。

(う、動かない方がいいのか……?)

迷子になったら動くな、と沙龍に言われたことがある。

しかし、あの伯母はたまに難しいことも要求する。

『危険が迫ったら助けが来るまでは自分でなんとかしろ。熊が襲ってきたら、ブーツと立ってるだけじゃ駄目だぞ』

そう言われたこともある。

(く、熊……?)

梨蘭は途端に身震いした。

(せ、西華^{せいか}に、熊など居るはずないではないか……)

そうは思うが、お化けを信じる歳である。

いま風に揺らいだ桃木の枝に一瞬ビクつとした。

そのとき、

「よお、リーラン」

反対側の桃木の影から声がした。

振り向くと、見知った顔がある。

オレンジ色の頭をした中年の男が木の根元にだらしなく座りこんでいた。知らない間柄なら後ずさりしたくなるような風貌だが、梨蘭にとっては沙龍や九雷と同じくらい近しい人物である。

「陽兄——」

ホツとした梨蘭は陽輝の方に歩いていった。

「なにをしておるのじゃ？」

「花見酒、と言って、お前に分かるかな」

陽輝の手には杯さかずきが、足元には梨蘭の頭ほどの大きさの徳利とっくりがある。

「一人で酒を呑んでおったのか。侘しいのう」

「そう言うなよ。美女の酌で呑むのもいいが、たまには一人酒もいいもんだぜ？」

「陽兄は強いのう。わらわは一人は嫌いじゃ」

「まあ、その歳で孤独を愛してたら、それはそれで問題だけだな」

「うむ……」

会話の内容を理解しているのか、してないのか、とりあえず梨蘭は迷子状態から脱したことで気持ちが大きくなった。

陽輝の隣に座って、しばらく他愛のない話をしていたが、ふと、こんなことを言い出した。

「ところでな、陽兄、『キス』したことあるか？」

「ッ……!？」

陽輝は噴き出しそうになった仙酒を辛うじて飲み干した。

『蟠桃会』開催中でないとこの酒は呑めないので、一滴たりとも無駄にはできない。

「な、なんだなんだ、いきなり。一体なんの話だ？ この五歳児が」

「五歳児五歳児言うなと言うのに……。いや、最近のわらわの第一関心事項なのじゃ。で、したことあるのか？ ないのか？」

「そりや、俺はいままで百万回はしてると思うが……」

「ひゃ、ひやくまん!? ス、スゴイのじゃ。陽兄はキスの達人なのじゃな!?」

そんな冗談を頭から信じる梨蘭をからかいながらも、陽輝はなぜこの五歳児がこんなことを言い出したのか気になった。

とりあえず、思い当たることは一つしかない。

「つまり、沙龍と九雷がしてたのを見ちやったとか、そういう話か？」

「そんなの、あの二人は毎日しておる。わらわが居ようと居まいとお構いなしじゃ」

「あー……」

「今朝なんか、三十分くらいしておったぞ。あれは見てる方が恥ずかしくなるのう」

「あー……」

それは幼児教育上どうかとも思ったが、口を出すつもりはなかった。

「それで、大人は皆やってるものなのかのう、と思ったのじゃ」

「まあ、やってるな、間違いなく」

「そ、そうか……」

「もしかして、リーランもやってみたいのか？」

「い、いや……、九兄が『梨蘭にはまだ早い』と言うので……。大人になつてからでないと、できぬものなのじゃろう？」

「いや、そんなこたあないぜ？」

陽輝はニヤニヤと笑っている。

どうやら、なぜ梨蘭がこんなことを言い出したのか、分かってきたようだ。

「そ、そうなのか!？」

「達人の俺がしてやろうか？」

陽輝が白い歯を見せながら梨蘭の頭に手を置いたとき、

ボズツ

と、陽輝の顔面にめり込む鉄拳があつた。

鋭く抉るような、キレのある正拳突きだが、その拳は間違いなく華奢な白い腕から繰り出されたものだった。

「そ、奏欽殿!？」

梨蘭が驚いて見上げると、艶やかな黒髪と端正な顔立ちの美女が目を吊り上げ

ていた。

「梨蘭様、そういうことは軽々しく仰るものではございません。特にこのような外道には」

「オイ、奏……」

顔の形が変わってしまった陽輝は、その悪口に文句を言おうとしたが、そこま
でだった。

静かに激怒している奏欽の表情が怖かったからである。

梨蘭は、この夫婦の攻防は理解していない。

「そういうものなのか？ 誰とでもするものではないのか？ 伯母上が『あれは
挨拶みたいなもの』と言っておったのだが……」

「え、えーと……、所によつてはそういう場合もあるようですが、少なくとも、
この天仙界においては挨拶以上の意味があります」

「ふむ……？」

よく分からぬ、という顔をしている梨蘭に、奏欽が咳払いしながら続ける。

「ですから、あまり親しくない異性と挨拶以上のものを交わすのは、論外です

わ

「親しければよいのか？」

「え、えーと……」

奏欽が言葉に詰まる。

陽輝は見かねて口を挟んだ。

「お前の説明は回りくどいんだよ。いいか？ リーラン。九雷は確かに正しい。

発情したらあれこれ理屈なんかなくても、自然としたくなるもんなんだよ。それ

までは——」

ボズツ

と、陽輝の顔が今度こそひしゃげる。

「えーとですね、梨蘭様が心からお慕いする殿方が出来たとき、自然とそういう気持ちになるものなんです」

奏欽が言葉を変えて説明した。

勿論、怒りと焦りの顔はかろうじて隠している。

が、梨蘭はあっけらかんと言った。

「ウム、それなら既に居るぞ」

「えッ、ホントかよ!? おめー、早熟すぎるぞ。誰だ?」

「フッフ、それは内緒じゃ……」

不敵に笑う梨蘭は、先日の件で『ライバルたち』に一步リードしていると思いを込めている。

先日の件とは赤帝君に飾り太刀をプレゼントしたことだ。

プレゼントを受け取ってもらったので、次は婚約か、いや、デートが先か? などと思ってるくらいだ。

「そうか。なるほど。『好きな人』とするものなのか。分かったぞ」

「……まあ、間違っでは……いない……かしら?」

「俺に聞くな」

「よし、ならば、お願いしてみるのじゃ!」

「え、ええっ!」

そのとき、飛龍が梨蘭を呼ぶ声が聞こえた。

「梨蘭、どこだー?」

「ここじゃ！ お主、どこフラフラしておった！」

「……」

飛龍の無表情の中に、安堵の瞳がある。

両手に抱えていた荷物は半分に減っていたが、綿飴などいつでも買えるのだから、迷子を探し当てた代金にしては安いだろう。

梨蘭は、陽輝と奏欽に挨拶すると飛龍の方に駆けていく。

残された夫婦は、しばし五歳児のパワーに気圧されていた。

「すげー行動力だな。つーか、いいのか？」

「……」

奏欽の静かな怒りは続いているようで、陽輝を睨む目は厳しい。

「なんだよ？ お前、あんなチビッコに妬いてんのか？」

「そうじゃない。バカッ。あんなちっちゃい子のファースト・キス奪ってドースンのよッ！ しかも、紳士ならまだしも——」

そのお小言を流しながら、陽輝は何事もなかったかのように手酌を再開する。

「ところで、リーランの好きな奴って誰なんだ？」

「知らないわよ？」

「まあ、少なくとも、『九兄』や『陽兄』じゃないよな。……真武君か？」
「なんでそうなるの？」

「だって、どうせ沙龍の周りに居る奴だろ？ あの年のお嬢ちゃんが好きなのは、ああいうキレーな男だと相場が決まってる」

「そうかしら……。私は違うような気もするけど……」

確かに、木佐小次郎は奏欽でさえ目を見張るほどの美男子である。宮中でも木佐に見惚れて柱に顔をぶつけた官吏が居る、という逸話があるくらいだ。

しかし、あの愛想のない性格では子供の心は掴めないだろうと奏欽は思うのだ。

「それより、こんなところでなにしてたの。懐のものも預けないで」

「あ？ ああ……」

陽輝は生返事をしたが、奏欽がなぜわざわざ自分を探しに来たのかは分かっていた。

本来、蟠桃会では武器の類は預けることになっている。親睦のための酒宴に私

闘はご法度というわけだ。

その禁を破ったことが見つければ、天界軍の大將とて無罪放免というわけにはいかないだろう。

「心配すんな。九雷の許可は取ってある」

「……」

現在の天仙界において、いま一番注目されているのが梨蘭の動静である。

そろそろ引退を考えていると噂の西王母が、正式に梨蘭を後継に指名すれば、天界側は必ず梨蘭を抱き込もうとするだろう。老獪な西王母より、五歳児の梨蘭の方が懐柔しやすいからである。

その政策の一環として婚姻による「天仙合体」が図られるのか。

西王母はどう出るつもりなのか。

この事態にあつて、仙界の鷹派が強硬な態度に出ることは充分考えられるのだが――。

(なにも起こらなきやいいんだけど……)

奏欽のように思つてる者が大半だとしても、実際にはこうしてなにかを警戒し

ている天界軍の大將が居るし、梨蘭には飛龍が二十四時間張り付いているのが現状だった。

2 偃月の溜息

蟠桃会は連日連夜、十日間を徹して行われる。

最高神以外は欠席不可、但し、招待された者たちは十日間の日程を全てこなさなければならぬというわけでもない。

二、三日の滞在で家や職場に戻る者、途中から参加する者、各々の事情により滞在期間は異なった。

梨蘭は西王母ファミリーの一員として主催者側に属するが、接待役は期待されていない。

いまはなんの憂いもなく、ただ周囲に可愛いがられ、かしずず傅かかれ、疲れたらフカフカの牀しょうで眠ればいいだけの幸せな時期とも言える。

しかし、それは大人の目で見たと時の話である。

小さな梨蘭には、小さいなりの悩みがあるし、いまはどうすれば意中の人を振り向かせることができるのかで頭はいっぱいである。

(蟠桃会中に、なんとか朱雀星君を捕まえて、あの件をお願いしてみるのじゃ……！)

寝巻きに着替えた梨蘭は、鏡の中の自分にそう誓った。

今日はまだ初日である。律儀な赤帝君はきつと初日から参加しているはずなのでチャンスは幾らでもある、と梨蘭は思った。

「ランラン、そろそろ寝る時間だぞー？」

偃月の呼ぶ声がしたので、梨蘭はいそいそとバス・ルームを出て行った。

「はい」

屋敷の一室で久しぶりに実の父母と一緒に眠れるのが嬉しくて、梨蘭ははしゃいでいた。

普段は滅多に清林山から出られない吉羅も、この蟠桃会だけは毎年参加している。

全日程はさすがに無理だったが、父親の偃月の方はずっと十日間一緒に居てくれると約束してくれた。

「母上の隣で一緒に寝るのじゃ！」

ふんわりとしたシートに飛び込んで、梨蘭は当然のように真ん中を陣取った。

「随分、ご機嫌ね？」

「ふふふー」

満面の笑みで吉羅に寄り添う梨蘭は、やはりまだ母親の恋しい歳である。

沙龍は、やはり梨蘭にとって『母』ではない。

普段の水雲宮の暮らしに不満があるわけではないのだが、母親の隣で眠れる安心感というのはなにもものにも変え難い。

「あらら、もう寝ちやったみたい」

初日にあちこち動き回った疲れが出たのか、梨蘭がころっと寝息をたてるのを見て、吉羅は微笑んだ。

その瞳はどこか悲しげでもある。

自分のせいで寂しい想いをさせているという負い目があるのだ。

「ちよつと、哥々ココ（※沙龍のこと）に会ってくる」

偃月は出掛けるつもりのようなのだ。

時間はまだ夜の八時を回ったぐらいである。

「そう。行ってらっしゃい。気を付けて……」

一瞬見せた厳しい表情から、夫が一人で遊びに行くわけではないと分かったので、吉羅は特になにも言わなかった。

天界の火雲宮の使者が、仙界の西王母に内々に打診してきたのは、つい一ヶ月ほど前の話だ。

『そろそろ秦帝陛下の正妃を決めなければいけない時期でして……』

世間話程度の、あくまでも様子見の会話である。

しかし、西王母には、それが『梨蘭様を差し出す気はありますか?』と聞こえたし、使者の方も火雲宮の意向は伝わった、と理解した。

『時が経つのは早いものですね』

西王母はそう答えた。

つまり、梨蘭はまだ若すぎるが、時が経つのは早いから無問題、という意味にも取れるが、さりとてはつきりとは答えていない——ということである。

是とも取れるし、非とも取れる。

実際、西王母本人もまだ決めかねていた。

次期西王母である梨蘭を、同時に天界の正妃にするということは、事実上、仙界は天界に吸収合併されるようなものである。

仙界の創始者にして統治者の立場としては、それに大手を振って応えるわけにはいかない。

しかし、『非』と突っぱねたとしても、仙界はやはり潰される運命にあるのではないか、とも思うのだ。

現実的な問題としても、仙界の軍事力は天界四方軍の一個大隊にも満たない。全面的に対立することになんの益もないと分かっているからこそ、西王母はこの数千年の間、天界に逆らうでも諂うでもない、中立の立場を取ってきたのだ。

九天玄女は、その西王母の真意をよく汲んでくれる。

しかし、崑崙の仙道たち全員が九玄のように達観しているわけではない。

中には独立を唱える者も居るし、天界の庇護を嫌う者も居る。

そういった者たちが、梨蘭と秦帝の結婚に反対運動を起こすのは目に見えていた。

偃月は、西王母に呼び出されて、娘の行く末をどうしたいかと問われたとき、

「本人が幸せならそれでいい」とだけ答えた。

組織の上に立ったこともない偃月には、そういう答え方しかできなかつたし、それ以外は望んでいなかつたからだ。

今更だが、えらい運命を背負つた子を作つてしまった、と思う。

「哥々……、まだ八時だぞ……」

赤い顔をして九雷の膝枕で寝ている沙龍を見て、偃月はさっきの我が娘の寝顔を思い出していた。

そうなのだ。

吉羅よりも、自分よりも、梨蘭が一番、沙龍に似ている。

髪の色さえ同じなら、冗談抜きにして見間違えてもおかしくないくらいなのだ。

沙龍は初日の夜の宴会をごく親しい者だけで楽しんでいたようだ。

勢揃いしているメンバーはよく見れば大した面子なのだが、みな適当にくつろいでいて、頭上の満開の桃の花を愛でている者は居ない。

「沙龍に用だつたのか？」

九雷が聞くついでに、お前も吞んで行け、という仕草をしたので、偃月も地べたに腰を下ろした。

「まあ、用というか、なんというか……」

言葉を濁すも、それだけで九雷には通じるだろう。

「宴席だ。なんでも話してくれ。俺が代わりに聞いてやる」

「そいつの口車に乗ると、痛い目見るぞ、偃月」

横合いから茶々を入れたのは陽輝だった。

既にかなり出来上がってるのは、昼間から吞んでいるせいである。

いや、正確に言えば、昨夜の前夜祭からずっと、だ。

「久しぶり、偃月君」

そう言ったのは黒衣の木佐である。

こちらはまだ素面の顔をしているが、足元に空いてる酒瓶を見れば、あまり信用しない方がよさそうだった。

「うわ、ホントに大した面子だ。俺、ここに居ていいんだらうか」

苦笑する偃月だが、決して気後れはしていない。

そのあたりはさすがに沙龍の弟である。

「梨蘭のことだろう……？」

幾分酔いが回ってるような九雷は、いつもの先鋭的な瞳の色をしていない。

（そりゃ、この人だって二十四時間『天界軍元帥』なわけでもないよな）

と、偃月は思う。なにより、梨蘭が意外にも懐いている人物だ。娘の普段の保護者としては、全幅の信頼を置くに足る。

しかし、天界側か、仙界側か、という見方をしたときには、偃月としてはどうしても距離を置かざるを得ない。

だから、言葉は慎重に選んだ。

「俺には分からない。ランランさえいいなら、結婚でも離婚でもしたらいいと思うが、政治的なことまで考えなきゃいけないとなるとな……」

九雷に勧められた杯の中身を飲み干して、偃月はぼそぼそと話し始める。

最初に会ったときから、畏まった言葉使いはしていない。

概ね、仙界の人間はそういう者が多い。

礼節は重んじてても、位や階級は関係ない、というのが仙道たちの立場だから

だ。

「そこら辺、哥々はどう思ってたのかな、と思って聞きにきたんだが、答えは聞かなくとも分かる気もする」

「そうだな……」

九雷は無防備に寝顔を晒している沙龍を見た。

基本的に、この自由人は「自分のことは自分で」という主義である。偃月はそれを嫌というほど知っているし、梨蘭のことを相談したとしても、

「梨蘭のことは梨蘭が決めればいい」

と言われるのがオチだろう。

それでも、敢えて沙龍に意見を聞こうと思ったのは、梨蘭の結婚は沙龍にもかなり影響のあることだし、天仙界にとっては最重要事項だからだ。

「決定が保留になっている以上、早急に目に見えるような変化はないだろうが……」

問題が『誰に決定権があるか』ということか

「誰なんだ？ 西王母様か、天帝様か、ってことか？」

偃月はそう聞いたのだが、

「さあ……。世論が決める、という場合もある」

なんだって？ 世論？ 一体この元帥様は絶対君主制の世界でなにを言い出すのだ——、と偃月は思ったが、九雷の言うこともそれほどずれた意見ではない。

もし、梨蘭の輿入れが決まる方向になると、崑崙の血気盛んな徒党は確実に黙っていないだろう。

偃月の祖父が創始に関わったという『杏林会』の連中も、これを機にまた動き出すかもしれない。

『梨蘭様の火雲宮行きは人質同然である！ 断固阻止すべし！』

そんな動きが仙界側の『世論』になったとして、西王母はそれをひそかに後押しするのか、それとも潰そうとするのか、偃月には分からない。

ただ、そうなたらそうなたで、今度は天界側の工作人員たちも具体的に動き始めるはずである。

やはり、こんな面倒くさい縁談はお断りするのが無難ではないか——。そう思いたくもなる。

ハア、と溜息をつきながら酒を呑む偃月に、陽輝がまた軽口を挟んだ。

「悩みを晴らすために呑むのはお酒様に失礼だぞ」

「この酔っ払いの言うことは気にしないで下さい、偃月さん」

奏欽がピシヤリと言った。

なぜ酒の呑めない奏欽がこの場に居るのかというと、陽輝が膝を解放してこないからだ。

奏欽は飲んだくれの夫よりも、やんちゃ盛りの我が子たちはちゃんと寝所に入ったのだろうかとそちらの方が心配なのだが、この話題の行方は気になった。

「偃月君——」

木佐小次郎が仕事中のような口調で呼びかけた。

「物事は成るようにならなんだよ。君がここで何万回溜息をつこうが、あの小さな公主の運命は二つに一つしかない。それを受け入れるか、否か、それだけだろう」

まさにその通りだ、と偃月は思った。

しかし、いままで理路整然と語っていた木佐が、急に動きが止まって眠りだし

たので、やはり溜息をついてしまった。

3 我的第一个吻—my first kiss—

「は、ハイ？ い、今なんと——？」

赤帝朱雀星君は、自分の腰にも届かない背丈の梨蘭に、思わず聞き返した。

賑やかな酒宴があちこちで開催されている中、その喧騒から逃げるようにこの蔵書室で本を読んでいた自分を見つけた行動力も凄いが、いまの気合の入った梨蘭の言葉は耳を疑うほどに衝撃だったのだ。

梨蘭は少し息を弾ませている。

走って来たのだろうか。

しかし、西王母の屋敷のある場所から、この離れの別棟まで、子供の足で歩けば相当距離があるはずなのに、梨蘭はどうやって来たのだろうか。

「聞こえなかったのか？ わらわはそなたと『キス』してみたいのじゃ」

「……」

今度は耳を疑う余地はない。

赤帝君はしばし絶句した。

「梨蘭様……。それは……。その……。ですね。なにかのお遊びですか？」

「お遊び？ いや、遊びではない。わらわは本気なのじゃ」

「そ、そうですか……。しかし、それには色々と弊害がありました」

「ヘイガイ？」

「例えば、貴女にそんなことをしたら、私が貴女のご両親や緑麗様に叱られますので」

「なぜじゃ？ 別に、そなたはなにも悪くないのじゃ」

無邪気に言う梨蘭にはなんの悪意もない。

これはどうしたものか、と赤帝君が返答に詰まっていると、梨蘭は誤解した。

「そうか、なるほど。こればかりは合意というものも必要ということか。無理を言ってますまぬ」

「……梨蘭様？」

「そうであった。そなたが嫌ならしよすがないのじゃ……」
しよんぼりとして下を向く。

そのいじらしさには微笑みすら出るのだが、赤帝君はいまの梨蘭に対して、その望みを叶えてやることはとても出来ない、と生真面目に思った。

「そうではないのですよ。梨蘭様」

赤帝君は膝について、梨蘭の視線に合わせた。

「こういうものは軽々しく興味本位でするものではない、ということなのです。梨蘭様がいずれしかるべき方と巡り会ったときのために、大切にとっておかれた方が宜しいかと……」

「奏欽殿と同じことを言うのだな。わらわは決して軽々しく言っているわけではないのじゃが……」

それでも、と赤帝君は思う。

五歳の頭でいかに真剣に考え、結論を出したとしても、それは大人の目から見れば、明日にでも変わってしまう危うさがある。

「嫌なわけではないのだな……?」

「そうですね」

苦笑しつつも、それは認めた。

忘れ難き意中の人の面影を持つこの少女は、赤帝君にとってはやはり特別な存在である。

しかし、だからといって、赤帝君自身は例の古典のような真似をするつもりは一切なかった。光源氏が藤壺を想い、姪の紫の上を身代わりにしたのは、男の身勝手にしか思えないからだ。

なにより、そんなことをすれば梨蘭が傷付くし、沙龍は怒るだろう。

「では……」

梨蘭がなかなか納得しないので、赤帝君は一つ提案を試してみた。

「では、こうしましょう、梨蘭様。貴女が大きくなられたとき、それでもまだ、今のお気持ちが変わらないのであれば……」

「してくれるのか？」

「はい。お約束致します」

「う、うむ……？　しかし、それはあと何年後の話なのじゃ？　わらわはあまり気の長い方ではないのだが」

「そうですね。少なくとも、十年は」

「なんと、十年か。長いなー……。わらわはまだ五年しか生きていないのだから、さらにその二倍か……？ 気が遠くなるぞ」

「それでもないですよ、梨蘭様。十年などあつという間です」

「そうか……？」

赤帝君がホツとした顔で微笑むので、梨蘭はなんとなくムツとした。彼が『やれやれ、なんとかなった』と思ったのが分かったのだろう。

そのとき、幸か不幸か、飛龍の声が開け放った窓の外に聞こえた。

梨蘭を探しに来たのだろう。

今日は、あの手この手で飛龍の監視の目から抜け出し、色んな人の協力を強引に得て、ここまでやって来たのだ。

五歳の梨蘭にしてみれば大冒険である。

その大冒険のエンディングがこれでは切ないではないか、と梨蘭は思った。

だから、飛龍の呼び声が近付いて来ると、意を決し、ニヤリ、と笑った。

「……？」

赤帝君はその意味を理解できなかった。

「お迎えのようじゃ。このままそこから出てゆくから、手を貸してくれぬか？」と、出窓を指す。

「はい。では、失礼——」

なにも考えずに、赤帝君が梨蘭の小さな体を出窓に乗せると、思わぬ事が起こった。

時間にして一瞬だ。

梨蘭の閉じた目が眼下に見えただけで、小さななにかが唇に触れたくらいにしか感じなかった。

「……」

やられた——と思ったが、こんな悪戯を怒るわけにもいかない。

また、そんな気持ちもさらさらなかった。

「こ、これはただの挨拶なのじゃ」

さすがに、自分のしたことが恥ずかしかったのか、梨蘭は顔中を真っ赤にしていた。

「……梨蘭？」



間一髪。

窓の外に現れた飛龍はなにがなにやらよく分からない顔をしていたが、梨蘭が無言でその背に乗り込むと、すぐにその場を離れた。

咄然とその様を見送る赤帝君は、梨蘭に対してではなく、背後の野次馬にはかすかな怒りを感じている。

「見ーちやった♪」

本棚の影から、白いものがフサフサしている。

はくていくん
白帝君の銀髪である。

「なになに、いまのどーゆうことーん？」

分かっているのに敢えて聞く白帝君の言葉は無視して、赤帝君は、

「それで、道君は見つけたのか？」

単刀直入に聞いた。

「んもー、人界から戻ったばっかだつてのに、労いの言葉もないのー？ 一応ね、見つけたから戻ってきたんだけど。なんか珍しく『蟠桃会の最終日に顔を出す』って言ってたぜ」

単独で地上を放浪していることが多い太上道君は、なかなか捕まえるのが難しいのだが、白帝君にはやはり心当たりがあつたようだ。

「まあ、ジジイの腹は分かんねえが、西王母にちよつと怒ってる感じだったな」
「そうか……」

白帝君の育ての親である太上道君は根っからの自由主義者なので、五歳の梨蘭の結婚話を不快に思うのは分らないではない。

しかし、それで西王母に意見するためだけに戻ってくるほどお節介というわけでもない。なにか他の理由があるのだろう、と赤帝君は思った。

「でー？ あのチビ姫の初恋は儂くも散ってしまふわけ？」

白帝君はふざけながらも赤帝君の本音を聞いている。

「初恋ってのは実らないもんだらう」

赤帝君は面倒臭そうに答えるも、微妙にごまかされた、と白帝君は感じた。

「ふうーん……？」

こういうときの赤帝君は頑ななので、しつこく聞いても無駄である。

（まあ……、昔から変わっていないとすれば、阿哥は年下に興味はないはずなん

だよな……)

大昔、初心な赤帝君を遊里に連れて行ったといういきさつは、当時、緑麗本人から聞いた。

最初、騙されて連れていかれた赤帝君は怒っていたのだが、そのとき相手をしたという娼妓としばらく商売を抜きにして付き合っていたという話もある。

それを聞いたとき、白帝君は「『最初の女』に骨抜きにされたのか」と思ったのだが、実際にはもう少し複雑なやり取りがあったようだ。

その後、赤帝君が付き合う女性はみな年上ばかりだった。

緑麗に対しては相変わらず不自然に距離を置いていたので、やはりそこには愛憎めいたものもあったのかもしれない。

(俺としてはあのチビ姫と阿哥がくつつくのも面白いんだけどな)

脳天気な白帝君は無責任にそんなことを考えていた。

「ふっふっふ……」

様々な周囲の思惑を余所に、不気味に笑う梨蘭は、この世の春だった。

4 七人の小人

梨蘭には実は手足となる霊獣が四匹居る。

子パンダたちで、各々それほど力はないのだが、実に忠実に梨蘭の言うことを聞く。

先日、赤帝君の居場所をつきとめたのも、このパンダたちである。

人語は喋れないがこちらの言うことはほぼ百パーセント理解しているので、梨蘭もよく話相手にしている。

パンダたちは頷いたり、首を振ったり、独特なボデイラングージでかなり細かい意思表示もできるのだ。

この四匹はよく見ると個性があるのだが、一見分かりにくいので、梨蘭が色違いのマフラーを巻いてやっている。赤、青、黄、緑、である。

彼らとの出会いは二年ほど前にさかのぼる。

梨蘭が清林山（※母親の吉羅公主が静養している山）で迷子になったとき、山奥で

出会ったのだが、彼らは「かわいがってください」という張り紙がされた段ボール箱の中に入っていた。

普通、こんな人気のない山奥に、霊獣を捨てていく者が居るとは思えないのだが、梨蘭は素直にその張り紙を信じた。

迷子になって陽も落ちて暗くなり、心細かったのもあって、梨蘭はパンダ四匹と一緒にうずくまっていた。

夜になり、気温もどんどん下がっていく。お腹もぺこぺこだった。

チョコレートをはひとかけ持っていたのを思い出した梨蘭は、

「上に立つ者は自分を犠牲にしても弱い者を守らねばならぬ」

という西王母や竜吉公主の教え通りに、子パンダたちにそれを分け与えた。

小さい梨蘭はこのとき、死を覚悟したのかもしれない。しかし、きっと飛龍が探しにきてくれるだろうと信じてもいた。

ほどなくして飛龍が現れ、事なきを得た。パンダたちはそれ以来、梨蘭に懐いて、離れようとしなかった。

蟠桃会の中なか日かひである。

「今日は明明たちと遊ぶ約束をしているのじゃ。お主たちも一緒に来るとよい」

「……！」

「……」

「……？」

「」

梨蘭はパンダ四匹と共に催し物をやっている広場までやって来た。

相変わらず賑わっているが、初日よりは人も少しはけた感じはある。

「梨蘭！ こっちー！」

元気のよい女の子が広場の向こうで手を振っている。

長い黒髪をツインテールのようにしていて、藤色の拳法着を着ている。

隣には色違いの同じ服を着た、同じ背丈の男の子がやはり控えめに手を振っていた。明明と敖俊である。

赤ん坊の頃から互いの家を行き来する仲なので、ほとんど兄弟姉妹みたいなも

のだ。

「明明！ 敖俊！」

梨蘭が彼らのほうに走っていくと、パンダ四匹がカルガモのヒナのように後に続いた。

「すまぬ、遅れたか？」

「ううん、大丈夫だよ、リーラン。メイメイが金魚すくいやりたいって、早く出てきたんだ」

敖俊がそう言ってくれた。三人の中では一番穏やかで気が弱い。活発な明明の抑え役だ。

「あー、パンダレッドもやりたいの？」

明明が水槽の前にしゃがんで狙いを定めているところを、赤いマフラーを巻いたパンダが興味津々に覗き込んでいた。

「公主様のお連れかね？ はいどうぞ」

タレ目の中年の店主が「一回だけサービスだよ」と言って、ポイをパンダレッドに渡してくれた。道士崩れのような風貌をしている。正式な師匠を持つ身ではな

いのだろう。仙界にはそういった半グレのような者たちもたくさん居る。

「すまぬ、あとでおばあ様に言っておくゆえ」

梨蘭がそう言うと、店主は笑って手を振った。

「いいんですよ、あつしらは西王母様のご慈悲で生きてるようなもんですからね」

「……」

店主の言葉の意味は理解できなかったが、卑屈なへりくだった笑みは梨蘭がよく見るものだ。

梨蘭と敖俊は、明明とパンダレッドが一生懸命金魚をすくっているのを見守っている。

パンダレッドはやり方がよく分かっていないのか、すぐにポイをダメにしていた。

「あー、やっぱだめだあー！」

明明も奮闘したが、結局一匹も救えずにポイを破ってしまった。

店主は一匹あげるよ、と言ってくれたが、明明は断っていた。もらってもすぐ

死なせてしまうから、と言って。

「なんで？ 金魚が欲しかったんじゃないの？」

敖俊はそう聞いたのだが、明明は答えなかった。

「……？」

「金魚だって素人に世話されるより業者のところに居たいもんでしょ」
店を離れたところで明明はそう言っていた。

大人びたことを言う子なのだが、その言い方は父親にも母親にも似ていない。
強いていえば伯父の敖丁に似ていた。

三人はそれから綿あめを買って、ちびちび食べながら雑技団の出し物を見学したり、簡易遊園地のお化け屋敷などに入ったりして、さんざん遊んだ。

今日は「自由になにをしてもいい日」なので、子供だけで過ごしている。
もちろん、飛龍や偃月がちゃんとこっさりガードしているのだが、三人はそれに気づいていない。

大人の目のない場所で羽を伸ばしている気である。

桃園のはしっこで休憩しているときに、

「そ、そうだ、リーラン。ケツコンするってホント？」

敖俊が明明につつかれながら聞いて来た。どうやら双子は今日、ずっとそれを聞きたがっていたようである。

「ム？ まだプロポーズはしてもされてもいないのじゃが……」

梨蘭自身は、赤帝君と結婚寸前でもおかしくはない、という認識でいる。が、二人が聞いているのは赤帝君のことではなかった。だから話は噛み合わない。

「でも、する予定はあるってこと？」

「う、うむ。まだ先の話じゃが……」

と、モジモジと赤くなって答える。

それを見て、双子は顔を見合わせた。

「えっと……、梨蘭、その人のこと、好きなの？」

明明が聞いた。

「あ、当たり前ではないか！」

「そっか……、ならいいんだけど」

「……？」

梨蘭は二人が思ったほど食いつかないのが不満だった。普通は「え、どんな人!?!」とか「かっこいい!?!」とか「どこで会ったの!?!」などと質問責めにされて、のろけ話を始めるものではないのか。

このまま結婚話が終わるのはつまらないと思ったので、梨蘭は自分から言ってみた。

「わらわの『好きな人』はとても凛々しい殿方なのじゃ。……見に行くか？」

「……う、うん」

やはり顔を見合わせてから頷いた双子は、少し心配そうな顔をしている。

「しばし待つのじゃ。どこにいるのかはすぐは分からぬ」

梨蘭は二人からちよつと離れてパンダ四匹を呼び寄せると、こそつと「朱雀星君を探して来てほしいのじゃ」と言ってみた。

頷いたパンダたちは、すぐに散り散りになった。

霊獣とはいえ、飛べるわけではないので、少々時間はかかる。それでも三十分もしないうちにパンダレッドが広場に戻って来て、梨蘭の袖を引っ張った。首尾は上々といったところだ。

「敖俊、明明、見つけたようじゃ。行くぞ」

「へー、すごいね」

明明是パンダレッドの頭を撫でている。

「僕も霊獣欲しいなー」

敖俊も目を輝かせていた。

「お主たちは龍族なのじゃから、そのうち龍に変化できて飛べるようになるはずじゃ」

「あれは全員ができるわけじゃないみたいだよ？ それに、飛ぶのは難しいみたい」

「そうなのか？ 飛龍はよくやっているが」

「敖開ごうかい（飛龍の本名）様は純血だから、僕たちとは違うんだよ」

龍族の父と龍族の母による純血種、という意味である。

やはり潜在能力の違いというのはあるらしい。

敖俊の言い方にムツとしたらしい明明が口をはさむ。

「そうね、私たちは『ハイブリッド』だから、別の道を模索しないとね」

「わらわも『ハイブリッド』じゃ」

梨蘭はにんまり笑って言ってやった。

仙女の母と、普通の人間の父を持つ梨蘭も、仙界ではある意味異端児である。

しかし、沙龍のおおらかな教育のせいか、はたまた西王母の絶対権力のおかげか、それをコンプレックスに思ったことはない。

赤帝君は午後のひとときを、職場の面々と過ごしていた。

オープンカフェのような場所で、四人でカードゲームをやっている。

そのテーブルには梨蘭の嫌いな木佐小次郎も居たので、梨蘭は「チツ」という顔をして、その場に出ていくのはやめた。

三人とパンダレッドは手前のベンチに身を伏せ、向こうのテーブルの様子を見た。

「え？ どの人？」

明明がきよろきよろと見まわす。

テーブルには木佐と赤帝君に加え、彼らの秘書官の、曹昌そうしようと蓮レンが居た。

「あの中で一番イケメンで凛々しくて目元涼しくて優しそうな殿方じゃ」

梨蘭はドヤ顔で言うも、

「あ、黒い服の人？」

明明はそう答えてしまった。黒衣の木佐のことを言っているのだ。

梨蘭の額に血管が浮き出た。確かに、一般的には木佐小次郎のほうが美青年かもしれないが、梨蘭的には赤帝君のほうが一億倍くらいイケメンなのである。

「違う！ 緋の衣のほうじゃ！」

「あれ……？ 私、見たことあるかも」

明明がその赤帝君を見て言った。

「うん、僕も知ってる、あの人。確か四方将神だよね？」

敖俊が言った。

「お主ら、会ったことあるのか？」

「直接話したことはないけど、前に、敖丁伯父さんの屋敷に来てた人じゃないかなあ」

敖俊が言う。

明明のほうはこの前、挨拶もした。

「そう、伯父さんの友達だった」

「フム……そうであったか」

「あの人が梨蘭の結婚する人なの？」

「ウ、ウム。ゆくゆくはな」

「……」

「……」

双子がまた沈黙している間にパンダ三匹も合流して、七人組となったのだが、その体積はベンチからはみ出していた。

「なんか……、向こうに『七人の小人』みたいなのが居るんだが、なんだあれは」
木佐はカードをめくりながら言った。

見世物になっているのは自分ではないだろうが、あまり気分のいいものではない

い。木佐は子供は好きではないのだ。

「星^{セイ}様、人気者ですねぇ」

曹昌は笑いながら言っている。

「最近は『レディキラー』を返上して『チャイルドキラー』になってますよ」
代わりに蓮が答えた。

「やめてくれ、蓮……。連続誘拐犯みたいに聞こえる」

赤帝君は軽く額を押さえたが、この場で一番勝っているのは赤帝君であった。
賭け事はやらない主義だが、純粋な勝ち負けだけのゲームならやる、というの
で、四人でポーカーをしているのだ。

蟠桃会開催中、酒飲み以外は暇を持て余すことが多いので、日中の過ごし方も
様々である。

木佐いわくの『七人の小人』は、広場まで戻って来ると、顔を突き合わせて事
実確認をしていた。

「僕たち、父様と母様の話をこつそり聞いちゃったんだけど、それが、リーランが結婚するかもっていう話でね」

敖俊が丁寧に教えてくれた。

「うむ、だからそれは間違っておらぬというのに」

「でも、相手はさっきの朱雀星君じゃなくて、秦帝陛下だって言ってたんだ」

「ム？ なんの話じゃ？」

梨蘭にしてみれば寝耳に水である。

「やっぱり、リーランは知らなかったんだね？ そういう話になってるみたいだよ？」

「なんと……？ わらわが陛下と結婚するのか？」

他人事のように言ってみるも、梨蘭はサーっとなにかが引いていくのを感じた。

これは、いつものあれではないか？ お腹がすいてても平気な顔をしていなければならなかったり、泣きたくても我慢しなければいけない、あれだ。

こういうときは、人の声も物音もひどく遠くに聞こえる。

「うん、なんでも天界と仙界のジジョーとか？　なんかそういう話」
敖俊の声も、風の彼方に消えそうだ。

「さては、おばあ様の計画か。陛下は嫌いではないが、結婚相手となると……物足りないのう……。まだお子様じゃな」

気丈にそう言ってみたが、ツツコミ待ちのその言葉もむなし。

明明は梨蘭の手が震えているのを見て、慌ててギュツと握ってやった。
そして、

「梨蘭が陛下と結婚する前に、さっきの四方将神と結婚しちゃえばいいんじゃない？」
「い？」

あっけらかんと言った。

「そしたら、ホラ、陛下とは結婚できないわけだし」

「えー、それは無理じゃないかなあ？」

敖俊が諫める。

「ウム。いずれにせよ、結婚式で『誓いのキス』とやらができる身長でないと、結婚はできないという話を聞いた」

「そうなの？　椅子とか持ってきてそこに乗ればできるんじゃないの？」

「結婚式は神聖なものゆえ、そういうズルをしてはいけないようなのじゃ誰から聞いたのか、そんなでたらめを信じている五歳児である。」

「しかし、困ったのう。わらわは身はひとつゆえ、二人とは結婚できぬ……」
梨蘭はここに来て思い出したのだ。

自分は仙界の次の王なのだということ。

「えっと、じゃあ、梨蘭はどうするの？」

「おばあ様の決めたことなら致し方ない。意中の人のことは諦めて、いずれ、陛下と結婚するしかないのう」

パンダ四匹は梨蘭と同じようにしんみりした顔をしている。

「……」

「……」

双子はやはり顔を見合わせるだけだった。

その夜は、偃月、吉羅、梨蘭の三人の親子に西王母が加わっての会食となった。

どうやら西王母は吉羅と梨蘭の意思確認に来たようである。偃月は事前に話をしてあるのでこの場では黙っている。

「私は賛成も反対もしません。どうせできない、というのが正解ですけど」
吉羅はそう言った。

「それを敢えて聞いているのよ。貴女の本音を」

西王母は不機嫌な娘に対して、あくまでも平常心で聞いた。

「なら、反対します、と私が言ったら、お母様は阻止の方向に動いてくださるの？」

「いいえ、貴女を説得して、少しでも不満の残らないように全力で努力するわ」
「ほらね」

と、溜息をつく。

梨蘭はポカン、としていた。

今日の昼間にいきなり聞かされた、自分の結婚の話である。

それを、改めて首謀者たる祖母から直々に言い渡されたのだ。まだ態度は決めかねている。

西王母のほうも本当は賛成なのか反対なのか、梨蘭にはよく分からなかった。

「梨蘭はどう？ 陛下と結婚するのはどうかしら？ 忌憚の無い意見を聞かせてくれる？」

「えっと……、わらわは結婚できる歳ではないと思うのじやが、おばあ様」

「そうね。だからいまは形だけってことになるのだけど」
形だけ。

なら、別に構わないのでは？ と、五歳児は思う。

よくある話ではないか。

たとえば、なにかの式典で植樹をしたりする。「偉い人」は最初に「形だけ」土をかける。でも、全部はやらない。あとで別の大人がちゃんと色々やってくれるのだ。

あれと同じか、と思った。

「えっと……、おばあ様？ 普通、結婚は好きな人とするものと聞いたが、わら

わはやはり『じきせいおうぼ』だから普通ではないのか？」

「……」

その梨蘭の質問に、吉羅が顔をしかめた。

西王母はそれに気付かないふりをして、

「そうね。貴女は『普通の人』ではないわね」

「そ、そうか。わらわはまだよく分からぬのだが……」

「オホホ、大丈夫よ。年頃になれば分かります」

「……」

「……」

吉羅と偃月は苦い顔をするばかりだった。

5 伯母上たち

同じ頃、双子はベッドの中で寝たふりをして小声で話し込んでいた。

好きな人との結婚をあっさり諦めて、祖母のいいなりに政略結婚を受け入れようとする梨蘭は、二人には別世界のお姫様に見えた。

龍王家に生まれた二人にも多少の縛りはあるが、無法者の代名詞のような父親のおかげか窮屈な思いはしていない。

双子は梨蘭の諦めのよさに色んな感情を覚えたのだろう。

それは自分たちにはない潔さや覚悟に対しての感心なのか、あるいは初恋を貫こうとしないことへの苛立ちなのか、いや、もしかしたら単なる哀れみなのかもしれない。しれなかった。

「だって、あれじゃリーランがかわいそうだよ」

敖俊は素直にそう言った。

「うん、分かってる」

明明是既にあれこれ考えているのだが、いくら敖丁の影響を受けていても、五歳児の頭に妙案がすぐ浮かぶわけではない。

「メイメイ、どうしよう？」

こんなとき、方針を決めるのはだいたい明明である。

「敖丁伯父さんが言った。物事をうまく進めるには、目的と手段さえはつきりしていればいいんだって」

「う、うん？」

「目的は、梨蘭が『好きな人』と結婚できるようにすることでもいいと思うんだよね。じゃあ、手段は？」

「どうすればいいの？」

「だから、それを考えてるんだってば！ 俊も考えて！ 二胡だけ巧くてもだめなんだからね！」

「わ、分かっているよう……」

敖俊は母親につきつきりで二胡を習っているのですが、歳のわりにその腕前はなかなかのものである。しかし、荒っぽいことは苦手で、争いごともしないで、親

戚の子供たちの間では完全に舐められていた。口喧嘩では言い負かされるし、取っ組み合いの喧嘩では毎回泣かされている。

それを見かねた父親が最近「喧嘩の仕方」を教えているのだが、陽輝のノウハウは外道すぎてほとんど役に立たない。

「明日、敖丁伯父さんのところにも行ってみる？ なにかいい考えを教えてくださいませんか」

明明が黙ってしまったので、敖俊はそう言ったのだが、

「……いつも伯父さんを頼ってられないわよ。梨蘭だって沙龍伯母さんを頼ったりしてないでしょ……ん？」

明明はそう言ったところでなにか閃いたらしい。

「そうだ、いいこと考えた。明日、梨蘭に話してみよう……」

翌日、明明が朝食もそこそこに、梨蘭の泊まっている離れに遊びに行くと、梨蘭は父親の偃月になだめられながら、グズっていた。

「どーしたの？ 梨蘭」

「あ、明明……」

友達にそんな現場を見られたのが恥ずかしくなったのか、梨蘭は「トイレ！」と言って洗面所に籠ってしまった。顔を洗ってくるつもりなのだろう。

「ごめんな、明明。ランランはかーちゃんが黙って清林山に帰っちゃったんで、すねてるんだ」

偃月が説明してくれた。

梨蘭が寝ている間に吉羅は行ってしまったらしい。起こしてほしかった娘と、起こすのはしのびないと思った母親の行き違いだ。

「そうですか。じゃあ、梨蘭が出てくるまでここで待ってていいですか？」

友達の親の前ではそれなりに行儀よくできるのは、奏欽のしつけのたまものである。

「うん、適当に座ってて。あ、オレンジジュース飲む？」

「はい」

偃月はコップを渡ししながら、俊君は？ などと聞いている。

「……今日は女だけの日なんです」

「適当にそう答えておいた。偃月もそれ以上は追及しない。」

「今日は敖俊はいない方がいいので、置いてきたのだ。」

「ほどなくしてキリツと気持ちを切り替えてきた梨蘭が出てくると、明明是梨蘭を連れ出し、昨日閃いた『いい考え』を伝えた。」

「梨蘭には伯母さんがいるでしょ？ 沙龍伯母さんじゃなくて」

「んむ？ 竜吉伯母上のことか？」

「そう。本当はその人が次の西王母になる予定だったのよね？」

「ウム。しかし、なにか色々事情があるらしく……」

「梨蘭はその事情について、詳しくは分かっていない。」

「ただ、『面倒な事情がある』ということだけ知っている。」

「大人の都合に梨蘭が振り回される必要はないと思わない？ 梨蘭にだって都合

があるのに、なんで子供の梨蘭だけ我慢しなきゃいけないの？ こういうのって

普通、大人が我慢するもんよ」

「明明是自分のそのロジックに絶対の自信があるので、強気である。」

「そ、そういうものか……？」

梨蘭は気圧されている。

ひとまず蟠桃会期間中はわりと気軽に会えるので会ってみよう、ということになっってしまった。

明明は最初からそのつもりで敖俊を置いてきたのである。

普段、竜吉公主の住まう金鑾斗闕きんらんとうけつもそうだし、この桃園でも「竜吉公主の宿泊している場所は男子禁制」という事実だけは周知されているのだ。

「おや、どうした、かわいい二人組が来てくれたものよ」

豪華にカスタマイズされた自室で、竜吉公主は姪っ子とその友達を歓迎してくれたが、梨蘭は及び腰である。

「竜吉伯母上、ご機嫌麗しゅう。そのう……」

「ん？ どうした……？ 今日は大人しいのう」

「……」

明明はまぶしいほどの美女にしばらくあんぐりと口を開けたままだった。

自分の母親も美人だとは思いますが、やはり見慣れているので、ここまで強烈では

ない。

キラキラした大きな瞳に、白い透けるような肌、漆黒の髪――。

金糸のふんだんに使われた衣装を一分の隙なく着こなしたその様は、まさしく『公主』の名にふさわしい。

モジモジしている梨蘭に代わって、明明が口を開いた。

「あとう、竜吉公主様。いま、西王母様が梨蘭の『火雲宮行き』の後押しをしているという噂をご存じですか」

こういった、五歳児にしては回りくどい言い方ができるのも敖丁の影響なのだろう。

「ああ、その話か。なるほど……」

大人の公主は、この子供たちがなぜ自分のところに来たのか、なんとなく分かったのだろう。

「すまぬ、わらわが子を成す意思がないゆえ、梨蘭に迷惑をかけておる」

それは、予てから竜吉公主が言っていることである。梨蘭も直接何度か聞いた。

「しかし、明明。わらわは母上に『子を成すつもりはないが、西王母になるつもりはある』と再三言っておる。それを突っぱねているのは母上のほうでな」

「そうなんですか……」

明明は思惑違いだったのか、肩を落とした。

本当は貴女が西王母になるはずだったのだからなんとかしてください、と言いにきたのに、事はそう簡単ではない。

「母上は、わらわが西王母となったときに無駄な後継者争いが起こることを恐れておるのじやろう。その杞憂は分からぬではないが……。五歳の梨蘭の輿入れは確かに酷よのう」

世情に疎い竜吉公主とはいえ、さすがに天仙合体のようなビッグプロジェクトは耳に入っている。

「しかし……、まてよ？ 虎吉こきつは結婚する意思があるかもしれぬ。色々あつてわらわは話しづらいのじやが、姪っ子のいうことは聞くはずじや」

「虎吉伯母上？ 来ておるのか？ 初日から見ていない気がするが」

「自室にこもっておるのじやろう。遊びに行ってみるがよい」

「……はい」

体よく追っ払われた気もしないではないが、梨蘭は少しホツとした。

明明が竜吉公主を責めるようなことを言ったらどうしよう、と思っていたのだ。

話し方からして一目ならぬ一聞瞭然だが、梨蘭は竜吉公主を『公主』としてのお手本にしている。

周囲を圧倒する美しさも、あの隙の無さも、毅然とした態度も、すべて尊敬しているし、自分もあなりたい、と思っているのだ。

だから、その「尊敬する人」が友達に責められるところは見たくなかったのだ。

「虎吉伯母上というのは、竜吉伯母上の妹なのじゃが、あまり人前に顔を出さぬのじゃ」

梨蘭がぽてぽてと渡り廊下を歩く間に教えてくれた。

「恥ずかしがり屋さんなの？」

「いや、学者なのじゃ。『ぞくせけん』に興味がないらしい」

「ふーん」

梨蘭はもちろん何度か会ったことはあるが、沙龍や竜吉と違ってあまり自分に関心を示さない。「冷たい親戚」と思っていた。

案の定、

「なに？ ケツコン？ する気はないが……」

たった数日の滞在なのに本や着替えや転がった空き缶でもものすごいことになっている部屋で、分厚い眼鏡をかけた虎吉は冷たく言った。

髪は中途半端にぼさぼさでハーフアップにしているのだが、結んでいる意味がほとんどない。

徹夜で論文を書いていたとかで、形相もすごかった。

梨蘭と明明は、虎吉が「よっこらせ」と持ってきたパイプ椅子と脚立の上にそれぞれ所在なげに座っている。

さっきの竜吉公主の、宮殿と見まごう部屋とは百八十度違うところか、別の惑

星に来たのではないかと錯覚してしまう。

虎吉も眼鏡を外してまともな格好をすればそれなりに美人なのかもしれないが、いまはどう見ても徹夜明けのエイリアンだった。

そのエイリアンが言った。

「しかし、結婚は御免でも、子供は作ってもいいかもしれない。この優秀な遺伝子を残すために」

「えっと……、虎吉伯母上、それはシングルマザーということになるのでは」

「まあ、そうなるな」

「おばあ様はそれをお許しになるじやろうか？」

「うーん……」

と、唸ったまま、つけっぱなしのパソコンのモニターに注意を戻して、しばらく放置される。

「……で、なんだっけ？」

これを何度か繰り返されると、子供は萎えるものだ。

明明も、初対面の大人——しかもかなり強烈な部類の——に意見する気力はな

い。

しかし、虎吉は何度かモニターと姪っ子を往復したあと、

「梨蘭、好きな人でもいるのか？」

と聞いてきた。

「えっ……、えっと……」

「つまり、好きな人が居るので、陛下と結婚したくないから、面倒なことは伯母さんに押し付けちゃえって話なんだろう？ まあ、本来、結婚しなくちゃいけないのは姉上だしな。でも、姉上は結婚も子供も無理だからここに来た——ってことか」

「……！」

ここまで簡潔に真髓をつかれてはなにも言い返せない。

「お、伯母上、このことはおばあ様には言わないで欲しいのじゃ」

梨蘭は焦ってそう言った。

「なぜ？ 言わないと始まらないぞ」

「おばあ様に言えば、いずれ陛下にも伝わってしまう。わらわが陛下との結婚を

嫌がっていると知ったら陛下は悲しむと思うのじゃ。わらわは陛下が嫌いなわけではないのじゃ」

「……。お前は優しいな。さすが吉羅の子」

ポン、と頭をなでられて、梨蘭は初めてこの変わり者の伯母に親しみを感じる
ことができた。

「まあ、いまから大勢を変えるのは難しいかもしれないが……。ちよつと私も動いてみよう。しかし、表向きにはまだなにも決まっていないのだから、お前もあまり逸るなよ」

「うむ、ありがとうなのじゃ、虎吉伯母上」

明明是部屋で待機していた敖俊を広場まで呼び出し、事の次第をざっと説明した。

竜吉と虎吉はあまりアテにはならないが、一応、梨蘭の味方であること、うまくいけば解決できそうなこと、うまくいかなくても諦めないこと――。

明明の熱弁に、パンダたちもウンウンと頷いている。

「いい？ 俊。あなたのいつもの喧嘩みたいに途中で諦めちゃだめなのよ？ 私たちが諦めたら、梨蘭は『好きな人』と結婚できないまま、火雲宮の奥深くに連れて行かれて、一生そこから出られないんだからね」

明明是「天帝の正妃になる」ということがどういふことか、かなり正確に理解している。梨蘭すら、それを聞いて改めて「そうか、正妃はほとんど後宮からは出られないのか」と思ったくらいだ。

「う、うん。分かってるよ、メイメイ」

気の弱い敖俊は、明明の舌鋒に既に泣きそうである。

が、明明は敖俊のこれが半分は演技なのだ知っている。演技、というのが大袈裟なら「それが自分の役割であることを理解している」といえばいいだろうか。

双子というのは、片方が陽なら片方が陰になるものだ。

両方とも同じ性質というのは破綻しやすい。それは双子に限らず、夫婦や恋人も同じだろう。

だから、明明が活発であればあるほど、敖俊はその正反対を演じるようになってしまうのである。

明明も敖俊も、本質は見せているものとは少しずつ違う。それを二人とも心の底ではちゃんと理解していた。

梨蘭は一人っ子なので双子の構造というものは理解していないし、自分はノブレスオブリージュを貫けばいい、とだけ思っている。

「しかし、わらわのことで二人に迷惑はかけられぬ……」

梨蘭はやはりそう言い出した。

「なに言ってるんの、梨蘭。私たちは運命共同体なんだよ！」

明明是ムツとした顔をして、立ち上がった。

そして、いずこへと走り出してしまったのだ。

梨蘭は慌てて明明を追いかけようとしたのだが、

「大丈夫だよ」

と、敖俊に袖を引っ張って止められた。敖俊は明明がすねて帰ったわけではない、と分かっている。

そのうちに、明明が缶ジュースを三本買って戻ってきた。

「ふたりとも！ 来て！」

明明是怒った顔のまま、桃の木の下まで二人をついてこさせると、缶ジュースをそれぞれに渡した。

「これは誓いの儀式！」

最初に缶ジュースをプシュッと開けた明明是、それを高々と掲げた。

梨蘭と敖俊も同じようにする。パンダ四匹もエアジュースでその儀式に加わった。

「私たちは生まれた日も同じだから、死ぬ日も同じなの。梨蘭は……ちよつと二週間くらい遅れちゃったけど、そんなの誤差だから」

「そうだね。僕たちは三つ子みたいなものだって、沙龍伯母さんも言ってたし」
敖俊はにっこり笑って頷いた。

「お主ら……」

イトコやハトコがたくさんいる双子と違って、梨蘭には同年代の友と呼べるのはこの二人しかない。だから、その二人が自分のためにここまでしてくれる、ということがとても嬉しかった。

「だから、諦めちゃダメよ？ 特に梨蘭が諦めちゃったら終わりなんだからね？ 私たちは運命共同体だってことを忘れないで」

高々と掲げた三本の缶ジュースが交わり、その後、三つ子はそれを一生懸命飲み干した。

「ありがとうなのじゃ、二人とも……」

梨蘭は泣きそうになったが堪えた。

物心ついてからは人前で泣いてはいけない、と教えられている。

沙龍はそんなことは言わないが、特に竜吉は厳しい。

『桃園の誓い』の様子をこっそり見ていた偃月と飛龍は、呑気に焼きそばやラムネを飲み食いしながらの「仕事」であるが、それは九雷が各所に配置している特務の連中も同じだろう。

偃月は彼らと連携しているわけではないが、互いに「同じものを陰ながらガードしている」という認識でいる。向こうは「公」でこちらは「民」だが、特務は九雷の限りなく私情を挟んだ公的目的地で動いているだけなので、実は大した違いはない。

「なにやってんだ？ ジュースの一気飲みして」

偃月は子供たちの遊びの内容についてはあまり気にしていない。親としては周囲に危険がなければそれでいいのである。

それは飛龍も同じである。

「ドラマの真似でもしてるんだらう」

そう言って食後の一息をついた。それが少し疲労を伴っていたので、
「連日大変だろう。ありがとな」

偃月は労うように言った。

「……。俺は好きでやっている。礼を言われる筋合いじゃない」

「ふふん」

いつもの言い様に笑ったが、そういえば飛龍は少し雰囲気が変わったな、と偃月は思っていた。

闇雲に出る無鉄砲さがいつの間にかなくなっているし、そもそも以前は『人知れずこっそりボディガード』はできなかつただろう。

飛龍が視線を桃園の梨蘭に向けたまま、隣の偃月に言う。

「明明が先日、金魚すくいをやっただろう」

「ああ、やってたな」

「……なんか感じてんのか？ だとしたらすごいな、あの子は」

「うーん……。陽輝大将のお子さんだからなあ。うちのはちよっとおっとりしすぎか」

と、偃月は苦笑いした。

顔だちは沙龍に似ているが、梨蘭は武芸の類はしていないので、動きは五歳児そのままである。

「梨蘭は公主だからそれでいいんだ」

飛龍の言は身贖肩そのものだが、飛龍と梨蘭に血縁はない。家族同然ではあるものの、種族や立場を考慮すればだいぶ他人である。

なのになぜ飛龍が梨蘭を贖肩するのかというと、やはり偃月の娘だからである。

そして、もともとが他人に無関心な飛龍にとって、偃月が少し特別な存在なのは、偃月が沙龍の弟だからであり、小さい頃の偃月と一緒に過ごしたことがあるからである。尤も、その頃の飛龍は馬だったのだが――。

飛龍には実はちよつとした悩みがあった。

梨蘭が産まれた頃、沙龍はそれを打ち明けられた。

「俺の姿が長年変わらないのは、精神が成長できていないせいだと九玄に言われた。馬にされていた時間が長かったせいもあるが……。九玄の言っていることは

正しいと思えた」

以前の飛龍は、大人になりたがっていなかったのかもしれない。だから少年の姿のまま、喧嘩に明け暮れていた。

しかし、なにかの転機があつて、やはり変わらなければならぬ、と思い始めたのだろう。

「成長できる環境があれば大人になれる気がする。偃月の娘は今後、仙界にとっては重要な存在になるだろう？ 俺にボディガードをやらせてくれ」

と、自ら申し出たのだ。

もともと『緑麗のボディガード』と称して水雲宮に居候している飛龍だったが、その仕事は実質ないに等しい。飛龍の意を汲んだ沙龍は、いい機会だと思ひ、偃月とも相談して、飛龍に梨蘭の専属お守り役をお願いすることにした。

そして、この五年、飛龍はその役目をなんとかこなしている。危ういところはまだまだあるが、結果的に梨蘭が危険な目にあつたことはない。清林山で梨蘭が迷子になったときも飛龍の機転ですぐ見つけることができた。

そして、この五年間で飛龍はだいぶ変わったように思う。

なにより、父親に執着しなくなった。

おそるべき行動力を持つ梨蘭のおかげで、お守り役も大忙しでそれどころではない、というのもあるのだが、それでも飛龍が敖閏に突っかからなくなったのは大きな進歩だった。

蟠桃会も最終日が近づくと、なにやらザワザワしはじめた。

というのも、閉会式に西王母からなにか重大な発表があるらしい、という噂が西華宮を駆け抜けたからだ。

西王母の後継指名と梨蘭の婚約のことだろう、と皆が思った。それは渦中の三人組も同じである。

梨蘭と明明と敖俊は、広場の隅っこに集まって作戦会議をしていた。

桃園の誓いをやったせいでアドレナリンがやや沸騰している。

チビッコ達にとって『お姫様の結婚を阻止する』という大きな目的は、「悪の秘密結社に立ち向かう」くらいの出来事になっているのだ。

「ど、どうしよう？　なんか最終日に決まっちゃうみたいだよ？」
敖俊がオロオロしながら言った。

対照的に明明は落ち着いている。いついかなるときでも焦ってはいけない、と

いう伯父の教えを実践しているのだ。それは敖丁のポリシーというよりも、南海龍王家の家訓らしい。

そして、梨蘭は、別の意味で落ち着いていた。

「こればかりはのう……。おばあ様が決めることに、わらわは口出しできぬ」
孫として祖母には逆らえないし、仙界に属する者としてトップには従わなければならぬ。梨蘭の諦めは当然といえれば当然なのである。

「大丈夫。まだ方法はあるから」

明明が言った。

「方法？」

「そう。奥の手がね」

「……？」

敖俊も梨蘭も、スックと立ち上がった明明を頼もしく見上げた。

「つまり、西王母様よりも偉い人をお願いして、断ってもらえばいいのよ！」

明明はドヤ顔で言った。我ながらナイスアイデアだと思っている。

「偉い人？ って誰？」

よく分かっていない敖俊が聞く。

「えーと、太上老君と、太上道君と、泰山府君の三人よ」

「なるほど、最高神じゃな！」

梨蘭は明明の機転に感心している。その発想はなかった——、という顔だ。

確かに、文字通り『最高神』である彼らは、天界の行く末を決める権利を持っている。

「その三人を味方につければなんとかなると思うんだよね！　ただ、これをやるの結構大変だと思うんだ。それぞれ偉い人の居るところに、大人たちにばれないようにこっそり行かなきゃいけないし、行ったとしても、味方になってくれるかどうかは分からない。それでも……やる？」

明明は半信半疑で聞いたのだ。もしかしたら、弱腰の敖俊は躊躇するかもしれないし、梨蘭は「そこまでやる必要はない」と言うかもしれない。

しかし、意外にも敖俊は迷わなかったのだ。

「やろう、三人いればなんとかなるよ！」

即断である。

むしろ躊躇したのは梨蘭のほうで、返事が遅れた。

その隙に、会合に参加していたパンダレッドがスツと敖俊に手を差し出し、「賛成」の意を表明していた。ブルーとグリーンとイエローも続く。

「君たちも手伝ってくれるんだね？」

敖俊がにっこりと笑う。

明明も、その手をそっとパンダたちの小さな手の上に乗せた。

あとは梨蘭だけである。

二人と四匹にじっと見つめられて、梨蘭も決心した。

これは「赤帝君と結婚したいから」という想いからではない。

祖母に逆らうことになっても、この二人と四匹の友情には応えなければならぬ、と思ったからだ。

「長い旅になると思うから準備は念入りにね」

明明が言うのと皆頷いた。

その三人と四匹の様子は、飛龍も離れたところから確認していたが、読唇ができるわけではないので、チビツコ達は「ごっこ遊び」でもしているのだろう、と

しか思っていない。

作戦会議をいったん解散して、梨蘭は旅支度を始めることにした。が、小さなお姫様は、なにを用意したらいいのか分からない。

(フム……)

大人や、『西王母寄りの者』に聞くわけにはいかない。

こういう時、いつもなら料理見習の健一か、服飾担当である悠花に聞くのだが、彼らは水雲宮でお留守番だ。

天化なら居るかもしれない、と思って探してみたが、警備の仕事に就いているらしく、「いまはお仕事中だと思えますよ」と顔見知りの仙人に言われた。

天化は防衛庁のスタッフとして清林山に来ることも多いので、梨蘭は小さい頃からよく知っている。

見た目は飛龍よりも若いので、梨蘭にとっては近所のお兄ちゃん（ただし自己より格下）みたいなものだ。

仕方ない、と、梨蘭は一番身近で「大人ではない者」の名を呼んでみた。

「飛龍ー？」

「……」

梨蘭が自分を呼んでいる。

偶然を装わなければならぬので、飛龍は低木の裏で数秒待った。

「どうした、梨蘭。なにかあったのか」

十数えて出ていくと、梨蘭がちよこちよこ走って来た。

「どこ行っておった。まったく。お主、蟠桃会だからといって飲み食いばかりしているのではないか」

「……」

こまっしやくれた説教をされても、別に腹も立たない。

むしろ、笑いたくなるのを抑えなければならぬ。

「そうそう、ちよつと聞きたいことがあったのじゃ。アンケートでな。旅行するときはなにを持っていけばいい？」

「……食い物と着替えぐらいじゃないか？」

飛龍は無表情のまま、答えた。

「フム？ 現金はいらぬのか？」

「行く場所や日程にもよるが……、梨蘭、どこか行くのか？」

「そ、そういう意味で聞いているわけではないのじゃ。アンケートと言っておろ
うが」

「……」

梨蘭の嘘は飛龍にはだいたい分かる。伊達と一緒に居るわけではない。

「あと、歯ブラシも要るな」

知らぬふりして言ってやった。

「そ、そうか。分かった」

蟠桃会最終日の前日、チビツコ三人組が西華から失踪したという報告を、それぞれの保護者たちはそれぞれの部下から聞いた。

すなわち、偃月と沙龍は飛龍から、九雷は特務の部下から、奏欽は南海龍王家の黒子たちから。

吉羅は自身の監視用宝貝を放っているので、中でも一番事情を知っている。

つまり、特務の連中すら知らないことを、母親だけは知っているのだ。梨蘭の失踪理由を、である。

清林山に戻っている吉羅から、電話でそれを聞いた偃月は、だいぶ感心していた。

「ほえー、好きな人が居て、天帝と結婚するのは嫌だから最高神に直訴に行くだって？ うわ、なんちゅー行動力だ。明明の入れ知恵か？」

偃月は、次期当主としてわりと達観している梨蘭が、自らそういったことを提案するとは思っていない。

「流れとしてはそうみたい。でも、あの子、結構一途みたいで、『好きな人』のことは諦める気はないみたいよ？」

吉羅は笑っていた。

「そのランランの好きな人ってのは？ 誰なんだ？」

「うふふ。それはさすがに教えられないわ。私だってこっそり聞いて知っただけだし」

「なんだ。本人から聞くしかないか」

「あの年の子が、大人に教えてくれるかしらねえー？」

女の子の心情は吉羅のほうが分かっている。

「まあ、とにかく飛龍と合流して追いかけるから、なにかあったらまた連絡する」

偃月は携帯電話を切って、桃園の裏門に当たる通用門を出た。

まだチビッコ三人組は遠くへは行ってないだろう。子供の足だ。

三章 太上道君

1 街道にて

蟠桃会最終日の前日にこっそり西華を抜け出したチビッコ三人組と子パンダ四匹は、なぜかなんの邪魔も入らずに広州こうしゅう街道に入ることができた。

太上道君の弥羅宮へと続くこの旧街道は、あまり仙道たちは利用しない。野生の虎や狼が出ることで有名だし、霊獣持ちのVIPは空の道を行くのが普通だからである。

「ちよつと疲れたよ。休もう、メイメイ」

敖俊が情けない声を出して、街道の端に座り込んだ。

気温は高くもなく低くもないが、このあたりは砂漠地帯なので、やたら喉がかわく。

梨蘭は立ち止まって敖俊を振り返り、次に、先を行く明明を見た。

しかし、明明は止まろうとしない。

「……」

こういうときの梨蘭は我慢強い。旅の目的からしても、自分は決して音を上げてはいけない、と思っているし、双子が喧嘩したときは仲裁するのが梨蘭のいつもの役目だ。

梨蘭は明明の出方を待ったが、やはり止まろうとしない。

先ほどから、何度かこういうことがあったので、敖俊に苛ついているのだろう。

梨蘭はパンダレッドとイエローに目くばせをし、明明を追うように指示すると、自分はブルーとグリーンを伴って座り込んだ敖俊のそばまで歩いていった。

「さ、水筒の水を一口飲んだら、行こう、敖俊。はぐれたらコトじゃ」

そうやって敖俊を立たせた。

敖俊は小さい声で梨蘭に零す。

「最近、メイメイは厳しいんだよね。僕が母様に二胡を習ってるのも気に入らないみたいだし……」

「なぜじゃ？」

「よく分かんない。男のやることじゃないとか言ってた」

「ふーむ……」

時刻は午後二時過ぎである。朝から歩きっぱなしなので、確かに疲れてきた。

一回昼休みを取ったが、明明是それ以降止まろうとしない。

無謀にも徒歩の旅なのだが、太上道君の屋敷までは一本道なので間違えようがない。

「明明、そろそろおやつ休憩にせぬか？」

梨蘭が声を掛けると、明明是やっと立ち止まった。が、振り返ったその顔は少し怒っているようだった。口がへの字になっている。その口が開いて、

「弥羅宮まであとどれくらいあると思ってるの？」

厳しい言葉が出る。

「い、いや、分からぬ。そろそろか？」

梨蘭は携帯端末を持っていて、それで地図を見ることはできるが、見方はまだよく分かっていない。縮尺とか時速とか距離はチンプンカンプンだ。

「いまのペースで歩いてたら、今日中には着かないよ」

「そ、そうか。なら今日は野宿じゃな」

一応、リュックサックに『野宿グッズ』も入れてきたが、野宿はしたことがない。

明明と敖俊はキャンプの経験ならある。寝袋の使い方も分かるし、父親から飯はんごうの使い方も習った。

しかし、それだけでこの荒野に一泊するのは無謀だ。

明明はこの前、帝都から紅寶宮までの小さな冒険をしたので、百キロくらいならなんとかなるだろう、と思っていたのだ。

しかし、それはポケットバイクの存在ゆえの成功だった。

それに気付いた明明は、いま、不安でいっぱいになっている。

「……」

不機嫌な顔のまま立ち尽くす明明に、梨蘭が言った。

「とりあえず、ここで十分だけ休もう。ほら、明明も座って」

「……うん」

そもそも、徒歩で辿りつけるのだろうか。今日は無理だとしても、明日ならなんとかなるか？ いや、その前に、うまく野宿できるだろうか。火行術で火は起こせるけど、野生のオオカミは焚火だけで追い返せるのだったか？ 焚火の番は誰がする？ 父親はキャンプのとき、なにか大事なことを言っただけだったか？

「……」

梨蘭と敖俊は遠足気分で呑気にチョコレートを頬張っているが、明明は気が気ではなかった。

今回の旅で、一番近いところから行こう、とルートを決めたのは唯一地図が読める明明だし、普段の言動からしてもブレインが明明なのは明かだが、そこは五歳児なので、見えていないところ、足りないところがいっぱいある。普通の子供なら、それはゆっくり成長して学んでいけばいい。

しかし、特殊な家に生まれたこの三人に関しては、あまり悠長なことは言っていられない。早く自分で自分を守るようにならないといけないのだ。

保護者たちは、この冒険が彼らを一気に成長させるチャンスだと考え、手を出さないことにした。しかし、実際には三人が「自分たちだけでやりとげた」と思

うことができればいいのであって、バレないように手を貸すのはやぶさかではない。

そのために、飛龍がいま少し離れたところで三人を見守っている。

飛龍は岩陰に身を隠して彼らの様子を見ていたが、

「……？」

辺りになにか強い力の存在を感じた。圧倒的な強さだ。

その直後、東から急に複数のもものが動く気配がして、飛龍は立ち上がろうとしたのだが、

「お前さんは動くでない」

後ろから右肩をグイと押され、一瞬金縛りにあつたように動けなくなった。

声の主はその瞬間、軽やかに飛んで——少なくとも飛龍にはそう見えた——、梨蘭と敖俊を襲う影の前に立ちはだかった。

「俊！ 梨蘭——っ！」

明明が悲鳴に近い声で叫んで、駆けつけようとしたときには、既に事は終わっていた。

大振りの刀を取りこぼして、うめいている男が二人。二人とも道士のような格好をしていた。年齢はよく分からないが若くはない。一人はどこかで見た顔だった。タレ目で無精ひげを生やしている。

（金魚屋か）

梨蘭は、パンダブルーとグリーンの間隙からそっと覗き見て、倒れている男が先日、パンダレッドにポイをくれた男だと気付いた。

隣の敖俊は腰を抜かしている。

「大丈夫か？ チビども」

風のように現れて、男二人を打ち倒したのは、薄汚れた道着を着た老人だった。

その老人が振り向いて聞いた。

人界の感覚では七十歳か八十歳か、という顔だが、体つきは青年のようにシヤキツとしている。

梨蘭と敖俊は目の前で老人がなにをしたのか分からなかった。気付いたら道士の男二人が地に伏していたのだ。

「わらわは大丈夫じゃ」

梨蘭は気丈に答えた。大きな刃物で斬り殺されそうになったというのに、立ち直りが早い。

腰に徳利をぶら下げた老人は、懐手のまま「ほう」と言った。

「ご老人、助けてくれたのじゃな？ 礼を言う」

梨蘭の大袈裟な物言いに、老人はおかしそうに笑顔を作った。

「いやなに。ものついでだ。で、こいつらはなんだ？ 山賊か？」

「……分からぬが、もしや」

梨蘭が言い淀んだ言葉を、

「仙界の極左の一派だと思います」

駆け付けた明明が言った。

老人はまたも「ほう？」と言った。

彼はほぼ三人組の正体が分かったのだが、実は明明のほうも間近で老人の顔を

見て、何者か分かった。

「私は明明といえます。あなたは太上道君ですね？」

火雲宮の公式データバンクにある顔なのだ。

(太上道君!?)

梨蘭は初めて見る顔だ。

「そういうお前さんは南海龍王家の嫡子か。その歳でその目端は大したものだ。しかし、明明。確証がないうちは迂闊なことは言ってはならんぞ。わしが『極左』の親玉だったらどうする？」

「あ……」

と、自分の軽率さに気付いた明明は絶句した。

太上道君は、改めてこの珍妙なパーティーを見回す。

なかなか面倒な背景を持った三人とパンダ四匹だ。ん？ パンダ？ ああ、なるほど、と太上道君は思った。

「おぬしらは弥羅宮に行こうとしていたのだろうか？ わしもいま帰るところだ。

夕飯くらいはふるまうぞ」

太上道君が口笛を吹くと、見事な栗毛の馬が駆けてきた。

そして、三人と四匹をまとめて馬の背に乗せると、「先に行っておれ」と馬の尻を叩く。馬は風のように飛翔して駆けていった。

そこに、岩陰から飛龍が出てきた。

「悪かったな、坊主。わしが見せ場を横取りしたか？」

太上道君はニヤリと笑う。

「なぜ俺をとどめた？」

飛龍は相手が最高神でも態度は変わらない。というより、この天仙界の境界近辺は飛龍も小さい頃から庭にしているので、太上道君や白帝君のことはよく知っているのだ。

「保護者がそばに居ると分かってはチビどもも真剣にやらんだろう？ それではおぬしらが困るのではないか？」

「……」

お見通しのようだ。

確かに、数時間前、沙龍も面白半分に「千尋の谷に落としてみるかー」などと

言っていたが、さっきの一幕はそんなことを言われてられるような場面ではなかった。

「で、坊主はどうする？ あの三人のボディガードをしなきゃならんのだろう？ きやつらは今日はうちに一泊させるから、お前さんもこっそり泊まっていけ」

「俺は坊主じゃない……。分かった、世話になる」

「ところで、こやつら——」

と、太上道君は気絶している二人の男を視線で指した。

「殺すか？」

「いや……。龍王家は知らんが、神は不殺なのでな。どこかのグループに回収させよう」

「どこにするんだ？」

「うむ。おぬしはどこがいいと思う？」

太上道君が意外なことに飛龍の意見を聞くと、飛龍はちよつと驚いた様子を見せたが素直に考えた。

「……」

どの組織に任せるかで、情勢はだいぶ変わる。

慎重に考えなければならぬ。

「スジを通すなら、ここはまだ仙界の領土だから、崑崙防衛軍だろう。しかし、いまの梨蘭をめぐる状況を考えるなら、中立のものに任せるべきだ。崑崙防衛軍の実態は西王母の私設軍だから、俺なら却下する」

「ふむ。では、どこが最適だ？ 天界軍か？」

「いや、この件では天界軍は仙界に付度しそうな気がする。一番無難なのは刑吏府だろう。襲われたのが梨蘭で、梨蘭の今の正式な保護者は緑麗だから、梨蘭も帝都の市民扱いになる。それでスジはギリギリ通るだろう。やつらは日和見だが、立場的には一番中立に近い」

「うむ、わしもそう思う」

結構、物事が見えていないか、と太上道君は思った。

薄汚い道着の中から携帯端末を取り出し、道君はささっと操作をして、

「じゃ、行こうかの」

にっこり笑って言った。

既にしかるべきところに通報はしたようだ。

「……」

ずいぶん気さくな最高神だな、と飛龍は思った。

実は梨蘭たちが失踪した五分後に、偃月と飛龍は既に彼らを見つけていたのだが、前述通りの理由で強制送還には各方面から待ったがかかった。

そこで、偃月は飛龍を残して西華に戻り、特務も龍王家の黒子たちも、最低限の人数を現場に残して引き上げた。

偃月は西王母に一言報告しておくことにした。

報告というよりは文句に近い。仙道ではない偃月だからこそ言える、一人の親としての発言である。

「西王母様、この前、俺は梨蘭さえ幸せならそれでいい、と確かに言ったけど、いずれの選択にしても、危険が伴うのなら話は別です」

「梨蘭の身になにか？」

西王母は、蟠桃会の運営委員会とも言える建物の執務室で眉をひそめた。

「うちの娘は南海龍王家のところの双子と一緒に出奔しました。最高神のところ
に直訴に行くそうです。その道中で、何者かに襲われた、と」

「はい……？」

寝耳に水だったようで、西王母は慌てた。

大急ぎで、崑崙防衛軍の隊長である九天玄女と、その相談役である燃燈道人、
さらに十二仙を召集した。

仙界は、実はしっかりした行政組織を持っていない。

そもそも「政治からの脱却」が彼ら仙道の目指すところなので、持ちようがな
いのだ。

いま一度、仙界の立場を彼らと話し合わなければならぬ――。

2 弥羅宮

梨蘭たちを乗せた馬が弥羅宮の門前に到着するのを待っていた人物が居た。白帝君である。

いまでも一年の半分はここで過ごしているが、基本的にはもう自立している身なので、あくまでも『実家に遊びにきた』という体である。

「おー、チビちゃんたち、いらっしやい」

「誰……？」

明明が梨蘭に小声で聞いたが、梨蘭も白帝君に会ったことはない。ふるふる、と首を横に振った。が、敖俊は知っているようだ。

「こんにちは」

馬から一番に降りて挨拶する。

「敖俊、元気だったか？」

「はい。あ、双子のメイメイと、友達のリーランです」

「おう、よろしくな」

敖俊は白帝君のことを知っているが、白帝君と太上道君の関係を知らないの
で、なぜ彼がここに居るのかは分からない。

「あと、パンダたちです」

わらわらと足元に子パンダたちが降りてくる。

「メイメイ、リーラン、白虎聖君だよ。四方将神の」

敖俊がそう紹介してくれた。

「……！」

梨蘭にしてみれば、『愛しの朱雀星君と同じ職場で同じ仕事をしてる人』であ
る。きちんと挨拶しておかなくてはならない。

「はじめまして。よろしくなのじゃ」

「お世話になります」

女の子二人の頭をぽんと撫でて、白帝君は弥羅宮に招いた。

「腹減ってるだろ？ いま焼きそば作ってやるからな」

「！」

三人のお腹がぐう、と鳴った。

お昼もろく食べていないし、朝から歩きっぱなしだったので、この状況はともテンションがあがる。

「ジジイもすぐ帰ってくるからな」

弥羅宮は広いが、実は侍女や管理スタッフは一人も置いて居ない。主の太上道君が傅かれるのが嫌いだからである。

大昔から、気軽な男所帯を貫いている。

「俊とは知り合いなんですか？」

台所で手伝いをしている明明が隣の白帝君に聞いた。

ずっと聞きたくてそわそわしていたことなのだが、なかなか言い出せなかった。

やっと言い出すことができたのは、当の本人がちよつと離れた隙を狙ってのとだ。

「ああ、前にな、親父さんに言われて、敖俊の五行術の修行をしたことがある」
「……え、そうだったの!？」

明明是後ろで皿を並べている敖俊に振り返った。

「う、うん」

敖俊のことならなんでも知っていると思っていたが、自分の知らないことがあつたなんて。なんだか面白くない。

「僕、五行術がうまくできないからさ。父様が一度スペシャリストに見てもらえって……」

敖俊は陽輝の属性である金行を受け継いだ。金行は五行の中でも一番扱いが難しいという。

普段は明明と一緒に敖丁に教えを受けているのだが、双子の差は開くばかりで、敖俊本人も焦っていたらしい。

陽輝は自分も金行マイスターではあるものの、人に教えるノウハウは持っていないので、どうせなら金行の頂点に任せよう、と思っただけらしい。

「えっと……それで……? どうだったんですか？」

「うん、敖俊にも言ったんだけどな、金行は初歩の術をマスターするので最低百年はかかるんだ。チビの段階で才能があるとかないとかは分かんねえんだよ。だから焦らずのんびりやればいいさ」

白帝君は陽輝に報告したのとは少し違う言い方で双子を諭した。

五行術というのは修行次第で確かに伸びるが、生まれ持った五行力はそれ以上増えようがない。白帝君が見たところ、敖俊の五行力は「マイスターになるのは少し難しい」というレベルで、それは陽輝にも報告してある。

敖丁の評も大体同じだった。

「そうですか……」

そこに、太上道君が帰ってきた。

「あ、道君、お帰りなさいなのじゃ。あ、いや、お邪魔してます？　こら、イエロー、まだ食べるでない」

梨蘭の周囲ではパンダたちが甲斐甲斐しく夕飯の準備を手伝っている。

「よお、ジジイ、早かったな」

白帝君は鉄板の上で焼きそばを焼き始めていたところだった。

久しぶりの賑やかな我が宮殿の様子に、道君はなにかを思い出した。

あれは、緑麗と敖広と赤帝君が居た頃だ。毎日が酒盛りだった。

「せいしよう聖霄、多めに作っておけよ。チビどもは食べきかりだ」

その言い方でなにかを察した白帝君は、焼きそばの玉を何個か追加した。

弥羅宮のどこかの暗い一室である。

別に暗くする必要はないのだが、飛龍は差し入れの焼きそばを食べながらこそそと携帯端末に文字を打ち込んでいた。

相手は偃月である。

「三人は夕飯のあとすぐ寝たらしい。疲れたんだろう」

「そうか、じゃあメインイベントは明日だな」

「ちよつと聞いていいか」

「うん？」

「偃月はどう思っているんだ？」

梨蘭は『好きな人』が居るから、秦帝と結婚し

たかないんだらう？ この縁談は断るべきじゃないのか？」

「うん……そうだよなあ」

「……」

次のメッセージが来るまでにだいぶ時間がかかった。

偃月も考えあぐねているのだから。

「だけど、ランランの『好きな人』ってのはこの先変わるぞ、きっと」

「……」

そうだよな、と飛龍も思った。

3 梨蘭のお願い

朝。

随所にイスラム建築の影響が見られる、弥羅宮の異国風の中庭には敖俊だけが居た。

庭に住みついていらしい猫と遊んでいる。

「お、早いな」

あくびをした白帝君が通りかかる。

「あ、おはようございます、聖霄様」

「双子の片割れは？」

「メイメイは疲れているからまだ寝かせてあげてください」

「疲れてるのはみんな同じじゃないのか？」

「いえ、メイメイはこういうとき、人一倍無理をしちゃうんです」

「ふうん？」

「僕が頼っちゃうから……。実際、とても頼りになるんですけど」
「そうか」

白帝君には、彼らの役割がなんとなく分かっている。

それでなくとも、敖俊とは一泊二日の『修行の旅』をした白帝君である。この少年が外交にも戦闘にも向いていないのは分かっていた。

ゲリラ戦がお得意で、愚連隊とまで揶揄されている西方軍の大將を務めている父親にはまるで似ていない。

しかし、敖俊を預かる前に初めて陽輝とじっくり話したとき、

「あいつは俺の小さいときソツクリなんで、笑っちゃまう」

と、無法者の代名詞のような彼が言っていた。

自分も幼少期は気が小さくて、弱虫で泣き虫だった、と。

しかし、生まれ育った場所が陽輝曰く「あまりお上品でなかった」ために、いつの間にか「こう」なっていたらしい。

敖俊が猫の尻尾を撫でながら言った。

「僕がなにもできないので……」

(なるほどね)

白帝君は、暗い顔をした敖俊が凹んでいる理由を察して、

「これから先の旅も長いんだろ？ 元気だせ、敖俊。お前にだってやらなくちゃいけないことがあるだろうが」

「え……？」

敖俊は顔を上げる。

撫でていた白猫はふい、とどこかへ行ってしまった。

「やらなくちゃいけないこと？」

「ああ。明明と梨蘭を守ることだ。そうだろ？」

「……。でも……」

自分は守られてばかりで、なにもできないのに、と敖俊は思う。

「なにも『守る』ってのは、どこかのヒーローのように悪漢どもをちぎって投げることじゃない。いまのお前にできるのは姫様たちの盾になり、時間稼ぎをすることだ」

「時間稼ぎ？」

「そう。例えばな」

と、白帝君は、ひゅつと拳を引いてから、敖俊の顔面にパンチを入れようとした。敖俊は「ヒッ」と言っつて目をつぶる。

「目はつぶっちゃだめだ」

「……？」

恐る恐る目を開けると、白帝君の拳はまだ顔面のはるか手前で止まっている。

「よく見て、避けるんだ。ゆっくりやるから避けてみる」

「は、はい」

右ストレートで、敖俊の左頬をゆっくり殴るふりをすると、敖俊は頭を後ろに引いてそらした。

「そうだな、そういう避け方もある。でもいまの避け方で一番正しいのは、五センチ右に移動するだけでいいんだ。もう一回やるぞ？」

言われた通りにやってみると、確かにさっきのけぞるように後ろに避けたよりも簡単で、動きが少なくてすむ。

白帝君は少しずつ動作を早くして、そのうち左ジャブも使ってみた。

敖俊は何度か避けることができたので（何度かはぺちっと軽く食らったが）、要領は分かったような気がした。

「いまのお前の力じゃどうしたって大人には勝てないんだから、一秒でも長く敵の攻撃を避けるんだ」

「はい！」

「時間稼ぎをすれば、その間に明明は逃げられるし、誰か大人が助けに来てくれる。敵の攻撃は避け続ける。受けなくていい。反撃もしなくていい。ただ、避ければいい。そうすると、相手は疲れてきて、そのうち自滅する。そうすればお前の勝ちだ」

「は、はい！」

男二人の『拳の戦い』の様子を聞きながら、太上道君が朝ごはんを作っていた。

そこに梨蘭が目をこすりながら現れた。

「おはようございます。おばうえー？」

と言ってから、気付く。

ここは水雲宮ではない。沙龍は居ないのだ。

代わりに、昨日、みんなで焼きそばを食べたダイニングキッチンには不似合いなエプロンをつけた太上道君が居た。

「おはよう、チビ姫。今日はこのジジイが相手してやるぞ。そこに座れ」
テーブルには既に一人分の目玉焼きとトーストができあがっている。

梨蘭はペコリ、と頭をさげて椅子に座ると、

「太上道君……。そうだ、わらわ、『太上道君』に話があつて来たのじゃ」
「うむ、それは朝食を食べながら聞こうか」

梨蘭が一人目の最高神に直訴したのは、

「時間が欲しい」

ということだった。

「おばあ様がわらわの結婚を発表する前に、わらわは三人の最高神に会って、おばあ様のその発表を止めてもらおうつもりだったのじゃ。しかし、よく考えてみた

ら、もう時間がない。今日の昼間には蟠桃会の閉会式が行われてしまうのじゃ。だから、時間が欲しいのじゃ」

「うむ、そうか」

西王母がなにを発表する気かは知らないが、子供の味方をするほうが面白そうだとはいった。

そもそも、太上道君が数千年欠席している蟠桃会に顔を出す気になったのは、西王母がはるか昔に天界を出奔した理由を忘れて、保守に走ろうとしているからだ。

「梨蘭、ひとつ聞くが、陛下と結婚するのは嫌か？ この世界の統治者だぞ？」

「嫌ではない。陛下は嫌いではない。だが、わらわはいま『好きな人』が居るので、このまま陛下と結婚するわけにはゆかぬのじゃ。それは陛下に失礼である」

「なるほど……」

二人が話しているテーブルから少し離れたソファで、白帝君と敖俊が朝食を食べている。一応、話は聞いているが、参加はしない方針だ。

そこに起きだしてきた明明だったが、敖俊に慌てて手招きされて、状況を察する。

「ごめん、寝坊しちゃった」

「いいんだよ、よく眠れた？」

「梨蘭は直談判中？」

「うん」

こそこそと話す。

自分たちの冒険の第一歩が、まさに計画した通りに進んでいる。明明はそのことになにか、わくわくするような喜びを感じた。

敖丁が言っていたのはこれのことかな、と思った。

『頭で考えたことを、やってみて、それがうまくいくのはとても楽しいよ。明明もやっpegらん』

それは難しければ難しいほど、成功したとき楽しいのだとか。

太上道君と梨蘭の話は続いている。

「わしはな、梨蘭。相手が誰であろうと五歳児の結婚を勝手に決めるのは、ナン

センスだと思っておる」

「なんせんす？」

「うむ、あってはならん、ということじゃ。しかし、おぬしがいま『好きな人』との結婚を決めてしまうのも賢い方法とは思わぬ。人の心は変わってゆくものじゃ。二十年後に別の男を好きになつてゐるやもしれんぞ？ そのときはどうする？」

「……」

それは考えたことはなかつた。

「わ、わからぬ……」

素直にそう言うしかない。

「まあ、五歳児にはちと難問じゃつたか」

「……」

明明は、白帝君に作ってもらつたピザトーストを食べながら、自分もこの先誰かを好きになつたりするんだらうか、と思つた。

梨蘭のキラキラした乙女心はまだ分からないが、いま、かつこいいと思える男

性は伯父であり師匠でもある敖丁しか居ない。

なんでも出来て、なんでも知っていて、ハンサムで、パリつとした軍服が似合う、お洒落な伯父さん。

いつもだらしない恰好をしている父親とは正反対である。仕事も階級も同じらしいのに、なぜ自分の父親はいつも軍服を着ていないのだろう。

もしかしたら、自分は騙されているのではないだろうか。父親は本当はただの遊び人なのではないか、といまだに疑っている。

「とりあえず、時間が必要というおぬしの言い分はもつともじゃ。ということ
で、わしはいまから蟠桃会の閉会式に行つて、西王母に意見してくるので、おぬ
しらはこのまま旅を続けるがよい。老君と泰山府君のところにも行くのである
う？」

太上道君が、明明のほうに聞いた。

「は、はい。その予定です」

「どうやら、第一段階は大成功のようだ。」

「次はどこへ？」

「玄都の、太上老君の八景宮まで行きます」

「ふむ。だいぶ遠いな。どうやって行くつもりだった？」

「……えっと」

言葉に詰まる。実は、ここまで来るのが精一杯で、その先は具体的には考えていなかったのだ。

しかし、明明は素早く考えて、

「玄都に行くなら、位置を考えれば、一度、紅寶宮に寄って、支度を整えてから再出発したほうがいいと思います。たぶん乗り物が必要なので、少し考えます」
そう言った。

太上道君は頷いて、

「途中までは聖霄に送らせよう。よいな、聖霄」

「ウツス」

「ありがとうございます」

飛龍が、喧嘩友達の白帝君から山盛りの焼きそばを差し入れてもらって、暗い部屋で偃月とこそそ連絡をとっていた頃、西華の西王母の私邸内では、重鎮会議が夜を徹して行われていた。

集うのは、西王母とその長子である竜吉公主、崑崙防衛軍隊長である九天玄女と、その相談役の燃燈道人、それから十二仙のメンバーたちである。

彼らは、おおむね、西王母には恭順を示している。が、それは『忠誠』という意味ではない。個人主義者たちが多いので「なにかあれば協力します」という態度なのである。

「かねてから、現在の仙界の在り様を憂いている面々が居るのは承知しています」

西王母が言った。

つまり、天界の庇護といえは聞こえがいいが、実質は属国扱いになっている仙

界を憂いて、独立すべし、と高らかに謡っている過激派のことだ。

偃月の祖父が創始に関わった『杏林会』もその一派である。

明明是子供の理解で『極左』と表現していたが、間違っていない。

それらの一派らしき者たちが昨日、梨蘭を襲った、とまずは事実を皆に報告した。

誘拐か暗殺か、いまのところ目的は不明だが、いずれにせよ彼らは最悪の手段を取ったということである。天界も仙界も敵にする行為だ。

「本心では独立を望むのは我々も同じこと。しかし、天界との諍いは避けなければなりません。我々が彼らに領土を借りているのは事実ですから」

そこそが仙界の弱みなのである。

西王母はその昔、天界を出奔して仙界を作ったのだが、五行で成り立つ世界の中でしか自分の王国を作ることにはできなかった。そもそも、西王母自身が元は天界の皇族なのである。

だから、火雲宮の首脳陣は、仙道のことを「うちの領土でなにかやっている人たち」くらいにししか見ていない。

しかし、彼らも外交のプロなので、表だって軽視したりはしない。ちゃんとそれなりの敬意を持って接している。西王母の個人の力も馬鹿にできないし、仙界もそこそこ武力を持っているからだ。

「弱みがあるので従順なふりをしておくが、完全に言いなりにもならない」
それが西王母の本音だ。九玄以下、ここに集ったメンバーたちはそれをよく理解している。

しかし。

微妙なその天仙界の関係を、仙界の鷹派あるいは左派とよばれる仙道たちが崩そうとしているのだ。それは絶対阻止しなければなるまい。

「テロに屈してはなりません。それは共通認識ということでもよろしい？」
十二仙の前に、西王母はそう言い放った。

今年の蟠桃会は最終日になって珍しい人物が現れた。

最終日の、閉会式前の控室では正装に近い恰好をした太上道君が、仙酒を飲み

ながら沙龍を捕まえてくだを巻いていた。

「老師ラオンシ、わたしやもう三十路に近いんですが、まだガキンちよ扱い？」

上海に居たころの感覚で話すと、周囲がざつと引く。

それくらい『最高神』は尊敬されている存在なのだ。

しかし、沙龍にはあまりその意識はない。天界では偉い神様らしいが、あくまでもこの爺様は、ローティーンの頃、近所に居た酒好きで麻雀の強いジジイである。

「そうそう、おぬしの姪っ子に会ったぞ。まだあの年頃はちっさくてかわいいのう」

「は？ いつ？」

沙龍は、梨蘭たちの出奔は知っているが、まさか既に弥羅宮まで辿りついたとは聞いていない。飛龍め、連絡くれてないぞ、と思ったが、恐らく偃月とは密に連絡を取り合っているのだろう。

「あのチビ姫の依頼もあって今日ここに来たのじゃ」

「え……？ どゆこと？」

「まあ、わしに任せておけ」

ニヤリ、と笑って太上道君は席を立った。

と同時に、閉会式の席にご案内します、という係の者がやって来た。

秦帝は初日の開会式に出席して、だいたい一、二泊をして帝都に戻るのが毎年の恒例になっている。今年は三日目に帝都に戻った。九雷もそれを追いかけるようにして既に帝都に戻っている。

沙龍が閉会式まで残っているのは、梨蘭の件が気になるのでまだ姪っ子の近場に居よう、ということである。

閉会式は一応は式典風に行われるが、西王母の挨拶と演説だけがメインの、十五分もかからない式である。

奏欽と陽輝は「(龍王家特有の)外交上の理由」で夫婦そろって出席しているが、天界側の主だった出席者といえ、あとは西海龍王夫妻、東海龍王の巽凜、それから各府の長官がぼつぼつ居るだけである。

そこに、いつもは来ない最高神の太上道君がやって来たのだ。

最高神用の席も急遽用意されたが、実行委員会は気が気ではない。

「今年もつつがなく開催することができました。また来年のお越しをお待ちしております。ここに、今年の蟠桃会の閉会を宣言いたします前に——」

「……」

太上道君は涼しい顔をして座ったままだ。

「現在、孫娘の縁談について、様々な憶測や噂が飛び交って、お騒がせいたしておりますことをお詫び申し上げます。ただ、いまの時点で私が申し上げますことは——」

西王母がその次の言葉を告げる前に、

「ふわ〜あ」

太上道君が大あくびをした。

西王母の話す檀上のすぐ隣で、である。

「……」

さすがの西王母も言葉を切って、道君を見た。

「退屈じやのうゝ、お前さんのそういう優等生なお話を聞くために久々に来たわけじゃないんだがのうゝ」

太上道君の大きな独り言だ。

観客たちはいったいなにが始まるのだ、とざわめく。

「……あら、これからロックになるところでしてよ」

西王母もハプニングは心得ている。

多少ひきつりながらも、にっこりと笑って言った。

「そうか。では、その昔、天界に愛想を尽かして出て行った女性の話でも聞こうか。あれはまさに『ロック』だった」

「……」

いまさら昔話でもあるまい、と西王母は思った。

今日、太上道君の姿を見たときから嫌な予感はしていたが、道君はやはり怒っているらしい。

が、引き返すわけにはいかない。これだけの面前である。

西王母が仙界を作った経緯には少しややこしい話がある。

まずは血縁関係を整理しておく、西王母は元々天界の皇族出身で、同じく皇族である皓親王ハクオンと最初の結婚をした。すでに皓親王には天真と玉帝という二人の息子が居たが、彼らの母親である第一夫人は亡くなっており、西王母は後妻という位置づけだった。

ちなみに、いまの秦帝は、この皓親王の弟の嫡子である。

西王母は皓親王との間に竜吉を生むが、ほどなくして皓親王が病死。義理の息子である玉帝が即位するのを見届けて、西王母は東王夫と再婚した。

この再婚については、当時も色々言われたようだが、天帝の妃ならまだしも、一皇族の寡婦が再縁することは特に咎められるようなことでもない。

しかし、この二度目の婚姻期間中に、西王母が遭遇した事件によって、彼女は天界に愛想を尽かして出ていくことになった。

火雲宮の官僚主義にぶち切れ、『無政府主義万歳』と謳って仙界を作ったわけである。

ロックどころか、パンクなのだ。

そして、この事件には、太上道君も深くかかわっている。それ故に、太上道君

は西王母には同情してもいるし、当時は協力もしたのだ。

だから、太上道君の立場としては、その西王母が今さら火雲宮に迎合するのはそれこそ「スジが通らない」のである。五歳児の結婚云々はあくまでも、その迎合策のひとつとして非難しているのであって、道君が怒っているのは西王母の變心そのものに対してである。

檀上の西王母はそれを理解した。が、彼女はそれを唾棄すべき理想主義だと思っている。

（そりゃ、あなたはいいでしよう。最高の称号を持ちながら、身ひとつでフラフラできるあなたはね）

負う責任のない者は気楽でいいな、というわけだ。

とにかく、太上道君の邪魔が入ろうと、計画通りに進める。

重鎮会議は深夜に始まって、朝までかかったが、なんとか十二仙たちにも了承は得ているのだ。

この閉会式では二つのことを宣言する、と言ってある。

すなわち、梨蘭の縁談と、後継指名である。

前者については『縁談話が進んでいる』というだけでいい。相手が誰かは言わなくてもいいだろう。わざわざ名前を出す必要はない。

「皆さま、ごめんなさい。久々にいらっしやった太上道君が昔話を聞きたがっているので、私は第一線の檀上を降りて、隠居生活に入りたいと思います」

「……!？」

それは、いきなりの引退宣言だった。

「ですから、道君とはゆっくりお茶でも飲みながらお話させていただくとして。その前に大事なことをしておかなければなりませんわね。後継指名です」

「……」

会場が、シン、となった。

「『西王母』の後継者に指名するのは、当然——、我が長子である竜吉です」

「……!？」

え？ どういうこと？ 梨蘭は？ と、皆が思った。九玄や燃燈、そして十二仙のメンバー、そして、指名された本人である竜吉以外は。

その竜吉公主がスツと檀上に向かい、西王母と場所を入れ替わった。

「ごきげんよう、皆さま。本日より、先代から引き継ぎましたこの大役、務めさせていただきます竜吉でございます。以後、よろしゅうに」

「……」

太上道君でさえ「え？　どういうこと？」という顔をしている。

西王母はしてやったりの顔だ。

実は西王母は梨蘭を後継者にするつもりは最初からなかったのである。

周囲に「そう」と思わせる細工をしてきただけで、いままで公式に発表したことはない。

最初から竜吉に任せるつもりだったのだ。

それはこの母娘が五年前から共謀してきたことである。

五年前、吉羅に娘が産まれたとき、西王母は「この孫娘は政治的に利用できる」と考えた。

竜吉はすでに内外に結婚が無理であることを周知されているが、「次期西王母の梨蘭」になら火雲宮は飛びつくだろう、と推測したのだ。

まさかの本命、秦帝の正妃の打診が来るとまではさすがに読めなかったが、い

ずれにせよ、西王母は火雲宮を釣り上げることに成功したわけである。いや、大成功だろう。

しかし。

ここで、西王母は掌を返したのだ。

梨蘭を後継にするなんて一言も言っていないよ？ と。

火雲宮サイドは「次期西王母ではない梨蘭」に興味はないだろう。

が、既に縁談話はだいぶ進んでいる。

こちらからは力関係上断れないが、向こうから「今回の話はなかったことに……」と言ってくるかもしれない。それはそれで仕方がないが、西王母の目論見としてはそのまま縁談が進んで、ゆくゆく梨蘭には天仙界のパイプ役になってもらえれば万々歳なのである。

「梨蘭が気の毒ではないか」

と竜吉は言ったが、西王母はこの一家に産まれた以上、それはノブレスオブリージュである、と撥ねつけた。

「うわちゃー、相変わらず食えないお人だわ。さて、我々はどうしよう？」

沙龍は右隣の偃月と、左隣の奏欽に言った。

偃月はしかめっ面をしたまま黙っている。

代わりに奏欽が口を開いた。

「……やられましたね。梨蘭様がフリーになっても『縁談を断られた公主』という世間の評は消えませんが、縁談が進んだとしても、後宮でひとり辛い目にあうでしょうし……」

「うん」

「ぶち壊すか？」

奏欽の隣に居る陽輝が言った。

さもそれが当然のように。

「……まあ、もうちよいの様子を見よう。チビッコたちが頑張ってることだし」

「緑麗ちゃん」

沙龍の前に座っていた敖閏が半分振り向いて声を掛けた。敖閏も今回の件では『チビッコ三人組の保護者サイド』にギリギリ入っている。なにせ、梨蘭のボディガードたる飛龍の父親だ。

「うちの僕ちゃん（※飛龍のこと）がとんでもないこと言ってきたるんだけど、なんか聞いてる？」

と、掌の携帯端末の画面をちよつと見せて言った。

「はい……？」

確かに、それは『とんでもないこと』だった。

四章 太上老君

1 敖丁伯父さん

虎型の白帝君に紅寶宮こうほうきゆうの近くまで送ってもらって、三人と四匹はまた荒野に戻って来た。

「ありがとうございます」

敖俊と明明がペコリ、と頭を下げる。

「世話になった。白虎聖君、礼を言うぞ」

梨蘭はいつもの梨蘭節である。

「気を付けてな、チビちゃんたち」

白帝君の本音としては「玄都まで連れてってやりやいいじゃねえか」なのだ
が、保護者たちの「それは甘やかしすぎる」という判断で、こんな中途半端な場
所でのお別れとなった。

あの保護者たちはそれぞれがなかなかハードな幼少期を送っている、感覚が麻痺しているのではないか、と思う。

(まあ、本人たちが案外楽しそうなのが救いか……)

『七人の小人』たちの後ろ姿を見送りながら、白帝君は溜息をついた。

紅寶宮までの道のりは半日ちよつとだったが、やはり子供の体には応えなかった。

出迎えた敖丁が眉をひそめるほど、チビッコたちは泥だらけだったし、疲労困憊の姿だった。

これはさすがに、奏欽に一言言っておかねばなるまい、と敖丁は思った。

いや、恐らく「少しはハードな旅にしてやれ」と言ったのは陽輝だろう。あの脳筋馬鹿め。今度会ったときはねちねち五時間くらい嫌味を言ってやる。

ズゴゴゴゴ、と、敖丁の身体に呪いの炎がまとわりつく。

「……伯父さん？」

明明が心配そうに見上げてくるので、極悪な表情を対子供用に戻した。

「なんでもないよ。さ、お風呂に入っておいで。……みんな一緒にいいのかな？
まあ、七歳まではいいか」

「なんで七歳までなのじゃ？」

梨蘭が聞いた。

「大昔の本（『礼記』）にね、そういうくだけりがあるんだよ。男女七歳にして席を同じゅうせず」

「七歳になったら教俊とは一緒にお風呂に入ったりしてはいけない、ということか」

「そう」

「ふむ、分かった」

梨蘭は基本的には「大人」の言うことは素直に聞く。

紅寶宮の大浴場は、水雲宮の豪華なそれとはまた違った趣の、西洋のホテルのようなバスルームだった。

龍族の彼らは、水と共に暮らし、水と共に生きているので、たとえば東の水晶宮や西の琥珀宮には至る所に『水』がある。

が、南海龍王家だけは『火』を属性にしているので、それほど水にはこだわっていない。

泡風呂ではしゃいで遊んでいる三人と四匹は、紅寶宮の侍女たちに追いかかれながら、泥だらけの体を綺麗にしてもらった。

その間、敖丁はというと、従業員用の裏門で飛龍と話していた。

「とりあえず、寢床と、握り飯のひとつでももらえれば十分だ、世話になる」
飛龍は陽に焼けた顔で言った。

「なんか……、昔と雰囲気変わったね？」

「そうか？　ところで、お前は誰だったか」

「いや、勘違いだった。全然変わってないわ」

「……？」

飛龍は基本的に敵にならない男の顔と名前は覚ええないのだ。

それは昔から変わっていない。

夕飯をご馳走してもらった後、明明是敖丁にどうやって乗り物を調達すればいいか、を聞いていた。

ここから玄都までは、子供の足で歩いて行ける距離ではないし、ポケットバイクがあつたとしても、数日かかる。まして、梨蘭と敖俊はバイクには乗れないのだ。

「今回の目的と手段ははっきりしているの？」

これは、この師弟の間でよく交わされる会話である。

「目的は『梨蘭と陛下の結婚を阻止すること』で、手段は西王母様よりも偉い最高神三人に、西王母様の計画を止めてもらうこと——です」

「うん。そうだね。それで、太上道君のところには行ったから、次は玄都の太上老君のところに行こうというんだね？ 乗り物が必要だと判断した明明是正しいよ。どういう乗り物が必要かな？」

「私たち三人と、パンダ四匹が乗れて、最低でも時速百キロは出せる、霊獣か機械の類……」

「うん。どうやって手に入れる？」

それを聞きたいのだが、敖丁はあくまでも明明に考えさせるつもりのようなのだ。

「えっと、買うか、借りるか……？」

「そんな都合のいいもの、売ってるかな？ お金は持ってる？ 持ってなければ

どうやってお金を作る？」

「……」

いつも移動は両親任せなので、これは難問だった。

「明明、梨蘭と敖俊にも聞いてみようか。ひとり考えて答えが出ないときは、ほかの友達にも聞いてみてごらん。思わぬ答えをくれる人が居るよ」

「……はい」

どうやら伯父さんは答えをくれないらしい。

明明はすごすごと子供部屋に戻って、枕投げをしている梨蘭と敖俊、そしてパ
ンダ四匹にちよつとムツとした。

明明が壁際に座り込んでいると、パンダレッドが寄ってきて、隣に座る。

「いいわね、あんた達は気楽で」

「……」

そうでもないですよ、と言いたげな視線を寄越すパンダレッドだったが、パンダイエローは明明にそう言われても仕方がないくらい大はしやぎしていた。

帝都の行政部門は火雲宮の東半分それぞれ建物を有しているが、火雲宮外にも、行政エリアはちらほら存在する。

特に刑吏府はその機能をまるごと火雲宮の外郭門を出たところに構えていた。日本人なら、皇居の桜田門を出たすぐのところにある警視庁を想像してもらえばいいかもしれない。

天界における刑吏府の力は桜の代紋ほどに強くはないが、建前では独立した捜査権を持つ。

その刑吏府の一室で、一人の中年の容疑者が二人の捜査官によって尋問されている。

別室ではもう一人の容疑者が同じように尋問されているが、そちらは従犯と見られている。

主犯はこちらだ。タレ目で無精ひげを生やした、見た目は四十代ほどの男である。

五歳児の殺人未遂及び誘拐未遂の容疑なのだが、のらりくらりと黙秘を貫いていた。

その隣の暗い部屋では、眼帯をした軍服の馬霊ばれいが、尋問の様子を見ていた。特務（※特殊任務作戦部隊）の次官である。

そして、寡黙な馬霊に腰を低くしてあれこれ言っているのは、刑吏府の現在の長官である。馬霊よりは見た目が若い、気の弱そうなエリートだった。文官以外やったことのなさそうな男である。

「通報者の手前、いくらなんでも、いまずぐ解放は無理でしょう。いくらあの者があなた方のお身内だとしても」

「……」

確かに、無理を言っている自覚はある。

最高神がわざわざ「捕獲せよ」と言ってきたのだ。それを「軍部の工作員でしたので解放します」では、太上道君の面子が丸つぶれである。

しばらくは尋問するほうもされるほうも、芝居を続けてもらうしかないか、と馬霊は思った。

ただ、もしかしたら、太上道君は全てお見通しなのかもしれない。だとしたら、これは「軍部は黙っておれ」という彼なりの脅しか。

「陛下は……、どこまでご存じなのですか」

長官が恐る恐る聞いてきた。

「甘い目算では、梨蘭様との縁談が進んでいる、ということだけでしよう。先日の西王母の演説で、その縁談もどうなるか分かりませんが」

「現実的な目算では？」

「……。近衛の連中に腕利きのエージェントが居れば、ですが、ほぼ全ての事情をご存じでしょう」

「……」

それも難儀な話だ。

この世界の統治者が、自分の縁談を巡る各派閥の思惑や行動をほとんど知っていて、素知らぬ振りでこの茶番を黙認しているのだとしたら、それはそれで不気

味だ。果たして秦帝の真意はどこにある……？

2 絶体絶命

紅寶宮で一泊して、洋風なブレックファーストをいただき、ミルクティーを飲みながらも明明はまだ考えていた。

昨夜は、キングサイズのベッドで、三人で川の字になって寝たのだが、そのとき、

「玄都までの乗り物を手に入れなきゃいけないの。どうしよう？」
と、梨蘭と敖俊に聞いてみた。

敖俊はいい案が浮かばないのかずつと黙っていたが、梨蘭は、

「誰かに頼んで、『よしなに』と言っておけばよいのじゃ」
あっけらかんと言った。

根っからのお姫様なので、こういう答えしか出てこないのだろう。
明明はため息をついて、

「あーのーねー、それができれば苦労しないんだってば。この旅は父様や母様、

あと沙龍伯母さんには内緒なんだから、私たちは自力で色々やらなくちゃいけないんだよ？ 敖丁伯父さんだって、いつまで母様に黙っててくれるか分からないんだからね」

「うむ……、そうか……」

敖俊は考える振りをして寝てしまったようだ。梨蘭はそれを見て、小声で、
「乗り物、というと、あれじゃな。飛龍みたいな？」

「……。まあ、もうちよつとグレードを下げたほうがいいとは思うけど」

「車とか？」

「うん、でも車だと運転してくれる人が居ないとね」

「うーん……、じゃあ黒焰虎を……、あ、九兄にも内緒だから、それはダメなのか」

「そう。かなりシビアだよ」

「うむ……」

シビアってなんじゃ？ 明明は難しい言葉を知っておるのう。

それにしても、乗り物か。困ったのう。

わらわは乗れるような霊獣を持っておらぬし……。

うむ、困った。

そういえば、前に飛龍がなにか言っておった気がするが……。なんだったかのう。

困ったときは……、どうするんだったか？

「そうじゃ、明日考えよう、明明……」

梨蘭は喋りながら眠ってしまった。

「……」

誰が思わぬ答えをくれるって？

明明是溜息をついた。

シンと静まり返った暗い部屋で、しばらくああでもない、こうでもない、と考えたが、やはりいい案は浮かばない。

そのまま、明明もすぐに眠ってしまった。

だから、翌朝は「終らなかつた宿題」のことで頭一杯である。

そんな明明の状態を知ってか知らずしてか、出勤前の敖丁は忙しそうに言っ

た。

「そんなに長い間は匿ってあげられないから、君たちは今日中にはここを出たほうがいいね」

「はい……」

明明是なんとなく突き放された気分である。

「僕は仕事に行くけど、そうだ、敖俊、ちよつとおいで」

と言って、敖俊だけを呼びつつ、玄関のほうに向かった。

敖俊は食べかけのロールパンを放置して、慌てて伯父さんについていく。

「明明と梨蘭を頼むよ。特に、明明是頑張っちゃうからね。お前が気にかけてあげないと」

「う、うん。分かってるよ、伯父さん」

「これ、持ってて」

と、敖丁は小さなお守りを渡した。

「……なに？」

「お前たちの力だけではどうしようもないとき、このお守りが助けてくれるか」

ら、大事に持つてるんだよ」

「うん、ありがとう。伯父さん」

少し、気が楽になった。

そうか、ひとりではないのだ。

結局、乗り物は手配できないまま、追い出されるような形で紅寶宮を出ることになってしまった。

三人と四匹は、とりあえず徒歩で南へ向かっている。

ほかに方法がないのだ。

玄都まで行く間に、小さな町とか村があるはずである。そこでなんとかするかしない。

「敖俊、さっき敖丁殿になにを言われていたのじゃ？」

「あ、うん。玄都まで、気を付けるんだよって……」

お守りのことは明明に言わないほうがいいと思ったので、適当に誤魔化した。

きつと、それを知ったら明明是「自分は信用されてない」とか「なんで俊にだけ」とか言い出すに決まっているのだ。

「……」

明明是、敖俊がなにかを隠しているのに気付いたが、敢えて追及しなかった。そんなことよりも、先の見えないこの道中をどうしようかということとで頭がいっぱいなのだ。

「そうか。次は太上老君のところじゃったな。わらわは、老君には何度か会ったことがあるのじゃ」

「そうなんだ。じゃあ、話は聞いてくれるかな」

「うむ、そうだといいのう」

しばらくはのんびり話したりしながら舗装された道路を進んだ。

玄都までの道のりはかなり整備されているので、歩くのは楽だが、その分、

『七人の小人』は目立つだろう。

一時間に一、二台は車も通るので、ヒッチハイクを試してみようかと、敖俊が言い出したが、明明が却下した。

「忘れたの？ つい一昨日、襲われたばかりなのに。車に乗っているのがいい大人とは限らないよ」

「そうだけど……。ねえ、なんで梨蘭は狙われているの？ 陛下との結婚を阻止するのって、そんなにいけないこと？」

敖俊にはそのあたりの事情がよく分からない。

「そうじゃなくて。梨蘭が陛下と結婚すると、都合が悪い人が居るんだよ」

「うむー、そうらしいのう」

「どういうこと？ 僕はよく分かんない」

「大人のジジョーってやつよ」

「あのさあ、一昨日襲ってきた人は太上道君がやつつけてくれたよね？ もうあ

あいうのは来ないの？」

敖俊のその素朴な疑問に、

「……」

「……」

そこは考えてなかった、という沈黙を見せる二人。

「だ、大丈夫よ。……たぶん」

と、言っているそばから、4WDの車が二台やって来て、梨蘭たちの周囲を取り囲むように停車した。

「え？ ……え？」

車からバタバタと人が降りてくる。十人は居ないが五人以上は居る。

三人と四匹は本能的に一か所に固まって身構えた。これは、やばい感じがする。彼らから友好的な匂いは一切しない。

「な、なんですか？ 誰ですか？」

敖俊が言ったが、『彼ら』は子供たちと会話をする気はないらしく、いまにも荷物を運ぶような手つきで梨蘭を捕まえようとしている。

「触るな、無礼者！」

「梨蘭！」

もはや、これは『敵』だと判断した明明是、五行術の型を取って技を放とうとした。

敖俊は、首にかけていたお守りを握りしめたが、

(違う！ 僕は、時間稼ぎをしなきゃ！)

しかし、双子が行動する前に、パンダ四匹がザッとフォーメーションを取るように子供たちの前に出て、大人たちから守った。

「なんだ、こいつら——」

「構うな、たいしたことはできまい」

「一人だけだ。他は無視しろ！」

そんな会話も聞こえたが、梨蘭はあれこれを思い出すのに忙しくて、それどころではなかった。

(そうだ、確かに飛龍が言っておったではないか。心底困ったときは、なにかをせよ、と。えーと、えーと……！)

大人たちはパンダを力づくでどかさそうとするも、パンダたちはひよいひよいと身軽にかわしてしまふ。拳法使いのようだった。

敖俊は、お守りを握りしめるのをやめ、

「梨蘭、明明、逃げて！」

そう叫びながら、パンダ戦隊の戦列に加わった。

(大丈夫、できる！)

よく見て、避ければいいだけ。

パンダブルーが飛び蹴りをくらわした男は、よろけながら目の前の敖俊につきみかかろうとしたが、敖俊もまたそれをヒョイとかわすことができた。

(……できた！)

「に、逃げろって——？」

大事な双子を置いて逃げられるわけはないか、と明明は思った。

「なにかを言えって……、なんだっけ……、なんか『天帝』みたいなの……？」

梨蘭はまだ考えている。

その梨蘭を守るのは小さなパンダレッドである。

いい加減、じれた一人が銃を取り出し、パンダレッドに向けたとき、明明はそれが脅しではなく、本気だと分かった。

(撃たれる！)

が、その直前に、

「そうだ、思い出した！ ——いでよへいかん！ 皇家の末裔、梨蘭がその力を

使うことを許す！」

梨蘭が叫んだ。

カツ……

あたりを一瞬包んだ眩しい光と、揺れる風になびく蒸気は、その猛々しい霊獣が放つ、鬨気そのものである。

「え……？」

尻もちをついた梨蘭は、その巨大な虎が、小さな赤いマフラーをしていることに気付いて、

「パ、パンダレッド？ お主、レッドなのか！」

「梨蘭様、この身を解き放っていただいております。この場はわたしにお任せを」

その虎が喋った。

ポカンとしていた梨蘭は、パンダブルーに抱きかかえられて、その場をさっと

移動した。

ポカンとしていた敖俊と明明も、それぞれパンダグリーンとイエローが運ぶ。

三人が半径数メートルから居なくなつたのを確認したパンダレッド、いや、『^{へいかん} 狻狂』は、久しぶりにその力を存分にふるって、男たちをなぎはらつた。

「パンダレッドって……虎だつたの？」

明明が言った。

「わ、わらわも知らなかつたのじゃ。飛龍がなにか知っておつたみたいで、いざというときは、変身を解け、と——」

「変身なんだ。あれができるのは、パンダレッドだけ？」

と、敖俊はブルーとグリーンとイエローを見ると、彼らは首をかしげるようにしている。

「ほかは聞いていないのじゃが……、分からぬ」

梨蘭はボーっとしながら、^{へいかん} 狻狂がのしのしと戻ってくるのを迎えた。

「ご苦労じゃつた。えーと、レッドではなく、^{へいかん} 狻狂でよいのか？」

「御意。梨蘭様。あのパンダの姿では本来の力は発揮できません。いましばらく

はこのまま、お供いたしません」

「そ、そうか。では、玄都まで乗せてもらえるとありがたいのう」

「は」

乗り物問題も一気に解決してしまった。

飛龍は、その一幕を岩陰からずっと見ていた。

敖丁にギリギリまで手を出すなど言われていたので（元より、それは保護者たちにも言われていることだが）、我慢していたのだが、まさか敖俊ではなく、梨蘭のほうが切り札を使うとは思わなかった。

梨蘭がちゃんと覚えていて、しっかりと危機を見定めてあの霊獣を使ったことが、飛龍にとっても誇らしい。

さすがうちの子——、という親馬鹿に近い感情である。

「……」

さて、ではあの誘拐犯たちの残骸をどうしようか。

しばらくチビッコたちのボディガード役は狴犴へいかんに任せるとして、自分はこちらの後始末をしなければならぬだろう。

まだ生きている者も居るようだし、なにか聞き出すことはできるかもしれない。

とりあえず、保護者に電話だ。

「偃月、また現れたぞ。いったいどうなってるんだ？」

「そいつらはたぶん『本物』だ。別の勢力が動いたのを知って、焦って動いたんだろう」

「ということは、この前のは『偽物』なのか？」

「らしいぞ」

その投げやりの言い方からして、偃月も腹に据えかねるものがあるようだ。

「……」

「まあ、老君の出方を見よう。もうしばらく頼む。……あ、ところで飛龍。例の件は本気なのか？ 親父さん、笑ってたぞ」

偃月は、閉会式で敖閏が沙龍に見せたメッセージを横から覗き見したのだ。

敖閏は『とんでもないこと』と言っていたが、顔は笑っていた。

「……フン」

笑ってただと？ 飛龍はそれを聞いてイラつとした。

相変わらず、余裕しゃくしゃくだな、あのクソ親父――。

「でも」

と、偃月は今度は真面目な声音で言った。

「お前があれを言い出したのは、時間稼ぎのためなんだろう？ 俺はいいと思

う。応援している。哥々も同じ気持ちだ」

「……そうか」

李姉弟がそう言うなら、突き進んでみるしかあるまい。

龍王に。

俺は。

なる。

3 玄都

「^{へいかん} 狸狽は飛べないが、地上を走る速度は車よりも早い。

梨蘭たちは一時間もかからずに玄都に到着した。

やはりちゃんと計画を立てて、ちゃんと実行することは大事なのだ、と明明は痛感した。特に今回の旅は梨蘭の命が掛かっている。慎重にやらなければいけない。

街の入り口で狸狽がきちつと座って言った。

「梨蘭様、街中ではわたしは目立ちますので、屋根伝いに移動します。なにかあれば駆け付けますが、わたしが必要なときはすぐ大声で呼んでください」

「うむ、よろしく頼むぞ」

そうして、三人と三匹になった一行は、大通りを進んだ。

「賑やかだねー」

敖俊が顔をほころばせて言った。

帝都と同じくらい華やかで賑やかな通りに、ホツとする。
「老君は八景宮というところに住んでおる。行ってみよう」
梨蘭が案内板を指して言ったところ、

トンツ

と、軽く誰かにぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい、視界に入ってたなくて——」
紅い髪の若い男性だ。異国風の顔をしている。

「い、いや、わらわも見てなかったのじゃ。すまぬ」

「あれ……？　梨蘭様？」

「……？」

見れば、若い男性は赤帝君のオフィスで見た顔である。

さらに言うなら、この前の蟠桃会でも赤帝君のかたわらに居た。赤帝君の部下
だろう。

「どうされたのです？ おひとりで？ あ、いえ、お友達もご一緒のようすが」

「あ、えっと……」

一瞬、顔を見合わせた明明が首を横に振ったので、

「ちとお忍びなのでな。気遣いは不要じゃ」

と、大人のセリフを真似て言ってみた。

「……はあ」

蓮は事情がよく分かっているが、蟠桃会最終日の西王母の演説を思い出し、なにか関係があるのだろうか、と思った。

「他言も無用にて頼む」

そう言って、『七人の小人』は強引に逃げるように行ってしまった。

いや、パンダが一匹足りないか。

「……」

さて、どうしよう、と蓮は思う。

恐らく、あのチビッコたちは保護者の目を盗んでの行脚だろう。

梨蘭はああ言ったが、上司には報告せねばなるまい。

そこに、

「蓮？ いま誰かと話してなかったか？」

制服姿の赤帝君が現れた。

「あ、星様——、謁見は終わったんですか？」

帝都以南のエリアは赤帝君の管轄なので、八景宮への諸々の報告は定期的に行っている。

最高神相手にメールや電話では失礼だからである。

今回は例の西王母の演説もあって、老君の真意を聞きたく、謁見を願い出たのだが、結局、いつもの調子で誤魔化されてしまった。

「実は、ついさつきですね……」

八景宮は、先日の弥羅宮の無防備さとは百八十度違って、小綺麗ですみずみまで人の手の行き届いた宮殿だった。

ミニ火雲宮といってもいいかもしれない。

ここに住まう太上老君は既に隠居の身だが、世間的な認識では『天帝に政治的な意見ができる唯一の人』である。

怖そうな門番に恐る恐る来意を告げ、怖そうな執事に宮殿を案内され、やっと居室に通されたときには、三人組はすっかり萎縮してしまった。

「梨蘭、よく来た。大冒険だったようじゃの」

麻色の着物を着た、やせた爺様が現れた。

頭が禿げ上がっており、なかなかひょうきんな顔をしている。

「老君、お元気でおられましたでしょうか。今日は友達二人と一緒に来ました」

「うむ、南海龍王家のところの双子じゃな」

梨蘭が敖俊を見たので、

「初めまして、太上老君。敖俊です」

慌てて挨拶する。

「明明です」

梨蘭は、途中、何度か言葉に詰まったりしながら、一生懸命ここに来た目的を

説明した。

太上老君は終始にこやかに聞いていたが、

「お前さんの言い分は分かった。が、まずは儂わしの立場をはつきりさせておこう」
そう言ったときは、場に緊張が走った。

「はい」

「実はな、梨蘭。これをいうとお主に恨まれるかもしれぬが、お主と秦帝の結婚を、お主の祖母にすすめたのは儂なのじゃ」

「え……」

「お主はいまの仙界をどう思っておる？ 仙道たちはおおむね自由に暮らしているように見えるかもしれぬが、儂から言わせれば、あれは制限された自由でしかない」

老君の話は、こうだ。

お主は残念ながら「普通の子供」ではない。
負わなければならぬ運命がある。

たとえば、お主の行動ひとつで、路頭に迷うものが実際に居る。お主が結婚す

ることで死なずに済む者が居る。それをいかんとする？

「……」

梨蘭は答えられなかった。

しかし、明明が、

「老君、恐れながら」

発言の許可を求めた。

「うむ。言うてみい」

「結婚をするかしないかの二択だけではないと思います。たとえば路頭に迷う人には、陛下と梨蘭の結婚以外の、別の解決法があるはずですよ」

「ほう？」

梨蘭と敖俊はハラハラしている。

いわば、明明は太上老君に「意見」しているのだ。

それは、天帝でさえ躊躇する行為である。

「具体案は分かりません。でも、それを考えるのが大人の、政治家の仕事であつて、五歳の梨蘭がすべき仕事だとは思えません」

「うむ……」

太上老君は笑いたくなるのを堪えながら、相槌を打った。

この子は姿といい、物言いといい、敖丁を真似しているのか。

少し悪戯心が湧いてきたので、話の腰を折った。

「明明、お主、父親のことはどう思っている？」

「は？ ……父、ですか」

いきなりそんなことを聞かれても、と明明是思ったが。

「父のことはよく分かりません。本当は軍人じゃないのかもしれないです」

「ほう？ なぜそう思う？」

「軍服を着ているところを見たことないし、毎日、仕事してる様子がありません」

「そうか。なるほど」

ここは少し、父親のことを褒めておくか、と思った。

「明明、お主の父は大した男だぞ。陽輝が居なければ、天界はなくなっていたはずだからのう」

「……」

そんな話は聞いたことがないが、あの父親がなにか褒められるようなことをしたのだろうか？

「まあ、昔の話だが、あの男の気概は変わってはいまい。お主の母は、見る目がある」

「……」

明明是太上老君の意図をはかりかねていたが、敖俊は単純に両親が褒められて嬉しかった。

敖俊は父も母も大好きなのだ。

「さて、梨蘭」

太上老君は双子から梨蘭に視線を移して言った。

「残念ながら、儂は立場上、お主の縁談を止めることはできぬ。ただ、お主たちも知っておろうが、西王母は竜吉を後継に指名したからのう。今後どうなるかは

……」

「えっ……!?!」

梨蘭が大声を出した。

「なんじゃ、知らんかったのか？」

「お、おばあ様が？ 竜吉伯母上を？」

「うむ。お主は完全にカヤの外か」

「なんと……」

梨蘭はいまいち飲み込めていない。

「次期西王母」は自分ではなかったのか。それとも、単に竜吉が時間稼ぎのためだけに間に入るだけなのか。

「既にお主の縁談話は儂の手を離れて、火雲宮の手に委ねられてしまった状態よ。さて、秦帝はどうお考えかのう」

「で、では、老君、わらわはどうしたらよいのじゃ……」

「そうじゃのう……。ひとまず時間は必要じゃろうから、儂から火雲宮のお偉いさんがたに『内定を出すのは待て』と言っておこうかのう。それを聞いてくれるかどうかは分らんが」

それは謙遜だ。老君が『待て』というなら、彼らはずっと待っているしかな

い。

「あ、ありがとうございます」

「そこから先の話は、当事者で決めるしかないのう。ただ、泰山府君は味方につけておくと心強いぞ。儂などはここから火雲宮に睨みをきかせることしかできんが、奴は火雲宮をまるごと脅せる場所に居て、なおかつその力があるからなのう」

「はい」

よく分らないが、予定は変えなくていいらしい。

次の目的地は、泰山府長官室だ。

八景宮を出たところでパンダ三匹が待っていたが、さらにその後ろに赤帝君と蓮が居た。

「……!？」

なぜここに意中の人が居るのかは分からないが、明らかに自分たちを待っていたようだ。というより、自分ひとりをも？ と梨蘭の乙女心が爆発する。

気を利かせた敖俊が、

「梨蘭、ちよつと僕らその駄菓子屋さん見てくるから」

そう言ったが、梨蘭は上の空だった。

敖俊に連れられて、明明も「架空の駄菓子屋さん」に行くことになった。当然、パンダ三匹も。蓮がその後を追う。

「す、朱雀星君、なぜここに？」

「ご機嫌麗しゅう、梨蘭様。玄都は私の管轄ですので、たまに太上老君にご挨拶

に参ります」

「そうか、四方将神の仕事か」

「はい。先ほど、蓮が——私の秘書官ですが——、梨蘭様にお会いしたというので、大事があつたらいけないと思い、お迎えに」

「他言無用と言つたのに……」

と言いつつ、顔は嬉しそうである。

「保護者のかたが誰もいらつしやらないようですが、三人だけで玄都に？ 緑麗様はご存じなのですか？」

「あ、いや、ここに居ることは伯母上には内緒なのじゃ。そのう……、色々あつてな」

まさか馬鹿正直に説明するわけにもいかない。

「そうですか……。しかし、お子様たちだけでは危険です。私が帝都までお送りしますので」

基本的に、赤帝君は堅物なのである。

子供たちだけでフラフラしているのを、放つてはおけないし、おかない。

(･･････)

梨蘭は、どうしたものか、と考えた。

赤帝君が送ってくれるというならやぶさかではないのだが、果たしてそれが許されるのかどうか。

直感的にはダメだろう、という気がする。この旅は「保護者たちには内緒」なのだ。それは貫かなければならないし、明明と敖俊の手前、自分だけが意中の人とイチャイチャしていてよいはずがない。

「そのう、朱雀星君、お気持ちとはとっても嬉しいのじゃが、こちらにはボデイガードも居るし、わらわは四方将神のお仕事の邪魔をしたくはない」

「邪魔など･･････」

梨蘭が言ったボデイガードは狸狽のことだが、赤帝君は建物の影に隠れている飛龍に気付いて、「ああ、なるほど」と思った。

文字通り子供たちだけ、というわけではないらしい。

しかし、それでも公に保護者が居ないということは、なにか事情があるのだから。

「では、こうしましょう、梨蘭様」

「む……？」

赤帝君の提案というのは、この前のときといい、梨蘭にとってはあまり好ましい展開にはならない。思わず身構えた。

「このあたり一帯は私の管轄ですから、梨蘭様の旅路に危険がないように、少し掃除をしてみられます。その間、梨蘭様は明明様たちと一緒に玄都に一泊なさつて、お待ちいただけますか？ 宿の手配などは私がいたしますので」

赤帝君もまた時間稼ぎがしたいのだ。

その間に事情を把握して、危険があるなら取り除かなければならない。

「そ、そうじゃな……、それはちよつと明明や敖俊とも相談しないと……」

「いいと思うよ」

明明が後ろから声を掛けた。

架空の駄菓子屋さんは案外近くにあったようだ。

「土地のことは四方将神にお任せしよう、梨蘭。俊も泊まりたいって言ってる」

「そ、そうか」

「ということなので、星弥様、しばらく梨蘭をお願いします。私と俊はちよつと他に寄りたいたところがあるので」

と、ペコリと頭を下げ、有無を言わず行ってしまった。

赤帝君は蓮に目くばせをして、「そちらの二人を頼む」と伝えた。蓮も頷いて了承する。

「えつと……、掃除をしなければならぬのじやろう？」

梨蘭がモジモジしながら赤帝君に聞く。

土地の掃除というのがどういふものかは分からないが、おそらく五行の気脈を整えるとかそういうことだろう、と梨蘭は思った。

「いえ、『掃除』は梨蘭様が寝ている間にしますから、大丈夫ですよ。それよりも梨蘭様、玄都は初めてでしょう？ ご案内しましょうか」

「そ、そうじゃな。頼むとするか」

梨蘭にとっては夢のようなひと時だった。

意中の人といつもととは違う街で偶然出会ってデートなど、そうそうあることではない。

カフェでお茶をしたい、と梨蘭が言うので、まずは人気の店に入ることになった。

赤帝君は玄都でも有名人なので、街を歩けば女性の視線を浴びるし、どこへ行っても大抵VIP扱いで歓迎される。

店に入れば、店主がいそいそと出てきて「ご視察で？」とか「特等席にご案内します」などというのが定番だ。

カフェでも客や給仕たちが遠巻きに視線を投げかけてきた。梨蘭はいい気分である。

「朱雀星君は人気者じゃな！」

「私ではありませんよ。梨蘭様がかわいらしいので、皆、見ているだけです」

「……」

確かにそれも間違っただけではない。

美形の赤帝君が、小さいお姫様を連れている様は絵になった。

梨蘭がプリンを食べている間、赤帝君は木佐に連絡して事の次第を調べて欲しい、と頼んだ。

なぜ梨蘭が双子と共に行動しているのか。沙龍はなにをしているのか。保護者たちが放置している理由はなんなのか――。

一方、その頃、飛龍はというと、来た道を少し戻って紅寶宮に居た。

父親の敖閏がそこを決闘場所に選んだからだ。

龍王家というのは元はひとつの血族なので、別の龍王宮を利用することはよくあるのだ。

敖丁はしぶしぶ「立会人」を引き受けなくてはならなくなった。

本来は南海龍王の奏欽が務めるべきなのだが、いま、双子の母親はそれどころではない。

いつもの三つ揃えのスーツを着込んだ敖閏は紅寶宮のシャンデリアの下で言った。

「来ておいてなんだけど、僕は決闘する気はないんだよね。どうせ勝つし。僕ちやんに怪我させるのもかわいそうだし」

カッチーン、と飛龍のプライドが刺激された。

飛龍の『龍王位を賭けた決闘の申し込み』は一応、正式なものとして認められている。

龍族で最低限の龍王の資格を持つ者なら、誰でも申し込みはできる。

しかし、過去に申し込んだ者は居ても、実際に龍王位を奪った者は居ない。世襲制に見えて、完全に実力の世界なので、龍王の強さは伊達ではないのだ。

歴代最弱と言われた北海龍王敖吉でさえ、一度、決闘申し込みをした甥っ子を下している。

まして、実力は方々でナンバーワンといわれている敖閏である。まだ飛龍が敵う相手ではないだろう。

「戦う気がないなら、なぜ来た。なにをしに来た」
飛龍が聞いた。

「まあ、ほら、一応礼儀として？ 無視するのはさすがに悪いし、あと、提案もあるし」

「提案？」

飛龍が怪訝な顔で言った。

「うん。僕ちゃんがなぜこの時期に、『龍王になる』なんて言い出したのか、分かってるつもりだよ。で、パパとしては、応援してあげたい。でも、僕は『西海龍王』を引退する気はないから。僕ちゃんは『北海龍王』になったらいいんじゃないかなって」

「はあ？」

「……!？」

飛龍だけではなく、敖丁も驚いた。

確かに、北海龍王家はずっとお取り潰し状態で、誰もそこに触れようとしな
い。

「北海龍王家を再興するってことですか？」

敖丁が言った。

「うん、再興というより、新しく作るってことになるけど、火雲宮側の条件さえ満たせば、秦様はわりとすぐOK出してくれるんじゃないかな」

四海龍王というのは、天界にとっては外交を担う、重要なポジションである。

北が欠けているいまの状態は、火雲宮にとっても本当は喜ばしいものではない。

だから、新たに北海龍王家を作るのは、双方にとって悪くないことである――。敖閏はそう考えている。

「申請してみたら？　なぜか最近はかたくなに五行術を封印してるみたいだけど、水行は使えるんでしょ？　小さい頃は宇佐うさチャン（※飛龍の母）に習ってたも
んね」

「……」

そうなのだ。

飛龍は敖閏の二行マイスターという特質もしっかり受け継いでいる。

金行も水行もとうに極めていた。

「推薦状なら書いてあげるから。欽チャンと巽凜チャンも書いてくれると思うよ？」

飛龍はしばらく口を開けて呆然としていた。

龍王家を『作る』――？

少々投げやりの偃月と飛龍の判断で、『本物』の誘拐犯たちも刑吏府に引っ張られることになった。

現場は混乱しているだろうが、知ったことではない。

彼らにも主義主張はあるのだろうが、五歳児を誘拐しようとする時点でその主義主張もたかが知れる。

水雲宮に戻っている沙龍は、数時間ごとに送られてくる吉羅の宝貝の映像を見て、子供たちの様子を把握していたが、実際に動くのは偃月と飛龍に任せることにした。

船頭はあまり多すぎないほうがいいからだ。

同じ気持ちで奏欽も帝都の自宅で待機している。

我が子のために動きたいのは山々だが、ここはぐっと堪えなければなるまい。

「辛いですね、ただ見守るだけってのは……」

画面越しの通話で奏欽が沙龍に言った。

「そうだね。でも、明明はさすがだね。あの子が居なかつたら、最初の弥羅宮にすら辿りつけずに終わってたよね」

保護者二人はパソコンの前に陣取って、お茶などしながら話しているが、本当は気が気ではないので、こうして二人で気を紛らわしている。

「私もあの子にあんな行動力があるとは思いませんでしたよ。最近伯父の真似ばかりしてますけど、本質的には父親似ですね。あれは」

「そうなんだ。それは頼もしい」

「ところで、敖開の話……聞きました？」

「ああ、龍王家を新しく作るってやつ？」

「ええ。びっくりですよ。そもそも、なぜ龍王になる、なんて……」

「うん、これが泣かせる話でね」

沙龍が笑いながら教えてくれた。

飛龍は、梨蘭が秦帝との結婚を望んでいないことを知って、自分は自分でこの縁談をぶち壊すことに決めたのだ。

しかし、縁談の相手はこの世界の統治者である。

そう簡単にはいくまい。

どう壊せばいい？

梨蘭が傷つかず、将来、好きな人と自由に結婚できるようにするためには、どうすればいい？

飛龍は考えたのだ。

そこで、天帝に張り合うとまではいかないが、そこそこ世間的に認められる地位に居る者が、梨蘭が成人するまでの時間稼ぎをすればいいのではないかと。

その地位こそが『龍王』である。

「西王母はさ、閉会式でランランの縁談相手の名前を言ってないじゃん？ それを利用して、『龍王との縁談話が進んでいる』ってことに上書きするつもりなんだよ」

「え、つまり、敖開と梨蘭様の縁談話にすり替えようってことですか」

「そうそう。それで、ランランが成人する頃、飛龍が適当に不義をする振りをして、ランランのほうから婚約を解消すれば、ランランは世間的に傷もつかずにフ

リーの身になれるっていう……」

「ええっ、それを敖開が自分で提案したんですか？　そのために龍王になるって？　なんて男前な……」

「そう。泣かせるでしょ」

「それって、もう父性愛っていうか、いや、母性愛に近いのかしら？」

「だと思っようよ？　いくらなんでも五歳児に恋愛感情は持てないでしょ」

「なんか……変まりましたね、あの子も……」

と、奏欽は、いつの間にかやんちゃな弟同然の飛龍も成長していたようだ、と感慨深く思った。

北海龍王家を新たに作るのは、自分も賛成である。恐らく、巽凜も性格上、賛同してくれそうな気がする。

三人の龍王の推薦があれば、秦帝も一考してくれるだろう。

五章 泰山府君

1 再会

木佐小次郎は心配性の赤帝君から梨蘭の件について連絡があつたので、沙龍に問い合わせをしてみたが、

「子供たちだけで行動させているのは保護者全員了承済み。心配ご無用」と言われてしまった。

それをそのまま赤帝君に伝えたのだが、彼はなかなか納得してくれない。子供たちだけでは危険だ、と言いつ張る。

木佐は苛立つ手前で、最後は直接電話で話した。

「こういうこと言いたくはないが、君のそういう優しさというか、モラルなのかもしれないが、馨みみたいなタイプには逆効果になるんじゃないか？」

「……」

赤帝君は、痛いところをつかれた、と思った。

自分も分かってはいるのだ。

女性や子供を蔑視しているわけでも、軽視しているわけでもないが、確実に

「弱いもの」だとは思っている。

だから、たまに過保護になってしまう。

そこを、確かに、沙龍には怒られたことがあった。

自分はいつからこんな風になってしまったのか――。

「分かった。とりあえずは敖開様を信用して、私は見守る側にまわろう」

そう言って電話を切ったのが五分前だ。

そして、赤帝君は、梨蘭と明明と敖俊を玄都からしぶしぶ送り出すことにした。

「くれぐれもお気をつけください、お三方」

「うむ、心遣い、痛み入る。朱雀星君、また帝都で会えるじやろうか」

梨蘭は相変わらず膝を折って視線をあわせてくれる赤帝君に、ボーっとなつて
いる。

「はい、いつでも四神府に遊びにいらして下さい」

そんなことを言ったら、梨蘭は毎日来るぞ、と明明是思ったが、言わなかった。

「星弥様、色々ありがとうございます。昨日、案内してもらったホテルは快適でした」

「敖俊様もお気をつけて」

「ありがとうございます」

明明是敖俊に便乗するようにお礼を言っただけだった。

明明には、赤帝君の持つ『火行』の気配が強すぎて、圧倒されるのだ。

「へいかん！ 行くぞ」

梨蘭が呼ぶと、赤いマフラーを巻いた大きな虎がどこからもなく現れた。

そして、三人とパンダ三匹を乗せ、風のように駆けて行った。

「あれは、りゅうせいきゅうし竜生九子の……」

西海龍王の靈獣たちではなかったか……？

なるほど、西海龍王も『グル』か、と赤帝君は思った。

赤帝君は、やはり梨蘭のことが気になったので、沙龍に一言言っておこうと思
い、水雲宮に寄ることにした。

我ながらお節介だとも思うし、嫌がられるのも分かっているが、玄都で彼らの
手配をした以上、知らんふりはできない。

（水雲宮の中に入るのは久しぶりだな）

湖畔にそびえる建物を見上げる。

以前、一度だけ入ったことがあるが、あのときは沙龍も不在だったし、打合せ
のために裏門からこっそりお邪魔しただけである。

今日は正門にまわった。

最初にくぐらなければいけない大きな門は無人だが、横にインターフォンがあ
る。それを押して、名を告げると、

「朱雀……星君、ですね」

その女性の言い方が、なにかおかしかった。

自慢じゃないが、帝都界限で『朱雀星君』と名乗れば誰でも分かるし、なんなら名乗る前に先方が分かっている場合すらある。相手が女性ならば声に喜色が混じることも多い。

しかし、今の女性の言い方は、まるでそんな人物は知らない、とでも言いたげな響きがあった。新人だろうか。

「どうぞ、門を開けます」

長いアプローチを歩く間に、玄関から女性が出てくるのが見えた。

暗い色のスーツ姿で、まるでSPのようだ。実際、そういう役割なのかもしれない、と赤帝君は思った。

「ようこそ、朱雀星君。当家の執事です」

地味なメイクの、三十代ぐらいの女性だった。顔立ちは美人の部類に入るのだろうが、それを本人が肯定していないたたずまいである。

「……」

赤帝君は女性の容姿に敏感なほうではないので、髪型や服装やメイクが変わると分らない。

昔は女性の秘書官にさんざん「星様は鈍すぎます」と言われていたくらいだ。しかし、この女性には会ったことがある気がする。

「シンイエン欣妍……?」

思わず、昔の名が出た。

言ってしまったから、赤帝君はハツとした。

それは呼んではいけない名だったのではないか――。

しかし、紗衣は微笑んで、

「いまは紗衣といえます。覚えていてくださって光栄です。どうぞ、緑麗様を呼んでまいります」

「いや、待ってくれ、シ、いや、紗衣」

「……?」

「なぜここに――、いや、それは愚問か。君がまだ生きていて、水雲宮こに居るなんて、知らなかった――!」

「……」

それはそうだろう。誰にも知らせてはいないし、知らせたい人などいなかった

た。

「緑麗様が……、以前の緑麗様が、私を死んだことにしてくださったんです」

「そうだったのか……」

赤帝君は、紗衣が当時巻き込まれた事件のことを知っている。

てつきり、あのとき、死んだのだと思っていた。確か、そういう官報も出たはずだった。あれは緑麗の細工だったのか。

「お取次ぎを？」

「いや……、緑麗様への話はまた今度でいい。それより、雨娘うじょうの話が聞きたいのだが……」

やはり、彼にはまだわだかまりがあるのか、と紗衣は思った。

「たぶん、お話ししても、聞かなければよかった、とお思になるだけだと思いますが」

「それでも、聞かせてほしい。君は、私の知らない雨娘を知っているはずだ」

「……」

赤帝君の子犬のような目に、紗衣は負けた。

まったく、何年経ってもこの男性ひとは女を知らない少年のようだ、と思う。

赤帝君は、水雲宮の厨房裏の小さな休憩室で、昔話をした。

昔、こっぴどく振られて捨てられたときの話を。

初めての恋人にわけが分からぬまま別離を言い渡され、その一月後に彼女が亡くなったと聞かされたときの話を。

それは、昔から妓楼ではよくある話なのだろう。

事実、紗衣はそんな悲喜劇をいくつも見てきた。

当時、赤帝君が美しき雨娘に入れ込んでしまったのは、大方の予想通りだったが、雨娘は既に死を覚悟していた身で、若き赤帝君の情熱を持て余していたように見えた。

さらに、雨娘は、自分を身請けしたいと言い出した赤帝君の甘さを嫌った。

「今なら、若くて至らなかつた私に、苛立った雨娘の気持ちは分かる。余命いくばくもない身で、最後に関係を持った客がどうしようもないボンボンだったの

は、雨娘にとっては不幸だったのだろう。いまさら、それを悔やんでもしょうがないが——」

「いえ、それは貴方個人をどうこう、という話ではないんです」

紗衣は、いつも一人で休憩している場所が、なんだかとても不思議な場所になっっているな、と思いながら話した。

本来なら個人的な言葉をかわず機会もないはずの二人が、こそこそと人目につかないように、思い出話をしている不思議な空間——。

「どういう意味だ……？」

「おそらく、ですが、彼女もまた、一人の妓女として世の男を恨んで、憎んでいたのだと思います。しかし、当然ながら、のぼりつめる過程では、それを周囲に見せることはなかった」

少なくとも、紗衣の理解する雨娘という女性は、そういう人だった。

高潔でも、悪女でもない。ごく、普通の市民だった。

「でも、彼女は、もうすぐ終わりそうな人生の最後の最後で、いままでずっと恨んできた『男』に復讐する絶好の機会を得てしまったんです。貴方は若くて、世

間知らずで、美貌の芸妓にのぼせあがった挙句に、実家の金で身請けすると言い出し、雨娘のプライドを傷つけた――」

「容赦ないな……」

赤帝君は苦笑した。

「申し訳ありません、言葉を選ばずに」

「いや、いい。事実だ」

天下の四方将神に、ここまでズバズバ言う一般市民もそう居ない。却って、好感すら湧く。

「つまり、そういうことなのか……」

もちろん、当時の赤帝君に悪意があったわけではない。

彼は昔も今も、真面目一筋に生きている。

しかし、その愚直さが、世の中のひねくれた部類の人たちにはカチンとくることがあるのだ。

「ただ、貴方に病氣のことを隠していたのは、彼女の優しさだったのか、意地悪だったのか、本当のところは私にも分かりません」

「……」

両方ではないのか。

赤帝君はそう思った。

美しい死でもって別れば、赤帝君はその後もずっと雨娘という初めての恋人を忘れられなくなってしまふ。適当に嫌われて別れたほうが、今後を生きる彼のためだ、と思ったのかもしれない。

あるいは、雨娘にとって赤帝君はどこまでも客だったのかもしれない。プライベートを教える義理などない、ということかもしれない。

それを、いまさら詮索したところで、確かに誰のためにもならないだろう。一息ついて、紗衣が淹れてくれた黒茶を口にする。だいぶ冷めてしまったが、まろやかで美味しかった。

「……」

開け放った大きな扉と窓からは小さな棧橋と水の風景が見える。午後の陽射しの中で、その湖面が輝いていた。

湖の畔に建てられたこの離宮は、玉帝のお気に入りだったという。緑麗がもら

い受けることになった経緯は知らないが、実は麻雀の負けが込んだ玉帝が、泣く泣く手放したという冗談のような話もある。

(まあ、あの二人ならありうるのかももしれん……)

と、まったく関係のない話の中で、赤帝君はそんなことを考えていた。

「なんだか、妙な話だ」

赤帝君がぽつりと漏らす。

「え……？」

「君はこんなに近くに居たのに、私はずっと知らなかった」

今日、このタイミングで紗衣に出会えたことは、ひとつの転機のように感じた。

「縁がなかったんでしょ」

「いや、あったから、今日、逢えたんじゃないか」

「……」

「シ、いや、紗衣。君は、ずっと幸せだったのか？ 緑麗様に拾われて、別の人

生を生きることになって」

「幸せ……かどうかは分かりませんが、生きていてよかった、と何度か思いました」

「そうか」

赤帝君は席を立つと、少し躊躇しながら聞いた。

「……独身なのか？」

「はい」

「今度、思い出話以外の話をしながら食事でもしよう、と誘ったら……来てくれるか」

「はい」

と、なにも考えずに答えてしまったあとで、梨蘭の顔が浮かび、沙龍になんと言えよいいのか、紗衣は頭を抱えたくなった。

2 泰山府へ

朱雀門の前で、三人組は佇んでいた。

「ここって、入ってもいいんだっけ？」

「伯母上や九兄と一緒に入ったことは何度もあるが……」

「さすがに許可証とか要るんじゃない？」

「うーん」

次の目的地は泰山府長官室である。

そして、役所としての泰山府は火雲宮内の行政エリアにあるらしい。この朱雀門から入って、ちよつと右に曲がり、ちよつと北上すればいい。

しかし、デン、とそびえる巨大な門は、五歳児たちを無言で威圧していた。

守衛のスタッフがチビッコたちをチラツと見たが、特になにも言わない。

そこに通りがかったのは木佐小次郎である。城下町側に所用があつて、いま戻ってきたところだ。

「……」

例のトリオ（冒険中）か、と木佐はすぐ察したが、声をかけるのはためらわれた。面倒ごとに巻き込まれたくないからである。

しかし、見てしまった以上、声をかけないわけにはいくまい。

「なにしてるんだ？ きみたち」

「げ、玄武佑君……」

嫌そうな顔の梨蘭が、嫌そうに振り向いて、嫌そうな声を出した。

「あ、こんにちは、敖俊です」

敖俊がペコリ、と頭を下げる。

「こんにちは、明明です」

明明も続く。

「はい、こんにちは」

なぜか、笑いたくなる一行だ。

「パンダが一匹足りないようだが……？」

木佐はあたりを見渡すが、パンダレッドが居ない。

「あ、ちよつと買い物中です」

と敖俊が誤魔化す。

「あの……、ここつて入ってもいいんですか？」

明明が代表して木佐に聞いた。

「どこに行きたいんだい？」

「泰山府です」

「まあ、大丈夫じゃないかな。行政エリアは特に一般人の出入りを禁止してなかつたと思うけど……」

「……」

「……」

双子の、期待に満ち満ちた視線を向けられた木佐は、やはりこうなつたか、と思つた。

「連れていけ、と？」

「お願いします！」

双子の言葉がハモつた。

「……分かったよ。おいで」

引率者のうしろを行く三人と三匹は、こそこそと固まって、ひそひそと話していた。

「玄武佑君？ 玄武佑君よね？ 四方将神の」

明明が梨蘭の袖を引っ張って聞いた。

「そうじゃ」

「かっこいいね」

と言ったのは敖俊である。

「はあ？」

梨蘭は思いつきり否定した。

「そやつは無愛想で意地悪で人のことを宅急便のように扱う、きちくじやぞ？」

「……」(聞こえてる……)

「そ、そうなの？ あんまりそう見えないけど？」

「騙されてはいかんど、敖俊。親切なふりをして、きつと、あとで法外な案内料とかを請求するばたーんじゃ」

(……)

そんなにこのチビ姫に嫌われるようなことをしてきたっけ？ と木佐は今までの自分の言動を振り返ってみた。

確かに、二歳児の頃は首根っこ掴んで叱ったこともあったし、沙龍と間違えて話しかけたこともあるし（わりとしよっちゅう）、自分のオフィスに（沙龍と共に）来たときは渋茶と柿ピーを出してもものすごく嫌な顔をされたこともあった。

（ぜんぜん大したことないような……？）

と、大人視点では思う。

しかし、子供視点では、行動云々よりも、大人の表情が大事なのである。

そう、木佐は基本的に愛想笑いをしないので、子供は怖がったり、敬遠したりするのだ。

明明と敖俊は敖丁の無愛想な顔に慣れているので、木佐のこの無表情があまり気にならない。

「泰山府はその建物だよ」

木佐は広場の先の、平屋の建物を指さして言った。

さて、どうしよう。ここから先、恐らくチビッコたちは立ち往生するだろう。手を貸すか？ いや、それくらいは自力でなんとかしてもらおうか。いつでも大人が手を貸してくれると思っただら大間違いである。——というのが木佐の心情である。

「はい。ありがとうございます」

敖俊がまた頭を下げて、きっちりお礼を言う。

明明も、ペコリと頭を下げています。

梨蘭だけはブスつとしたまま、そっぽを向いていた。

「あれ？ 誰も居ないよ？」

明明が、ガランとした建物の中を見て言った。

シンとした屋内には確かに人の気配がしないし、建物の造りもどこかおかしい。

奥のほうにエレベーターが二基と、その横に降りる階段があるだけだ。

「勝手に入っていいのかな」

敖俊が言ったところで、パンダレッドが入口に姿を現し、合流した。

「ん？ どうした、レッド」

「……」

この姿のときはやはり喋れないらしい。

梨蘭の前に立って、振り向きつつ、奥に向かう。

「明明、敖俊、レッドが案内してくれるようじゃ、行こう」

確かに狴犴の姿ではエレベーターには乗れない。

「あれ……？」

敖俊がエレベーター横の装置にいち早く気付いた。

IDカードを差し込まないとエレベーターが起動しないようになっている。

「やっぱり許可証みたいのがないと、先に進めないみたい」

「む、困ったのう。……階段は？」

「こつちもロックされてる」

明明が見に行って言った。

そのとき、パンダブルーがスツと前に出て、どこから取り出したのか、キヤツシユカードのようなものをエレベーター横の装置に差し込んだ。途端に、ウーンという音がして、機器が動き出す。

「……なんで？ そんなもの持ってんの？」

明明が聞くと、

「……！」

なにか身振り手振りで説明しようとしているが、さっぱり分からない。梨蘭を見ると、やはり首をかしげている。

「ま、いいか……」

よくはないが、いまは追及している場合ではない。

自動エレベーターで地階まで降りると、開けた場所があった。大きな洞窟のようだ。全体的にほの暗いが、そこかしこにぼんやりとした明かりはあるので、視界はきく。人もチラホラ居るようだ。

不気味な感じはしなかった。夜の街の雰囲気だ。

スタスタ歩いていくパンダレッドは、コンビニの横にある雑居ビルのような建

物に入って行った。

そこが真の『泰山府本部建物』なのだろう。

なるほど、ここにはちゃんと案内板がある。総務課だの第一会議室だの、漢字がずらずら並んでいた。

「えっと……、長官室よね？ 地下四十四階って書いてるけど……」

明明が言った。

「ここ何階なんだろう。そんなに降りてないと思うんだけど」

「うーん……」

梨蘭はキョロキョロとあたりを見回して、人影を見つけるとそちらに歩いていった。

「その人ー、すまぬ、泰山府君に会いたいのじゃが」

「いや、煙草屋の店主とかじゃないんだから、会いたいといってすぐ会えるようなもんでもないんだが、おチビさんたち」

ひよろりと背の高い男が言った。もさもさ頭の公務員である。

「なぜじゃ？」

梨蘭が無邪気に聞いた。

「社会ってのはそうなってるんだよ」

「……」

梨蘭はよく分かっている顔をしている。明明が見かねて、

「えっと、じゃあ、どうすれば会えますか？」

「さあ……、総務課に謁見願いの申請書でも提出して、二週間くらい待ってみたら、なんらかの回答をくれるんじゃないか？」

「……」

そんな悠長なことはしてられない。

「賄賂が必要ってことですか？」

「いや……、そういうわけじゃないんだが……。あんだ、すごいな。五歳でその発想ができるってことは、末恐ろしい」

公務員は彼らの正体は当然分かっていた。こちらの顔を見せたことはないが、梨蘭の顔はそれこそ生まれたときから知っている。

「ふむ、明明、ここは伯母上がいつもやってる力技とやらでいいのではない

か？」

梨蘭が提案する。

「待て待て待て——」

公務員は、梨蘭の言う『伯母上』が誰か分かるので、慌てて止めた。

「あいつの真似をするな。お前らはもう少し謙虚に生きていけ」

総務課の前でそんな風に騒いでいるので、通りすぎるスタッフがチラチラ見たり、邪魔だなあという顔ですれ違ったりするのだが、そこへ、

「……公務員？」

とコードネームを呼ばれて振り向くと、水色の髪をした碧霞元君へきかげんくんが居る。以前に比べると、少し大人っぽくなっていた。十七、八歳くらいには見える。

天空山の管理者という特殊な任を降りて数年経つので、やっと普通に年を取る体になった、ということなのだろう。

「あゝ」

厄介なところに、なんとなく厄介な人が現れた、という体の公務員だが、

「その子、馨の姪っ子でしょ。どしたの？」

「あゝ、なんか大ボスに会いに来たみたいだぜ」

「……そう。じゃあ、連れてってあげるよ。おいで」

「いや、待ってくれ。俺はいま、このチビさんたちに世間の厳しさっちゅーもんを教えてるところで……」

と、公務員はごによごによ言ってみたが、元から勝ち目は無い。

「別にいいんじゃない、そういうのは、これから学んでいけば」

「いや、だって、コネだけでなんとかなるって、オカシイだろ」

「なに言ってるの。コネってのは利用するためにあるんだよ」

「いや、だって、コネがない人間だって居るだろうが」

「なに言ってるの。コネってのは与えられるものじゃなくて、作るものでしょ。」

あなたが人界でのし上がれなかったのはコネがなかったから、じゃない。コネを作ろうとしなかったから。または作れなかったから」

バツサリ斬られてしまった。

その間、

「誰……?」

と明明がこつそり聞いていた。

「えつと……、確か、伯母上の仕事仲間じゃ」

以前、一度見かけたことがある。水雲宮になにかを届けにきた人だ。沙龍のことを木佐以外で『馨』と呼ぶ、珍しい人なのでちよつと覚えていた。

梨蘭はこの「水色の髪のお姉さん」が泰山府君の娘であることも知らないし、かつてはその父娘の仲が天界の存亡を危うくするレベルに最悪だったことも当然知らない。

なぜそんな厄介な——あくまでも公務員評で——人物がここに居るのか、というと、おそらく今の仕事の一環である。調べものをしているのだろう。興信所の仕事で、死者のリストを漁ることがよくあるらしい。

「じゃ、行こうか」

公務員をバツサリ斬って五分ほど再起不能にした碧霞元君がチビッコたちに言った。

「はい、お願いします」

敖俊が一番についていった。

「君は、南海龍王家のお坊ちやまか。金行なんだね。珍しい」

普通、南は火行なのでそう言っただけなのだが、敖俊はこれを言われると『南海龍王家の一員に非ず』と言われている気がして、毎回凹んでしまう。

「……はい」

その落ち込みを理解した碧霞元君は、

「あ、そういう意味じゃないよ。五行力をアイデンティティーにしちやダメ」

「あいでんていていー？」

「ん、要するに、その人の価値はそこにはないよってこと」

「……？」

五歳児には分からない話だ。無理もない。大人でも分かっていない人が居るくらいだ。

「まあ、そのうち分かるよ」

と、言うておくしかない。

碧霞元君は、廊下を何度か曲がって、業務用のようなエレベーターのあるところまで案内してくれた。

「ここが直通エレベーター。目当ての人は地下四十四階に居るから、行っておいで。帰りは、別の場所から出てくることになると思うから。気を付けてね」

「……？ はい」

意味がよく分からなかったが、明明是返事をしておいた。

『長官室』と、一応書いてはあるが、ドアは半分開きっぱなしだし、部屋からはなにかゴミのような機械のようなよく分からないものがあふれ出してきていて、倉庫のようでもある。電気はついていないので、中の様子はよく分からない。

「すみませーん」

明明が声を掛けて、五秒くらい耳を澄まして待ってみたが、なにも反応がない。

「入ってみよう」

暗い部屋の中に足を踏み入れたのは敖俊だった。

こういうときは、明明は怖がって行動しない。

「ふおふおふお……」

不気味な声が聞こえて、梨蘭と明明はビクツツとして固まったが、敖俊は構わず

入って行った。

「お邪魔しまーす」

「くくくく……」

不気味な声は確かに、部屋の片隅から聞こえてくる。

「あー、なにやってるんですか？ こんな暗い部屋で」

敖俊が問い掛けると、いま気付いた、とでもいうようにガラクタの中に埋もれていた老人が顔を上げた。

「ム？ ノックくらいせんか。全く近頃のキッズときたら。よいか、そもそも人の礼節とは——」

どうやら害はなさそうだと判断した梨蘭と明明も、中に入って来た。

「あー、ここ、電気どこですか？」

明明が聞くと、老人が答えた。

「入口のところにスイッチがあるじゃろうが」

パンダグリーンが見つけて電気をつけてくれた。

やはり、倉庫のような部屋だった。床は踏み場もないほどに色々なガラクタに

占拠されているし、用途不明の機械とか、設計図とか、とにかく物で溢れかえっている。

そして、問題の老人は壁一面のモニターの前で仕事なのか趣味なのかよく分からないことをしていた。

モニターには「全自動風呂掃除マシン」という文字がある。設計図らしきものと、その隣にアヒル型の機械のCGが映し出されている。

「なんですか？ これ」

敖俊はわりと怖いもの知らずなのか、純粹にそのオモチャのような機械に興味があるのか、老人に果敢に話しかけていた。

「これはのう、自動で風呂掃除して、お湯張りして、体まで洗ってくれて、さらに乾かしてくれるという超便利なマシーンじゃ」

「へえ、すごい」

「……全部機械任せって、お風呂に入る意味ないんじゃないや？」

感動している敖俊の隣で明明がボソツと言った。

「無粋な輩め。これは科学である。決して楽しようとか、特許取って一攫千金と

か、そういう話ではない」

「……」

梨蘭は、この老人が目当ての人物だと分かったので、

「初めまして、泰山府君。梨蘭といいます。お話があつて来ました」

丁寧にあ挨拶した。

「ほう……?」

モニターを見ながらCGを動かしていた泰山府君が手を止め、梨蘭をじつと見た。

「そういえば、だいぶ前に、お前さんの父親が同じようにここに来たことがあつたな」

意外なことを言う。

「父上が?」

「うむ、もう一人居た。陰陽師が」

「……?」

泰山府君が言っているのは、沙龍たちが火雲宮に殴り込みに来た日のことだ。

偃月と松木ゴローがこの地下四十四階に辿りついて、泰山府君と問答をした。梨蘭は当時のことは知らない。

「やはり似てるのう」

「……」

父親に似ている、と言われたことはなかった。梨蘭は少し不思議な気分だった。

「それで、どういった用件じゃ？」

「えーと……、わらわは、おばあ様が決めた縁談を、最高神に『ハダン』にしてもらおうと思つて来たのじゃ」

「ふむ？」

「わらわはつい先日まで、『せいおうぼ』になれと言われておつたのじゃ。それは母上とおばあ様の血ゆえ、最初から決められているのだ、と教わつた。しかし、おばあ様は、つい先日、なぜか竜吉伯母上を『せいおうぼ』にした。なぜかは分からぬが、なにかジジョーがあつたのじゃろう。しかし、そうになると、わらは陛下と結婚する意味はなくなるのではないであろうか？」

「まあ、火雲宮側にとつてはな」

泰山府君は、梨蘭の話聞きながら手元のモニターで色々調べていた。

実は、縁談話もよく知らないし、秦帝がどういう目算なのかも分からない。

「お主の主張はあいわかった。しかし、ひとつ言っておくが、ワシはこの泰山府君と中立の立場でな。中立って分かるか？」

「えつと……たぶん。右でも左でもない、ということじゃな？」

「うむ。だから、どちらの味方もできん。ただ、本音を言えばな……」

「はい？」

「正直、どうでもええわ」

「……」

「いまどき親の決めた縁談とか、古臭いじやろうが。そういう時代は終わったというのに、価値観のアップデートできん老人どもが多いな」

「……」

「お主の結婚はお主が決めればよいと思うぞ。好きにせい」

「……」

「それを、西王母に伝えるがよい。『あのジジイはこう言っておったぞ』ってな」

「……はい」

颯爽と現れて悪漢をやっつけた太上道君（ただし飲んだくれ）といい、立派な宮殿に毅然と住まう太上老君（ただし頭髮は寂しい）といい、彼らはそれなりに『最高神』の威厳というものがあつたが、この泰山府君はなにかが違ふ、と梨蘭は思つた。

色んな『偉い人』も『偉そうな人』もたくさん見てきたが、この爺様の場合には、なにかそういったものを飛び越している感じがある。

「それで、だ。ちよいとお前さんたち、丁度いいから、そこいらをちよちよつと片付けてだな、いまからこのアヒルマシーンを出力するので、実験を——」

「あ、手伝います！」

敖俊が目を輝かせていた。

4 アヒル二号

「ほれ、そこじゃ、敖坊！ カーブを利用して減速するのじゃ！」

「敖俊です！」

アヒルの背に乗った敖俊が、ロデオのようにその暴走するマシンを止めようとしているが、なかなか止まらない。

この『実験』を実質手伝っているのは敖俊とパンダグリーンだけで、梨蘭と明とパンダレッドとブルーとイエローは部屋の隅っこを適当に片付けて、おやつタイムをしていた。

「なにやってんの、あれ……」

「よく分からぬ。科学の実験じゃろう」

3Dプリンターから出てきた大きな黄色いアヒルは見た目は可愛いが、一度スイッチが入ると、水と洗剤をまき散らして暴走するだけのハタ迷惑マシンだった。

風呂桶に見立てた箱型の中で、アヒルは足を回転させながら掃除をしているつもりなのだろうが、傍目には色んなものを散らかしているようにしか見えない。

「まあでも、敖俊が楽しそうじゃ」

「うん……。五行術の授業のときはつままない顔してるけど、伯父さんの研究室行くのは好きみたい」

敖丁は南方軍大将として、軍研究所ラボの所長も兼ねている。

本人も軍人より科学者を自称していることが多いので、やはり荒事よりは研究のほうが好きなのだろう。

泡つきの水が、ペツと梨蘭の顔にかかった。

「ム……」

アヒルの暴走が止まらない。

「あれ……。なんかやばいことに……」

そのうち、水道管が破裂したかのようにアヒルの口から勢いよく水が流れ出してきた、止まらなくなった。

「実は、このアヒルは蓄積した五行力で稼働しておる。なので、そのうち止むは

ずじやが……」

落ち着き払った泰山府君が言うも、事態はかなりひどくなってきた。

「ワシは無属性なので、制御できんのじゃ。誰ぞ頼む。水行使える者はおらんか」

部屋の中に水が溜まりだし、あつという間に子供の背丈くらいになってしまった。

「い、居ませんよ！ 僕は金行だし、メイメイは火行で——」

「わらわも『無属性』じゃ！」

言っている間にも部屋の中に洪水が生じる。

このまま、ガラクタを巻きこんで押し流されてしまったら、五体満足では帰れないだろう。小さな子供ならひとたまりもない。

「たっ、泰山府君、なんとかしてくりやる！」

「うおおおおお！ そういや、ワシ、泳げんのじゃったー！」

老人は叫びながら波に吞まれてしまった。

「役に立たぬ最高神じゃな！」

梨蘭の口元にも既に水が来ている。

「うっぷ……！　へいかん！」

梨蘭が叫んだが、虎一匹でこの事態は收拾できないだろう。

「はか蚣ちふん、ひき鬚！　西海龍王が一子、敖開が命ず！　変身を解いて子供たちを守れ！」

飛龍が叫ぶ。同時に、場にそぐわぬ涼しい声も聞こえた。

「この場の全ての五行よ、我が意に従え」

その一声で、嘘のように部屋が静まり返った。一瞬で全ての水がなくなったのである。

五行的に解説するならば、同時に、三行分の力を使って場を收拾したのだ。

金行で暴れる物質を固定し、水行で水の勢いを殺し、火行の熱量で水を蒸発させたのだ。

高度な五行術である。こんなことができるのは現在、天界では二人しか居ないだろう。すなわち、四行マイスターたる碧霞元君と、五行行使者である天帝である。

「陛下……?」

「大丈夫? 怪我は?」

梨蘭は、いつの間にか自分が『お姫様抱っこ』されていることに気付いたが、それをやっている人が『この世界で一番偉い人』なので、下ろせとも言えず、固まってしまった。

「な、ないと思います」

「そう。よかった」

秦帝は、梨蘭の目から見ても爽やかな好青年で、端整な顔立ちをしている。アイドルになれそうな顔だ。

「あの……」

と、モジモジしている梨蘭を秦帝は優しくおろしてくれた。

今日はいつものような豪華な漢服姿ではなく、庶民のようなお忍びスタイルである。

「めいめい、ごうしゅん、無事じゃったか」

「うん、大丈夫だよ」

明明と敖俊は、靈獸たちに守られて無事だった。青いマフラーを巻いた『
蚣蝮』(竜)と、緑のマフラーの『螭吻』(鷹)、そして、黄色いマフラーの『
鼉肩』(亀)である。

彼らもまた『りゅうせいきゅうし竜生九子』で、本来ならば西海龍王の命にしか従わないの
が、数年前から飛龍が父親から借り受けて使役している。彼らも『次期龍王なら
従う』ということまで力を貸しているのだ。

「ひりゅう」

久しぶりに近しい人の顔を見て、梨蘭はなぜだか泣きそうになった。

「大丈夫か、梨蘭」

子供たちだけで旅をして、たまには危険な目にあつて、なんとかかんとかここ
までやって来たのだ。

「う、うむ」

抱きつくのは恥ずかしかったので、梨蘭はそつと飛龍の手を握った。ぎゅ、つ
と握り返してくれる。

泰山府君は頭からダラダラ血を流した状態で狴犴に発見され、秦帝に怒られて

いた。

「まったく。なにをやってるんですか。子供たちを危険な目にあわせて！」

「う、うむ。面目ない。途中まではうまくいっておったのじゃが……」

「どこが？ 最初から暴走していたのでは？ と梨蘭と明明は思ったが、言わなかった。」

「して、お主はなぜここに？」

泰山府君が自身の頭にバンソーコーを貼りながら聞く。

「緑麗たちが動かないので、私が動くことにしました」

「うむ、縁談の件か」

「はい」

と言って、梨蘭に目を向けた秦帝は、自身が膝を折るのではなく、梨蘭を椅子の上に立たせることで視線を合わせた。

「……」

「梨蘭公主、先走りがちな私の側近たちのせいで、君の小さな心を騒がせてしまったようだね。公の場では謝ることはできないが、ここでは謝っておくよ。申

し訳なかった」

「陛下……」

「それで、少し状況も変わったことだし、私と君の縁談は白紙に戻そうと思っ
ている。それでいいかな？」

「えっと……陛下、わらわはここのところ、ずっとおばあ様の計画を阻止するた
めに旅をしてきたが、それは陛下との結婚が嫌だから、ではないのじゃ」

「それは、分かっているよ。心配しないで」

「……」

優しく微笑まれて、梨蘭はボーっとなった。
が。

いかんいかん、『意中の人』が居る身で、ほかの男性にときめくなど、あつて
はならん。

と、律する心もある。

「西王母は私の名前を出さずにくれてくれたからね。君の名誉が傷つくこともない
だろう。……ということだ」

秦帝は、今度は飛龍に顔を向けて言った。

「敖開、君の申請は認めよう。北海龍王家を創設することは火雲宮にとっても非常にありがたい。よろしく頼むよ」

「御意——」

なにか大人同士の話か、と梨蘭は思った。

龍王——、飛龍は龍王になるのか。

そりや父親が龍王なのだから、いつか飛龍も龍王になるのだろう。

では、わらわは？ わらわは、どうするんだっけ？ 『せいおうぼ』はもうな
らなくてよいのか？

六章 グランドファイナーレ

1 紗衣

大冒険から戻った梨蘭は、丸一日眠り続けて沙龍を心配させていたが、奏欽に聞くと、双子も同じだという。

「よっぽど気を張って、疲れたんでしようねー」

奏欽がモニター越しに言っていた。

「明明是特にね」

沙龍がそう言うと、

「能力もないくせにブレイン気取るから……」

「母親は容赦ないっすね……」

明明が本当は何に向いているのか、本人が何になりたいのかは、母親でも分からない。それは今後、変わっていくだろう。

梨蘭はひとまず『次期西王母』ではなくなったが、本人が望むのなら竜吉の後継になればいいだけのこと、と、沙龍は西王母に説明された。

（一回ケチのついた王位を、ランランが望むかね）

沙龍は沙龍で皮肉っぽくそう思っている。

今回は、梨蘭の縁談が白紙になっただけで、ほかはなににも変わっていない。

梨蘭が泰山府君からお土産にもらったアヒル二号（改）が水雲宮の大浴場に居るが、スイッチは入れないように従業員に言い含めてある。

そういえば、ここ数日挙動不審の紗衣が、そのアヒルになにやら話しかけていて、スタッフに不気味がられている。

紗衣曰く『ラバー・ダッキング』というらしい。

なにも知らない人（アヒル）に要点を分かりやすく説明することで、自身の問題点の解決法を探る、みたいな話だったが、結局「正直に全部話す」という結論になったらしい。

「緑麗様、ちよつと、あの、込み入ったお話が——」

と、珍しくしどろもどろな感じで、沙龍は報告を受けた。

その後のことは特に言うまでもないが、十年後、梨蘭はというと、赤帝君と約束したことなどすっかり忘れていて、実は水雲宮にも火雲宮にもその姿はない。水雲宮では悠花が執務担当になっていて、まだ及ばないものの紗衣の代わりを一生懸命務めている。

たまに紗衣が様子を見に来るのだが、「心配ご無用」と追いつ返される。しかし、いまの家に戻っても、仕事があるわけではなく、紗衣は手持無沙汰でしようがない。

見かねた沙龍が、

「うちの興信所の仕事、手伝ってくれる？」

と言ったら、

「ぜひ！」

と力強く言われたので、いまや同僚になった。

赤帝君には怒られそうだが、知ったことではない。

紗衣と赤帝君は、静かに付き合い始め、その数年後静かに結婚し、いまも静かに暮らしているが、木佐曰く、最近の赤帝君は「苛め甲斐がなくなった」そう

で、パートナーの存在はやはり大きいのだろう。

ただ、既婚者になったことで火雲宮の女性人気はがくと落ち込んだが、その頃にはもう世代交代で、現在は、青年期を経て大人の色気を帯びてきた秦帝が女性人気を確立しつつある。

しかし、秦帝本人はというと、いまだに正妃も娶らず、最愛の恋人が世界一周の気ままな旅から戻ってくるのを待っているのだ。

恋人はたまに連絡はくれるのだが、いまは人界見物に夢中になっているらしい。

まったく父親に似過ぎではないか、と少々恨めしくも思う。

2 明明

(さあ、次はどこへ行こうか)

明明は梨蘭に頼まれた『曾祖父への土産』を手渡し、岡山での用事を終えたばかりである。

神谷藤四郎は齡九十にして、まだかくしゃくとしていたが、さすがに、

「玄孫の顔は諦めねばのう」

と言っていた。

一度、梨蘭と偃月もここに来たことがあるらしい。

正確には偃月は藤四郎の孫ではない(※娘婿の子供)ので、梨蘭もひ孫ではないのだが、彼にとって偃月は「孫同然」らしい。

なので、その子供も「ひ孫同然」なのだろう。

「お嬢さんは、これからどこへ？」

「私は気ままなひとり旅です。インドにでも行こうかなって」

「ほう。ブツダの国か。若い女の子の一人旅はくれぐれも気をつけてな」といっても、藤四郎も剣術の達人である。

明明が『普通の子』ではないこともすぐ分かった。

「はい、ありがとうございます。では、梨蘭のお爺ちゃん、お元気で！」
「……」

そう呼ばれるのが妙に嬉しかった。

「長生きするもんじやのう」

小さい頃はずっと美人の母親の真似をしたくて、髪を伸ばしていたが、最近になつてばっさり切ってみた。

しばらくは、この解放感に病みつきになりそうだと明明は思う。

恋人はそれくらいで自分を嫌いになつたりしない。

むしろ、彼はショートカットの活発な明明のほうが好きなはずである。

明明には、職務で動けない彼の代わりに自分が世界を見てくるのだという自負

もあつた。

だから、色んな国を、見てまわらなければ。

いつからか、明明は自分がなりたいのは参謀本部付きの軍人でも、煌びやかな衣装をまとった龍王公主でもない気付いた。

地位や名誉は要らない。

私は身ひとつでいろんなところに行きたい。

行事で会うたびにそんな話をして、いつもニコニコと自分の壮大な夢を聞いてくれる秦帝に、いつしか明明は憧れ以上の感情を抱くようになった。

それは秦帝のほうも同じだったらしく、いつしか二人は公認の仲となった。

(インドの次はエジプトに行つて、そのあとはヨーロッパにも行つてみたいな) 約束は一年だったけど、とても足りないね。

さて、どうしよう？ ま、いつか――。

明明がインドでスリの子供を投げ飛ばしている頃、敖俊はサロンの演奏会をすっぽかし、士官学校の同期生たちと「悪所通い」をしていた。

陽輝は「放っておけ」と言っているが、奏欽は目を吊り上げている。

「誰に似たのかしらねー？ 二人とも。一人はフラフラ世界一周、一人は十五にして遊廓に出入り!? 呆れるわ!」

「いや……まあ……」

実は焚きつけたのは陽輝なのである。

「え、お前まだ童貞なのか。いやー、俺はその年にはもう百人斬りしてたけどなあ」

と言ったのが、思春期の息子にはカチンと来たらしい。

敖俊はずっと優等生で育ってきたが、ここ最近になって、やけに父親に反発するようになった。

しかし、そこは良家のお坊ちやまなので、下町の不良のような態度は取らない。

敖丁のように理論武装してあくまでも理知で攻めてくる。

このままでは、ミニ敖丁ができあがってしまうのではないかと陽輝は陽輝で嫌がっている。

「なんだかなあ。あいつは楽師になりたいのかと思ってたが……」

小さいころは楽器に夢中になっていたのに、最近はずっと弾いていないし、親への当て付けのように士官学校に入ったのはいいが、南方軍の研究所に入りたいと言っているし、迷走中なのがばれればだ。

「まだ自分のやりたいことが分かってないんでしょ」

奏欽はそう言ってため息をつく。

「いっそ、家から出してみねえか」

と、陽輝は言ってみた。思いつきではあるが、結構いい案に思える。

「男なんてのはな、多少ハードな環境で育ったほうがイイ男になるもんだぜ。俺を見ろ」

奏欽がじつとりと視線を寄越す。

「イイ男がどこに？」

「……」

そう面と向かって言われると、立つ瀬がない。

「ウチには勝手に出て行った女の子も居るけど？」

「まあ、あれはしょうがねえ。もう嫁に出したと思って諦めるしかねえな」

「……」

確かに、明明が戻ってきたら、秦帝と結婚するのは目に見えている。

あの仲睦まじい二人を引き裂くつもりはないのだが――。

「もう一人作るか？ どうせ龍王の跡継ぎが――って心配してんだろ？」

「な、なに言って……！」

年甲斐もなく赤くなってしまうたが、いや、待てよ、と奏欽は思った。

「それもいいかもしれない……」

その日、敖俊がわずかばかりのお金と着替えと二胡を持たされて、家を追い出された理由は、

「しばらく子作りしますので、思春期のお坊ちやまはどこかに行ってなさい」
だった。

「……」

さて、どうしよう、メイメイ。

十五年育った家を呆気なく追い出されちゃったよ。

君が戻ってくる頃には弟か妹が出来ていることだろう――。

「それでここに来たの？ 下宿するのは構わないけど」

沙龍は食べ盛りの少年と共に夕飯を頬張っている。

「まあ、たぶん、両親的には『親類縁者を頼らずコネを使わず自活しろ』ってことだと思っただけですけど……なにぶん、温室育ちなので、どうしたらいいか分からないっていうか……」

敖俊少年は、容姿は奏欽に似ているので美形だが、最近はだいぶ骨格が男の子らしくなってきた。

「ああ、なるほどね」

『沙龍伯母さん』に相談に来たのか、と思った。

敖俊も明明も、小さい頃から梨蘭といっしょくたに面倒を見ているので、沙龍にとつては里子みたいなものである。

「士官学校はそのまま行くんでしょ？　じゃあさく、どっかに住み込みで雇ってもらえば？　なにか仕事しながら」

「仕事？　どんな？」

「んん、なにができる？」

「えつと……、学業は大学までの全課程を終えてるので一応、教えられますね。あと二胡も多少弾けます」

「ふむ、十分だね。募集かけてあげるよ。仕事柄、人脈は広いから任せて」ということで、沙龍が敖俊の住み込み先を探すことになった。

「ところで、リーラン、元気ですか？」

敖俊が聞いてきた。

「ああ、連絡ないけど、元気じゃないかな」

梨蘭は去年から水雲宮を出て、北の『黒曜宮』で暮らしている。

北海龍王家を創設した飛龍の手伝いをしているのだ。

龍王家を作る、というのはなかなか容易いことではない。

東の水晶宮、南の紅寶宮、西の琥珀宮から、それぞれ所縁のある者たちがぽつぽつ集まってくれたが、ただでさえ極寒の地に、放棄されていた宮殿を修繕し、そこに文字通り『一家』を築くのは生半可なことではない。

「あれって、結局、敖開様に惚れちゃったんでしょかね？」

「ランラン？ うん、どうだろうね。あれが男女の情なのかどうかは分かんないけど、昔からなんか特別な絆はあったね。まあ、飛龍はランランのお母さんみたいなものだし」

「僕は、面食いだったりーランが、敖開様についていったってことは、本気なんだろうと思いますけどね」

「ハハハ……」

確かに三白眼の飛龍は美形とはいえないが、最近はそれなりにかっこよくなつたのではないかと沙龍は思っている。

「でも、正直言うと、リーランのことより、僕は明日からの我が身が心配ですよ……」

「大丈夫だって。えり好みさえしなければ仕事はあるし」

「えり好みしたい……」

敖俊はその後、住み込み先で苦勞したりすることになるのだが、それはまた別の話だ。

帝都以北のエリアは黒帝玄武佑君たる木佐小次郎の管轄地である。

木佐が一年の半分くらい居住している鎮江楼ちんこうろうのご近所には長らく使われていない廃墟があつたが、去年あたりから飛龍が住み始め、徐々にスタッフも集まつて来た。

黒曜宮という。北海龍王家の本拠地である。

先代の敖吉のときは交流がないまますぐお取り潰しになってしまったが、まさか空位だった北海龍王に飛龍が名乗りをあげるとは。

まだなにかと人手が必要かと思ひ、修繕だの、炊き出しだのと木佐も手伝いに行くことが多いのだが、そこでたびたび会う梨蘭がすっかり様変わりしてしまつたのがまたおかしかった。

「あ、こんにちはー」

木佐の姿を見ると、愛想よく挨拶してくれる。

口調も普通の一般市民のようだ。

梨蘭曰く、

「昔のあれは一種の洗脳ですからね」

とのこと。

竜吉公主の真似をしていただけなのだ、という。

木佐は、無邪気で素直な梨蘭を見ると、沙龍が普通に育ったらこうなっていたのではないか、と思う。

「玄武、すまない。また来てくれたのか」

飛龍はだいぶ成長した。

言動もそうだが、顔つきも、体つきも、すっかり大人になっていた。

「そういえば、僕が最初に帝都に引越したとき、君に手伝ってもらったね」

「そうだったか？ もう忘れた」

売った恩は忘れ、受けた恩は忘れない、という飛龍のこの性格は、なかなか男前だ、と木佐も思う。

（見習わないとな）

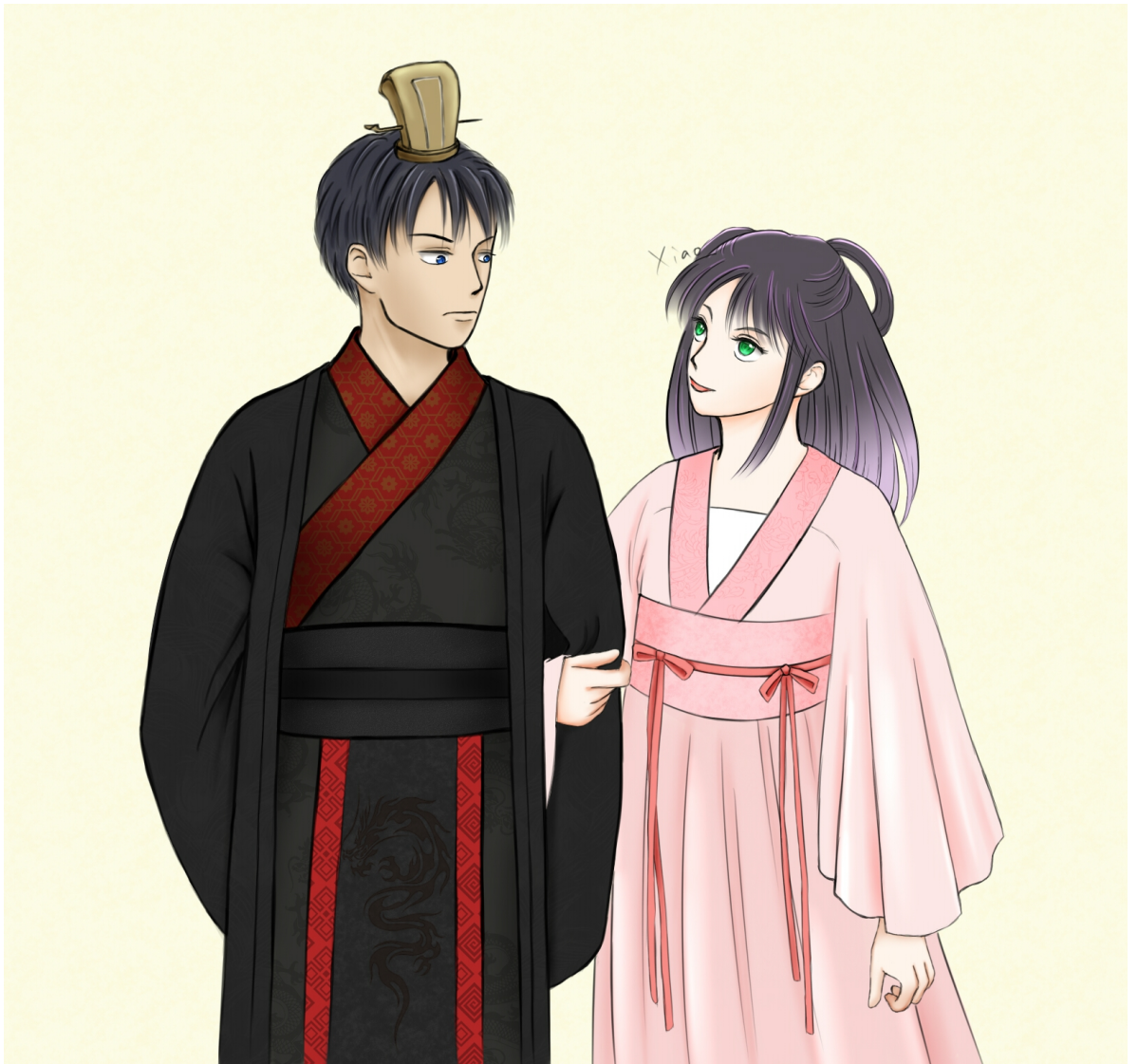
今日は黒曜宮のスタッフたちはみな大掃除で忙しく立ちまわっている。来週あたりに火雲宮の首脳陣が視察に来るとのことで、その後は、行幸も視野に入っているらしい。

新設された『北海龍王家』がちゃんと軌道に乗っているかどうか、秦帝じきじきにチェックに来るというわけだ。

「なにか食べたいものあるかい？ 夕飯は僕が作るよ」
木佐がそう言うと、梨蘭が、

「茶碗蒸しがいいですねー」
と言っていた。

(終わり)



この『梨蘭編』は、結末を考えずに書き始めたもので、私自身も最後の最後まで誰がどうなるのか分からないままでした。

それ故に書くのは楽しかったんですが、本来やっちゃいけない手法だろうな、とは思います。

梨蘭の初恋が実らないことだけは決まっていたんですが、最終的なお相手は誰になるのだろうか？ と考えたとき、実は公務員かな、となんとなく思っていました。（理由は色々あるんですが割愛）

でも、書き進めていくうちに、二人の接点はないし、飛龍は勝手に動き出し、梨蘭は要するにただ面食いなだけなんじゃ？ って気がしてきて、こうなった感じです。

赤帝君のほうは、本編のほうでちよこつと伏線張っていた紗衣との絡みがあったので、大人同士落ち着いてもらいました。紗衣は当初から言ってるだけで本当

に赤帝君のファンだったわけではないんですが、やっぱり『放っておけない男』
なんでしよう。よくも悪くも少年のような人なので。

天真先生のエピソードも書くつもりだったんですが、お子様たちで手一杯で結局ねじ込めず、もうあのドクターにはずっと片思いしてもらおうしか！

このシリーズの長編はこれで最後になると思います。さみしいですが、しばらくは絵を書いたり、短編のネタを妄想したりして過ごします。

読んでくださった方に感謝を！

二〇二二年四月十八日 小龍

「追記」

押根こむる様にウルトラかわいい梨蘭の絵を描いていただいたので、表紙に使わせていただきました！ 超・感・謝！

二〇二二年九月三日 小龍

